

大阪府茨木市

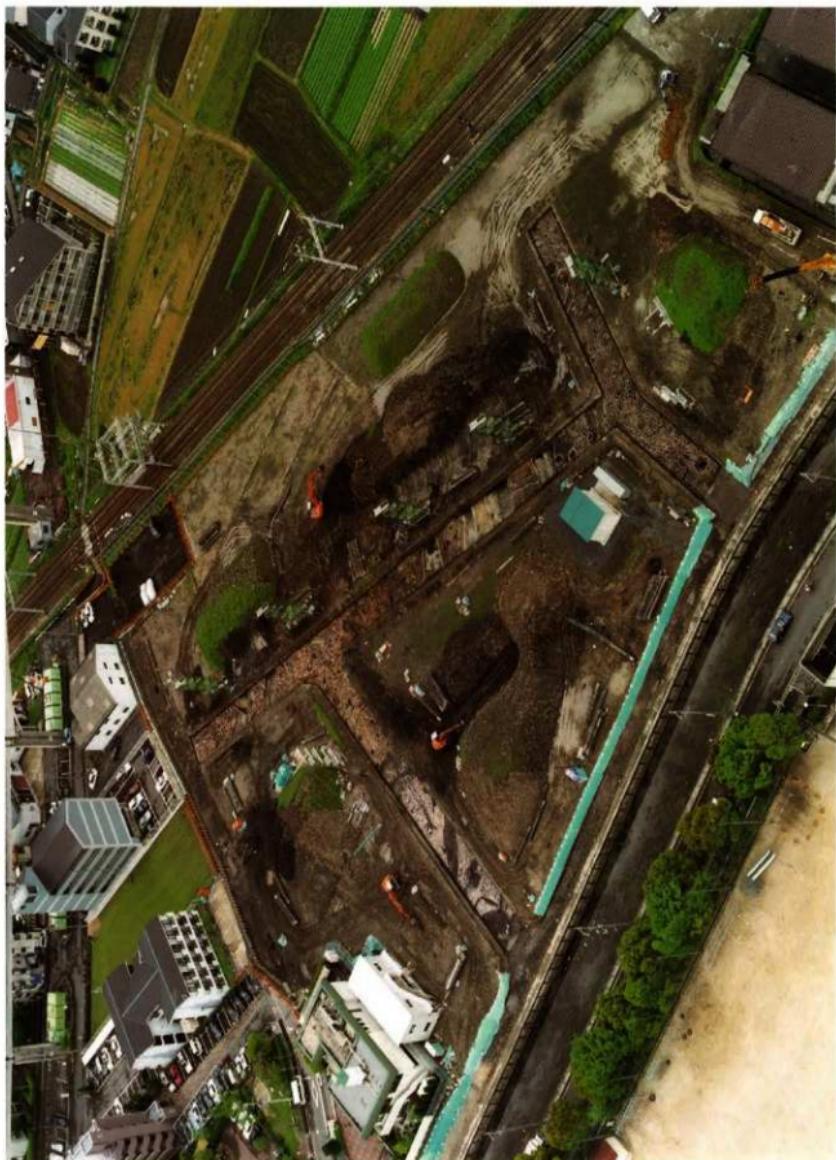
# 東 奈 良

— 東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告 —

平成15年3月



茨木市教育委員会





第1調査区SD-4・4' 弥生時代前期環濠



第9調査区SD-III・IV・V 弥生時代前期環濠



第1調査区SD-5（小銅鐸出土溝）



小銅鐸出土状況

第1關遺址SD-5出土 小銅鑄



舌

B面

A面

## ごあいさつ

私たちのまち茨木市は、北に老の坂の山並みが東西に連なり、南に淀川がゆったりと流れ、その間を幾筋もの川が南北に流れる三島平野の中心部にあります。

このような豊かな自然と温暖な気候に恵まれたこの地を舞台にして、多くの人々が生活し繁栄してきた結果、土に埋もれた文化財をはじめとして、さまざまな文化財が今に残されてきました。

こうした先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の基盤をなすものであり、残してくれた遺構や遺物は貴重な文化遺産として、先人たちの生活や文化を知る手がかりとなるものであります。

なかでも東奈良遺跡は、茨木市内における遺跡としては最大の遺跡であり、過去の発掘調査からも銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型や輔の羽口など鋳造に関する貴重な遺物が発見され、また環濠をもつ拠点集落として、弥生時代の文化を知るに欠かせない遺跡であります。

今回の報告書は、東奈良土地区画整理事業に伴います東奈良遺跡発掘調査の概要報告であります。

この調査では、弥生時代の初めに造られた数条の環濠の確認や小銅鐸の発見、多くの遺構・遺物など東奈良遺跡に関する貴重な資料を付け加えることができました。

こうした発掘調査の成果は、文化財の保存保護、活用とともに後世の人々に残し伝えていくことが、大切であると考えております。

あとになりましたが、発掘調査にあたりまして深い御理解と御協力をいただきました東奈良土地区画整理組合の方々をはじめ、御関係の皆さま方に深く感謝しお礼申しあげます。

平成15年3月31日

茨木市教育委員会  
教育長 大橋忠雄

## 例　　言

1. 本概要報告書は、東奈良二丁目・三丁目・若草町における土地区画整理事業を行う範囲のうち、都市計画道路及び区画道路部分の約 7,000 平方メートルの発掘調査の概要をまとめたものである。  
(但し、調査区の中には、すでに下水管があつたり、現在も使用中の水路、生活道路などがあり、実際の調査面積は約 6,600 平方メートルである)
2. 発掘調査は、平成 10 年 12 月 22 日から平成 12 年 3 月 31 日の期間を 4 期に分けて実施した。
3. 発掘調査で検出及び出土した遺構・遺物は膨大であるため、現在なお洗浄中のものもあるため、今回報告するのは弥生時代前期から中期の各溝についてまとめた概要報告ものである。
4. 発掘調査は、茨木市教育委員会社会教育課主査（当時）奥井哲秀、同嘱託員 中東正之、同調査員（当時）横山成己を担当者として、調査補助員 高瀬隆治・若林純也・宮本賢治・高芝稔・上田健太郎・河野英記・西井貞善・木村香織・岡阪君子・田中良子・峯松皓代・大戸井和江・高橋公子・西坂泰子・中庭月枝・原（旧姓二反長）博子が行った。
5. 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ茨木市東奈良土地区画整理組合、ダイゴ建設株式会社、星山建設株式会社、抱工務店、安西工業株式会社、株式会社サクラ建設工業、株式会社田中組の他、関係方々に御協力をいただきました。
6. 本文の執筆及び図面は、I・II・III・V 章及び各遺構を奥井哲秀が担当し、IV 章の遺物については横山成己が担当した。
7. 小銅鐸の保存処理及び分析については、独立行政法人奈良文化財研究所保存修復科学研究室の肥塙隆保氏にお願いし、その分析結果を掲載した。
8. 小銅鐸に関しては、京都国立博物館の難波洋三氏をはじめ多くの方々に、御教授を得ましたことに感謝いたします。
9. その他本書の作成にあたりましては、多くの方々の助言と御協力を得ましたことに感謝いたします。
10. 本書の編集は、奥井哲秀・横山成己が担当した。

# 本文目次

## ごあいさつ

## 例　言

第Ⅰ章 東奈良遺跡の位置と歴史的背景	1
第Ⅱ章 調査にいたるまでの経過	
第1節 東奈良遺跡の既往調査	4
第2節 東奈良土地区画整理事業に伴う経過	4
第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 調査方法	5
第2節 東奈良の調査区割と今回の調査区割	5
第Ⅳ章 調査結果	
第1節 基本層序	8
第2節 各調査区の溝遺構と層位	8
(1) 第1調査区	
SD-1、2、3、4、4'、5、5'、6、7、8	8
(2) 第2調査区	12
(3) 第3調査区・第6調査区	12
(4) 第4調査区	13
(5) 第5調査区	14
SD-1、4、5、8	
(6) 第7調査区	15
(7) 第8調査区	16
SD-I、II、III、IV、V、VI	
(8) 第9調査区	18
SD-III、IV、V、01	
(9) 第10調査区・第11調査区	20
第3節 出土遺物	
(1) 第9調査区 ①SD-01	63
②SD-IV	63
③SD-V	66
④SD-III	67
⑤SD-VI	71
(2) 第8調査区 ①SD-V	75
②SD-VI	77
(3) 第5調査区 ①SD-5	77
②SD-8	79
③SD-1	81
④SD-4	83
(4) 弥生時代前期溝遺構の形成時期と出土土器に関して	85
第V章 まとめ	100

## 挿 図 目 次

第1図 茨木市遺跡分布図	
第2図 東奈良遺跡区割図	5
第3図 東奈良遺跡発掘調査位置図(今回)	6
第4図 各調査地区構造概略図	7
第5図 第1調査区 SD-1断面図	9
第6図 第1調査区 SD-2断面図	9
第7図 第1調査区 SD-3断面図	10
第8図 第1調査区 SD-4・4'断面図	10
第9図 第1調査区 SD-5・5'断面図	11
第10図 第1調査区 SD-7断面図	11
第11図 第1調査区 SD-8断面図	12
第12図 第4調査区木製品出土状況	13
第13図 第5調査区 SD-1断面図	14
第14図 第5調査区 SD-4断面図	15
第15図 第5調査区 SD-8断面図	15
第16図 第8調査区 SD-I断面図	16
第17図 第8調査区 SD-II断面図	16
第18図 第8調査区 SD-III断面図	17
第19図 第8調査区 SD-IV断面図	17
第20図 第8調査区 SD-V断面図	18
第21図 第8調査区 SD-VI断面図	18
第22図 第9調査区 SD-III・IV・V SD-01断面図	19
第23図 (上) 第1調査区①～⑤第2遺構面	21～22
(下) 第1調査区①～⑤第3遺構面	21～22
第24図 (上) 第1調査区⑥～⑨第2遺構面	23～24
(下) 第1調査区⑥～⑨第3遺構面	23～24
第25図 (上) 第1調査区⑩～⑯第2遺構面	25～26
(下) 第1調査区⑩～⑯第3遺構面	25～26
第26図 第2調査区第2遺構面	27～28
第27図 第2調査区第3遺構面	29～30
第28図 (上・中) 第3調査区第3遺構面	31～32
(下) 第6調査区第3遺構面	31～32
第29図 第4調査区第2遺構面	33～34
第30図 第4調査区第3遺構面	35～36
第31図 第5調査区第2遺構面	37～38
第32図 第5調査区第3遺構面	39～40
第33図 第7調査区第3遺構面	41～42
第34図 第8調査区①～④第2遺構面	43～44
第35図 第8調査区⑤～⑧第2遺構面	45～46
第36図 第8調査区②～③第3遺構面	47
第37図 第8調査区⑤～⑧第3遺構面	49～50
第38図 第9調査区①～④第2遺構面	51～52
第39図 第9調査区⑤～⑧第2遺構面	53～54
第40図 (左) 第9調査区⑨～⑫第2遺構面	55～56
(右) 第9調査区⑨～⑪第3遺構面	55～56
第41図 第9調査区①～④第3遺構面	57～58
第42図 第9調査区⑤～⑧第3遺構面	59～60
第43図 第10・11調査区第3遺構面	61～62
第44図 第9調査区 SD-01出土土器	64
第45図 第9調査区 SD-IV上～中層出土土器	65
第46図 第9調査区 SD-IV中～下層出土土器	66
第47図 第9調査区 SD-V出土土器	67
第48図 第9調査区 SD-III上～中層出土土器	69
第49図 第9調査区 SD-III下層出土土器	70
第50図 第9調査区 SD-VI上～中層出土土器	72
第51図 第9調査区 SD-VI中層出土土器	73
第52図 第9調査区 SD-VI下層出土土器	74
第53図 第8調査区 SD-V出土土器	76
第54図 第8調査区 SD-V出土土器	78
第55図 第5調査区 SD-8出土土器	80
第56図 第5調査区 SD-1出土土器	82
第57図 第5調査区 SD-4出土土器	84
第58図 小銅鐸実測図	104
・出土土器観察表	86
・小型銅鐸の成分分析結果表	102

## 図 版 目 次

図版 1	小型銅鐸レントゲン画像 .....	105
図版 2	(上) 小型銅鐸 C Tによる断面図 (1) .....	106
	(下) 小型銅鐸 C Tによる断面図 (2) .....	106
図版 3	小型銅鐸 C Tによる三次元画像 .....	107
図版 4	小型銅鐸 C Tによる断面図 (1) 画像強調処理 .....	108
図版 5	小型銅鐸 C Tによる断面図 (2) 画像強調処理 .....	109
図版 6	小型銅鐸 C Tによる三次元画像画像強調処理 .....	110
図版 7	発掘調査航空写真 .....	111
図版 8	(上) 第1調査区第2遺構面 SD-1・2上層 .....	112
	(下) 第1調査区第2遺構面 SD-3上層 .....	112
図版 9	(上) 第1調査区第3遺構面 SD-4・4' .....	113
	(下) 第1調査区第3遺構面 SD-5・5' .....	113
図版 10	(上) 第2調査区第2遺構面(西側) .....	114
	(下) 第2調査区第2遺構面(東側) .....	114
図版 11	(上) 第3調査区第3遺構面 SD-2 .....	115
	(下) 第6調査区第3遺構面 SD-1 .....	115
図版 12	(上) 第4調査区第2遺構面 SD-10 .....	116
	(下) 第4調査区第3遺構面 SD-I .....	116
図版 13	(上) 第4調査区木器溜め土壤 .....	117
	(下) 第5調査区第2遺構面 .....	117
図版 14	(上) 第5調査区第3遺構面 .....	118
	(下) 第5調査区第3遺構面 SD-5 .....	118
図版 15	(上) 第5調査区第3遺構面 SD-8 .....	119
	(下) 第5調査区第3遺構面 SD-4 .....	119
図版 16	(上) 第7調査区第2遺構面(南から) .....	120
	(下) 第7調査区第2遺構面(東から) .....	120
図版 17	(上) 第8調査区第2遺構面 SD-III・II .....	121
	(下) 第8調査区第2遺構面 SX-I .....	121
図版 18	(上) 第8調査区第3遺構面 SD-III・IV・V .....	122
	(下) 第8調査区第3遺構面 SD-IV(木器) .....	122
図版 19	(上) 第8調査区第3遺構面 SD-VI .....	123
	(下) 第8調査区第3遺構面方形周溝墓 .....	123
図版 20	(上) 第9調査区第2遺構面北側(東から) .....	124
	(下) 第9調査区第2遺構面南側(東から) .....	124
図版 21	(上) 第9調査区第3遺構面 SD-III・IV・V .....	125
	(下) 第9調査区第3遺構面 SD-I・01 .....	125
図版 22	(上) 第10調査区第3遺構面(西から) .....	126
	(下) 第11調査区第3遺構面 .....	126



第1図 茨木市遺跡分布図

## 第Ⅰ章 東奈良遺跡の位置と歴史的背景

東奈良遺跡の所在する茨木市は、大阪府の東北部に位置し、淀川の北、丹波高原の一部をなす老の坂山地の麓に広がる三島平野の一角にあり、南北約17Km・東西10Kmの広範な地域を占めている。その地形は南北に長く、東西に短い長方形をなしている。北部の山地部のほぼ中央部には、竜王山（標高約510m）が、さらに市内最高峰の石堂ヶ丘（標高約680m）が、豊能町との境にそびえている。

北部の山地部からその源を発している安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川は、市内を縦断するようにゆっくりと南へと流れている。

また京都から九州太宰府を結ぶ古代の山陽道の一部である西国街道が、市の中央部を東西に貫き、重要な交通路として発展し、今も大きな役割を担っている。

地名「いばらき」という呼称はいつ頃からなのかは明らかでないが、茨木という地名のもっとも古い記録は、勝尾寺文書中にでてくる鎌倉初期の正治2年（1200年）11月3日の神国正田地売券に「嶋下郡中条茨木村四条七里六坪」とあるのが、「茨木」の初見である。

こうした地理的環境のなか、市の南部に位置する東奈良遺跡は、東奈良、奈良、沢良宣西、天王、若草町にまたがる弥生時代から中世に至る大規模な複合遺跡である。

遺跡は、西方に大阪層群で形成された千里丘陵、東方は茨木川にはさまれた標高6m前後の沖積平野上に立地している。

明治初年には、遺跡の西方の吹田市山田別所から銅鐸1口が出土していることも特記すべきことであり、後の銅鐸の鋳型の発見とのつながりが考えられるものである。昭和46年（1971年）、遺跡内を流れる小川水路の改修工事で遺跡が発見されて以後、幾多の発掘調査が行われた結果、昭和48年から翌年にかけて発見された銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型、輪の羽口など鋳造に関する遺物の発見により、この地域の拠点集落として知られるようになった。

三島地域において人々の足跡がみられるのは旧石器時代の頃からで、市内の太田や上穂積、さらに安威川東岸の高槻市の郡家今城遺跡や塚原遺跡でも国府型ナイフ形石器が発見されており、数万年前からこの地を舞台にした人々の活動が伺えるものであるが、その数は決して多くはない。

縄文時代のものとして最も古いものは、東奈良遺跡から出土した前期末頃の爪形文の小さな土器破片や後期から晩期にかけての石棒などがあるが、遺構に伴わないものである。集落遺跡として知られているものに晩期の耳原遺跡がある。

この遺跡は、標高23m前後の洪積台地上に位置し、西方の茨木川と東方の安威川にはさまれた自然地形に恵まれたところに立地している。

昭和54年に行われた発掘調査の結果、縄文時代晩期の深鉢棺16基が発見され、三島地域における人々の歴史に新たな1ページを付け加えた。

また同時期の頃、平野部では自然流路の水をせき止めるための井堰が発見された牟礼遺跡が安威川右岸に位置している。

さらに近年の発掘調査の結果、太田遺跡や西福井遺跡・総持寺遺跡・新庄遺跡・郡遺跡（畠田地区）などからも縄文土器が発見されている。

弥生時代に入ると全国的に遺跡の数が増えるが、三島地域においても例外ではない。

前期前半から始まる東奈良遺跡や日垣遺跡、高槻市の安満遺跡などが三島地域を流れる淀川中流域の平野部に、少し遅れて郡遺跡などがこの地域の拠点集落として成立し、後の時代に重要な役割を果たす遺跡となる。

中期以降には、前期から続く拠点集落の大規模化などによって分村したと考えられる集落として、中条小学校遺跡・駅前遺跡・倍賀遺跡・中河原遺跡、また新たに丘陵部周辺に見付山遺跡・太田遺跡・宿久庄遺跡、さらに低地の平野部にも舟木遺跡・溝咲遺跡などが集落として成立するが、これらの遺跡は一部を除いて小規模化の傾向を示しており、東奈良遺跡などの拠点集落と利害関係や依存関係を保ちながら独自の方向へと進んでいったと考えられる。

古墳時代に入ると、この地域は三島古墳群と呼ばれる有数の古墳群地帯として知られ、古墳時代の初めから終末期までの各時期の古墳が、平地部と山地部の境の丘陵部や裾部に築造されるようになる。

前期古墳としては、佐保川右岸の丘陵上に紫金山古墳、佐保川と安威川に挟まれた丘陵上に將軍山古墳、さらに安威川左岸の東方の丘陵上には高槻市の弁天山古墳群などがみられる。

紫金山古墳は、全長100mを超す前方後円墳で、後円部中央には竪穴式石室を持ち、その内部から、12面の銅鏡のほか鍬形石・車輪石・貝輪・筒形銅製品・短甲・鉄刀・鉄剣・鉄鎌・鉄斧・鉄鎌など多くの副葬品が出土している。

將軍山古墳も同様に、全長100mを超す前方後円墳で、後円部中央には竪穴式石室を持つ。残念ながら内部は盗掘にあっており出土遺物は、玉類・鉄剣・鉄刀など極わずかである。しかし三段に築かれた封丘には葺石が敷かれ、円筒埴輪や形象埴輪なども並べられていた。

また前期後半には、安威の花園山の丘陵部に、割竹形木棺を有する粘土椁をもつ安威0号墳や1号墳が築かれるようになる。

中期になると、全長226mで周囲に濠をもつ立派な前方後円墳の太田茶臼山古墳（継体天皇陵）が台地上に築造される。

さらに中期後半から後期初頭にかけて、平地部の駅前遺跡や春日遺跡、段丘上に位置する総持寺遺跡などで、封丘などの上部構造は後世に削平されて無くなっているが、基底部

の溝のみが残された古墳も発見されている。

後期になると、青松塚古墳や南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳などがある。中でも耳原古墳は、三島地域最大の横穴式石室を持つ円墳で、石室内部には、凝灰岩で造られた形式の異なる2基の石棺が安置されている。奥に置かれているのが家形組合せ式石棺で、羨道近くに置かれているのが家形削抜き式石棺である。また、新屋古墳群・安威古墳群・長ヶ淵古墳群など群集墳が築かれる。

安威古墳群は、前期後半の安威0・1号墳と同じ尾根上に位置し、約20基からなる古墳群で、新屋古墳群は、終末期古墳も含めた約35基からなる古墳群である。

このほか初田1古墳やカマド塚である上寺山古墳、藤原鎌足の墓といわれる阿武山古墳などの終末期にあたる古墳がある。

律令制の時代に入ると、茨木市を含めた摂津職には、管内に12の郡があり、このうち茨木市は鳴下郡に属するようになる。鳴下郡は、新野・宿人(久)・安威・穂積の4郷からなり、鳴下郡衙は不詳ながらも、市内には郡や郡山という地名が残っていることから、この近くと推定されている。また大化改新以後、氏族寺院の建立が盛んとなったが、茨木市域においても7世紀後半頃に建立されたと考えられる太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺などの有力氏族寺院が存在していた。とくに太田廃寺からは、塔婆心礎とその内部に納められた舍利容器一具、さらに複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが発見されている。

平安時代には、茨木市域の多くは、摂関家の藤原氏の荘園であったことが文献から伺えるが、中世になると藤原氏の勢力が衰え、変わって荘園領主は春日大社や興福寺に移り、15世紀中頃まで両社寺の支配が続いていた。市内に春日神社が多いこともこうした支配を裏付けている。また近年の玉樹遺跡の発掘調査においても、堀に囲まれた屋敷跡が発見されたことは荘園支配層の存在を伺わせるものである。

他にも新庄遺跡からは、9~12世紀の河川や掘立柱建物跡、宿久庄遺跡においても、9~10世紀頃の掘立柱建物跡や13世紀後半頃の掘立柱建物跡などが発見されていることなどから、今後の発掘調査において、この時期の新たな資料の発見が期待されるところである。

#### \* 参考文献

1. 「茨木市史」 昭和53年11月3日 茨木市役所
2. 「東奈良」発掘調査概報Ⅰ 昭和54年6月1日 東奈良遺跡調査会
3. 「東奈良」発掘調査概報Ⅱ 昭和56年2月20日 東奈良遺跡調査会
4. 「平成8年度発掘調査概報」 平成9年3月31日 茨木市教育委員会

## 第Ⅱ章 調査にいたるまでの経過

### 第1節 東奈良遺跡の既往調査

茨木市南部の低湿地に位置する東奈良遺跡の発見は、昭和45年から同47年にかけて行われた遺跡のはば中央を流れる小川水路の改修工事に伴ってのことである。

昭和46年3月、順次行われてきた改修工事が、東奈良二丁目で行われたときに、機械で掘りあげられた土砂の中から多量の遺物が発見されたことから遺跡の存在が確認され、その地名から「東奈良遺跡」と名付けられたのである。

おりしも昭和45年、隣市の吹田市千里丘陵で開かれた日本万国博覧会を契機に、宅地造成、交通網の整備がなされていく中で、翌46年東奈良遺跡周辺にも大規模な高層住宅開発が計画されたことから、遺跡の長期にわたる発掘調査の必要性が生じた。

このため同年7月、大阪府教育委員会と茨木市教育委員会との協議のもと『東奈良遺跡調査会』が結成され、本格的な発掘調査が始まったのである。

同年7月20日から始まった寮建設に伴う調査では、弥生時代の溝・円形大形土壙や袋状土壙などのほか、弥生時代中期の土器、古墳時代の土師器、須恵器などの遺物が発見された。

その後の調査でも、弥生時代の方形周溝墓・溝、古墳時代前期の大溝・火災にあった竪穴住居跡・三列で市松状に並んだ土壙墓群の検出のほか多量の遺物。とくに大溝から出土した土器は、弥生時代から古墳時代への過度期のものであり、貴重な資料となった。

とくに昭和48年から翌年にかけて発見された銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型をはじめ、轔の羽口など鋳造に関する遺物の発見は、この遺跡の重要性を認識させるものであった。

その後の調査の結果、東奈良遺跡は、環濠集落と呼ばれるムラの周囲に濠をもった集落であり、北摂地域の拠点集落であることが判っている。遺構・遺物についても弥生時代前期から次の古墳時代前半、そして中世までいたるものが出土している。

### 第2節 東奈良土地区画整理事業に伴う経過

今回の発掘調査は、平成9年10月29日、茨木市土木部都市計画課から遺跡のはば中心部と考えられる東奈良二・三丁目・若草町の一部において、区画整理事業のための都市計画道路が計画決定されたことに伴う概要が教育委員会に知らされたことに始まる。

しかし從来の調査結果からこの地域は遺跡の中心部にあたること、また調査面積も7,000平方メートルと広いことから、遺跡の保存対策や公開、発掘調査の期間や人員、発掘経費、出土遺物の保管問題など、遺跡の性格をより把握するには重要な地域であることから慎重な協議が関係部課の間で行われた。

その結果、平成10年12月14日、茨木市教育委員会と茨木市東奈良土地区画整理事業組合とで、東奈良遺跡の発掘調査について協定書を締結し、同年12月22日から調査地域

の耕土の除去作業を行うこととし、翌年3月末日まで、幅6mの区画道路1号線（第1調査区）、区画道路2号線（第2調査区）の調査、その後の区画道路（3・4・5・6号線）や幅16mの都市計画道路（第7調査区から第11調査区）については、平成12年3月末日までの2期に分けて調査を行うこととなった。

### 第Ⅲ章 調査の概要

#### 第1節 調査方法

調査は、区画道路（幅6m）のうち第1調査区・第2調査区、第4調査区、第3調査区・第6調査区、第5調査区の順に調査を行うこととし、幅16mの都市計画道路については、その全体を第7調査区、第8調査区、第9調査区、第10調査区、第11調査区に分けて調査を行った。なお調査区内の第7調査区を流れる現水路については、農業用水路として利用中であることから調査対象から外した。また、第3及び第6調査区の小川水路（東側）に沿っては、すでに下水管が埋設されており、幅約3mの調査区となった。さらに第10調査区と第7調査区との間は生活道路が通っているため、調査対象からはずした。

重機による掘削は、調査後の埋め戻しの関係から現耕土と床土を分けて掘削し、下層の遺物包含層以下は人力掘削で行った。排土は場内処分とした。

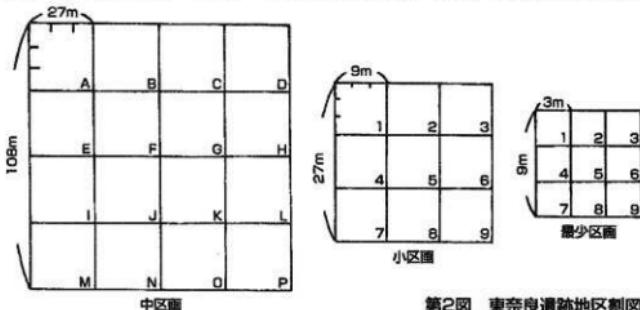
#### 第2節 東奈良の調査区割と今回の調査区割

東奈良遺跡の地区割りは、昭和47年11月に地図上と現地状況をあわせた条里地割りの畦畔を拾い、磁北からN-6°28' - Eに振ったものを基準軸（0）としているので、今回の調査区もそれを基準とした。

最大区画108m、中区画27m、小区画9m、最小区画3mの単位で実施し、各々の区画の基準点は東南隅とした。

区画の呼称は、最大区画が南北にA～N、東西を1～10としている。（第2図）

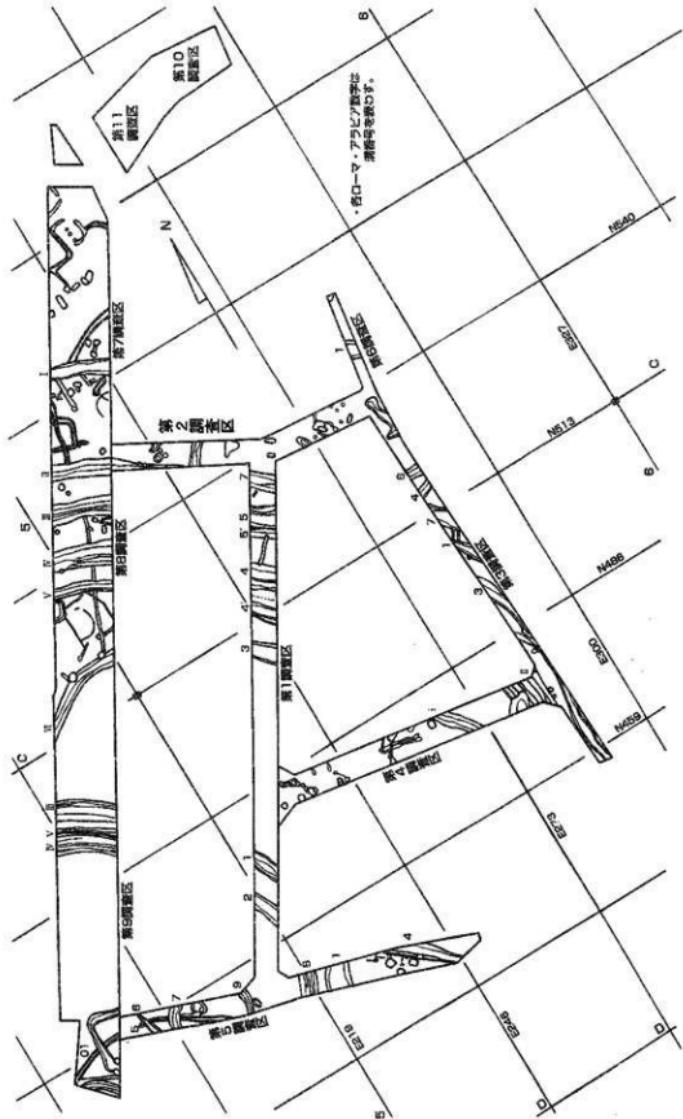
なお今回の調査区は、道路という狭長な範囲であることから、便宜上第1調査区から第11調査区として調査を行い、且つ9mを1区画として①から順に番号を付した。



第2図 東奈良遺跡地区割図



第3図 東奈良遺跡発掘調査位置図（今回）



第4図 各調査地区 遺構概略図（第3遺構面）

## 第IV章 調査結果

### 第1節 基本層序

全調査区における調査前の現状は田圃の状態であり、耕土表土面では表面採集が可能なほど土器の破片等が散布している状態である。

この耕土面の標高は、T・P 7.3 mから7.5 m前後である。

最上面の耕土及び直下の床土の下は、厚さ約15 cmの褐色土層（第1包含層）で、弥生土器・須恵器・中近世の遺物を含む層である。この面（第1遺構面）からは、井戸などの遺構がみられる。

その下層は、厚さ約25 cmの黒褐色粘土層（第2包含層）で、弥生時代の遺物がほとんどであるが、若干の須恵器もみられる。この第2包含層を取り除くと、弥生時代中期の生活面（第2遺構面）となる。

その下層に、厚さ約25 cmの黒色粘質土層（第3包含層）が堆積し、この第3包含層を取り除くと、弥生時代前期の生活面（第3遺構面）となる。

全調査区において、この3層が基本層となるが、場所によっては第1・第2包含層が削平されたり、間層を挟むところもある。

### 第2節 各調査区の溝遺構と層位

#### （1）第1調査区

幅約6 m、長さ118 mの南北方向の調査区で、南から北へ13区画（1～13区）に分けて調査を行い、第1・第2・第3遺構面が検出されている。

第1遺構面においては、井戸や曲げ物のほか若干の不定形土壙がみられるが、その量は少ない。

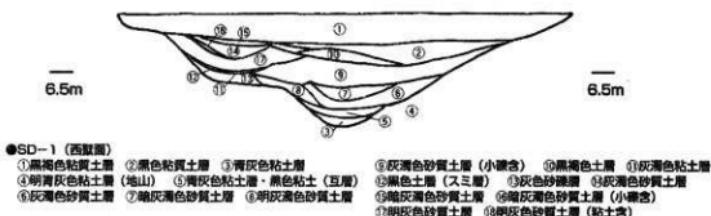
第2遺構面においては、方形周溝状遺構1基、溝、井戸状遺構、不定形土壙、木棺墓1基のほか多数の柱穴が検出されている。とくにSD-5の最底部からは、舌を伴った小さな銅鐸が出土している。また8区から北側11区にかけて、細かく割った土器片を敷きつめた整地層が確認できた。おそらく軟弱な地盤を固くするために、敷きつめたと考えられる整地層である。この整地層の遺物密度を知るため、2 m四方内にある遺物の点数を数えると、土器片1742点、サヌカイト3点、小石152点であった。

第3遺構面は、主に溝（環濠）が検出されたほか、多数の柱穴が検出されている。

各溝のについては、第2遺構面からのものもあるが、まとめて記すことにし、遺物については、第3節の遺物の項を参照。

SD-1は、幅約4.7 m・深さ約1.16 mの溝で、弥生時代前期の環濠の一部である。溝内部の堆積層はほぼ16層に分かれると、大きく上層と中層・下層の3層に分かれること。

溝の下部はV字形を呈しており、その溝幅を復元すると幅約2mとなる。下層からは弥生時代前期の土器が出土していることから、弥生時代前期に掘られた溝が埋まつた後に、幅広く掘返されたものと考えられる。上層の黒褐色粘質土層は、上面から約0.25mの深さまで堆積し、弥生時代中期から古墳時代前期の土器の出土がみられる。



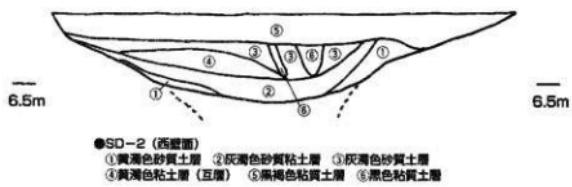
第5図 SD-1 断面図 1/50

SD-2は、SD-1とほぼ並行して掘られた溝で、幅約4.8m・深さ約0.85mを測る。内部の堆積層はあまり複雑ではない。

上層の黒褐色粘質土層(厚さ約0.3m)中には、自然堆積等で埋もれた溝の凹みに破壊された土器片が土器捨て場の状態(図版-8上)で検出されている。出土遺物は、弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物がみられる。環濠の一部である。

下層は、灰色濁色砂質層及び砂質土層が互層の状態で堆積し、溝の中間層には、柱穴などの生活痕がみられる。

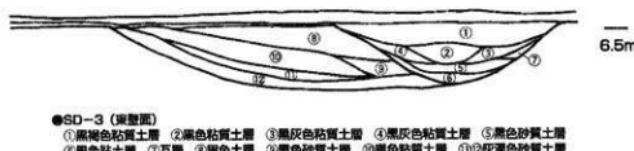
このSD-1とSD-2は、第5調査区及び第9調査区でもみられ、さらに昭和52年7月から翌年にかけて発掘調査された国鉄貨物引き込み線(当時)に伴う調査で検出された溝-25・27へと続く溝である。



第6図 SD-2 断面図 1/50

SD-3は、弥生時代前期の溝が埋まつた後、その一端を前期の溝と重複する位置に新たに掘り返された溝である。遺物取り上げについては、いずれもSD-3としてとり上げ、層位によって分けている。

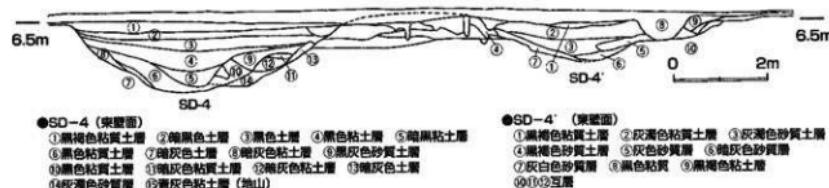
溝の規模は、下層の弥生時代前期溝が幅約4.6m、深さ約0.7mで、環濠の一部である。上層の中頃以降の溝が、幅約2.4m、深さ約0.6mである。



第7図 SD-3 断面図  $\frac{1}{50}$

SD-4は、幅約5.7m、深さ約1.4mの規模を測る大きな溝である。弥生時代前期の環濠である。この溝の約3m南側にあるSD-4'との境には、ほぼ削平されているが黄色粘土層と黒色粘土層の互層が堆積している。この堆積層は、SD-4を掘削した際に、溝の南側に土盛りしたと考えられるものである。この堆積層を除去すると、溝と並行にピット状遺構が検出されたことから、盛土した土砂が崩れ落ちないように杭を打ち込んだ可能性を考えられる。溝内の堆積層からも、溝の内側（南側）から土砂が堆積している状態がみられる。溝内部からは、弥生時代前期の土器のほか、食用にした貝殻や鍬の未製品や堅朶の半壊品等の木製品が出土している。

SD-4'は、上層からは確認できなかった溝で、SD-4の南側に位置し、幅約4.5m、深さ約0.9mの溝である。SD-4と同時期に営まれた溝で、この2条の溝は、平成3年に、ここから約100m東南で調査された弥生時代前期の溝に続く溝である。

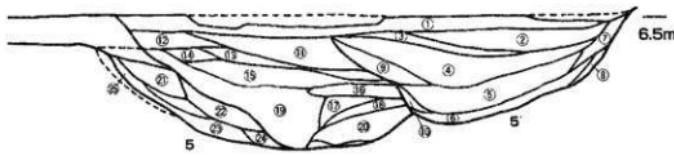


第8図 SD-4・SD-4' 断面図  $\frac{1}{100}$

SD-5は、幅約4.0m、1.3mの溝であるが、南側はSD-5'によって切られているため全体の規模はあきらかではない。弥生時代中期以降に掘られた溝が再度掘り返され、さらにSD-5'がほぼ同位置に掘られたものであることが断面から伺える。

平成11年4月28日、この溝の最下層である黒灰色粘土層を除去中に、その最底部から、弥生時代中期後半の土器とともに、鐸身をほぼ寝かした状態で舌を持った小銅鐸が出土した。

SD-5'は、SD-5を掘り返したと考えられる溝で、幅約3.1m、深さ約1.2mを測る。

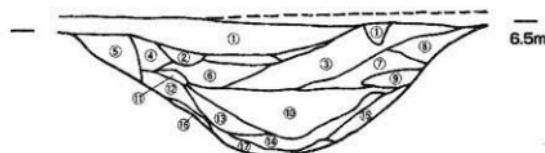


- SD-5・5' (東面図)
- ① 黒褐色粘質土層 ② 黒色土層 ③ 黒色土層(スミ泥) ④ 黒色粘土層 ⑤ 黒灰色粘質土層 ⑥ 暗灰色粘土層
- ⑦ 互層 ⑧ 黄褐色砂質層 ⑨ 暗灰色粘土層 ⑩ 暗色砂質層 ⑪ 黑色粘質土層 ⑫ 互層 ⑬ 黑灰色土層(砂含)
- ⑭ 暗灰色土層 ⑮ 暗灰色粘土層 ⑯ 黑褐色土層 ⑰ 黑褐色砂質粘土層 ⑱ 黑灰色砂質粘土層(砂多)
- ⑲ 黑灰色粘土層 ⑳ 黑褐色砂質土層 ㉑ 黑色土層 ㉒ 暗灰色粘土層 ㉓ 灰色砂層 ㉔ 暗灰色粘土層 ㉕ 黄褐色砂層

第9図 SD-5・5' 断面図 1/50

SD-6は、SD-4とSD-5'溝に対し、ほぼ直交する溝で幅約1.2m、深さ1.0mのV字形の溝である。溝内からは、若干の弥生時代中期後半の遺物が出土している。

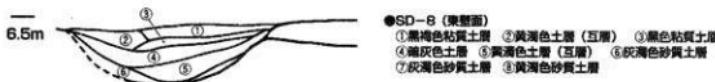
SD-7は、第1調査区の最も北側にある溝で、幅約4.0m、深さ約1.3mの単一の溝である。溝内からの遺物は少ないながらも弥生時代中期後半の遺物が出土している。



- SD-7 (東面図)
- ① 黒色粘質土層 ② 黒色土層 ③ 黄褐色土層(互層) ④ 黑褐色粘質土層 ⑤ 黄褐色粘質土層(互層)
- ⑥ 暗色粘質土層 ⑦ 暗灰色粘土層 ⑧ 黄褐色粘質土層(互層) ⑨ 黄褐色砂層 ⑩ 黑褐色粘土層
- ㉑ 暗褐色砂質土層 ㉒ 灰色砂質粘土層 ㉓ 黑灰色砂質粘土層 ㉔ 黑褐色粘土層 ㉕ 黑灰色砂層
- ㉖ 黑褐色砂層 ㉗ 暗褐色砂質粘土層

第10図 SD-7 断面図 1/50

SD-8は、幅約2.0m、深さ約0.6mの小さな溝である。その西側は、SD-5と合流する溝である。



第11図 SD-8 断面図 1/50

## (2) 第2調査区

幅約6m、長さ約60mの東西方向の調査区で、北から南へ7区画(1~7区)に分けて調査を行い、第1・第2・第3遺構面が検出されている。

第1遺構面においては、井戸のみが検出されている。

第2遺構面においては、1区から2区にかけて古墳時代後期頃の直径約12m、溝幅約0.4m、深さ約0.15mの円形の溝(半分は調査対象外)を検出したほか、5区においても規模は小さくなるが同様の円形にめぐる溝を検出した。また井戸状遺構、土壙などを検出した。

第3遺構面においては、西から東にかけて約0.7mの自然地形による傾斜がみられるなか、南北に走る溝が1条検出されているほか多数の柱穴がみられる。遺構の密度は第1調査区に比べると少なくなるが、このことは環濠の外側であり且つ傾斜地であることと関係するものと思われる。

## (3) 第3調査区・第6調査区

両調査区は、全調査区の最も東側の南北調査区である。第3調査区の北側延長が第6調査区である。本来は幅約6m、長さ約140mの南北方向の調査区であるが、幅については、この調査区のすぐ東側に並行して流れる小川水路との間に、下水管が並行して敷設されており、さらに第3遺構面が現地表面下約2mと深いことから安全面から法面をつけた結果、第3遺構面では幅約2mの調査となった。

第3調査区の第1遺構面はすでに削平されていた。第2遺構面、第3遺構面では、第1調査区から続く溝が検出されているが、今回の報告では、各溝の方向性だけを推察するにとどめたい。

また第6調査区も同様で、溝1条と数個の柱穴と土壙を検出したのみであった。

今回は、この調査区は遺構平面図の報告のみにとどめる。

#### (4) 第4調査区

幅約6m、長さ約6.4mの東西方向の調査区で、西から東へ8区画（1～8区）にかけて調査を行った。

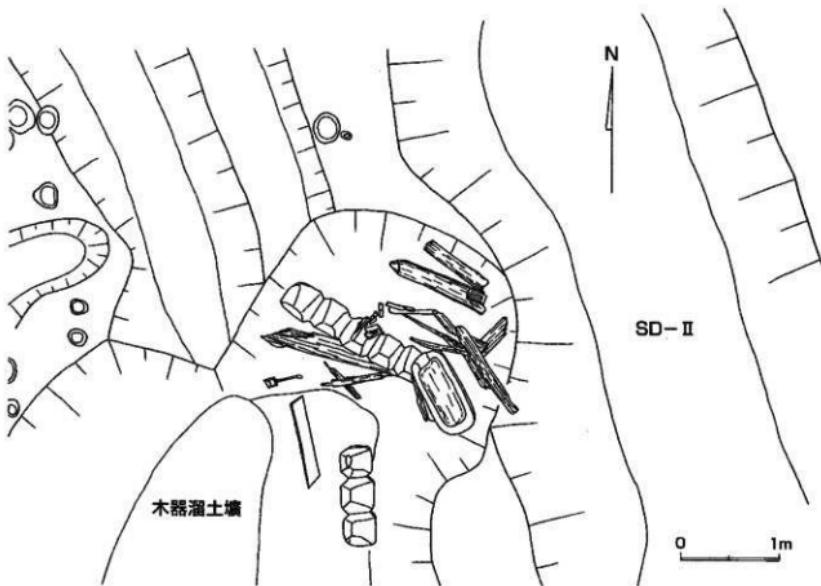
第1遺構面はすでに削平されており、第2遺構面についても、4区から8区にかけては削平されていたが、深く掘られていた遺構は第3遺構面から検出されている。

1区から4区までの第2遺構面においては、井戸状遺構、不定形土壙のほか多数の柱穴が検出されている。さらに7区においては、加工途中の鍬、柱、舟底状木製品等の木製品を溜めておく幅約3m、長さ4m以上の土壙を検出した。

第3遺構面においては、土壙、井戸状遺構、多数の柱穴のほか、5区と6区の間に、SD-I、7区と8区の間にSD-IIが検出されている。

SD-Iは、第1調査区のSD-3に続く溝で弥生時代前期の環濠の一部である。

SD-IIは、溝が埋まつた後、上層からの木器溜め土壙によって切られているが、この溝も第1調査区のSD-4・4'に続く溝で弥生時代前期の環濠の一部である。



第12図 第4調査区 木製品出土状況

## (5) 第5調査区

幅約6m、長さ約9.5mの東西方向の調査区で、西から東へ10区画(1~10区)に分けて調査を行った。

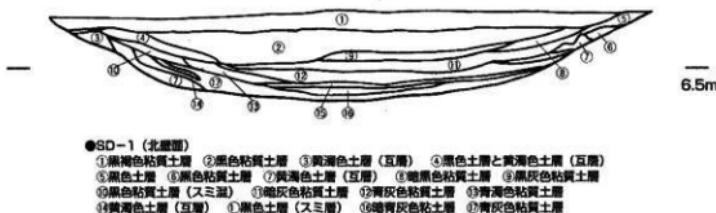
第1遺構面は削平されていたが、3区において井戸状遺構が第2遺構面で検出されている。

第2遺構面においては、8区で円形住居跡、井戸状遺構、円形落ち込み、不定形土壙、土器溜め遺構(下層では溝になる)、溝3条(SD-1・SD-2・SD-3)のほか多数の柱穴が検出されている。

第3遺構面においては、不定形土壙、多数の柱穴、溝7条が検出されている。

SD-1は、幅約6.0m、深さ約1.0mの溝である。この溝は、第2遺構面から検出できる溝であり、上層は弥生時代中期の遺物が出土している。

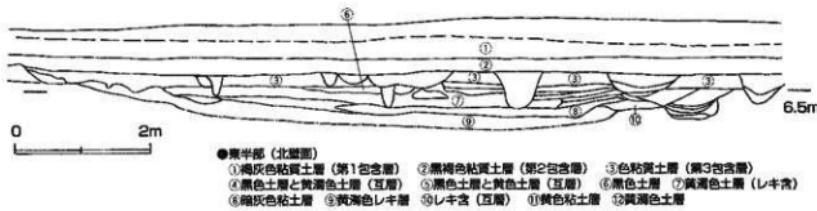
当初の調査では、この溝底に地山層が確認できたことから、弥生中期からの溝として処理したが、内部堆積層や溝規模が同様であった後の調査の第5調査区のSD-1を、断ち割り調査をしたところ、弥生前期の埋土層が確認された。また後の第9調査区でも同様の溝が確認できた。このことからこの溝は、前期の段階で環濠として掘られ、一度埋められてから中期に再度使用されている溝である。



第13図 SD-1 断面図 1/50

SD-4は、幅約3.0m、深さ約0.7mの溝である。西から東へ高低差のある溝で、溝の上面には第2遺構面の柱穴が多数みられる。弥生時代前期の環濠の一部である。この溝の南側片部には、約2m角の方形の小さな建物跡が溝と並行して4基みられる。福岡県博多区の雀居遺跡にも約20基の同様のものがみられる。

溝は、調査区に対して斜めに検出されたが大雨等で断面が崩れたため、断面図は調査区の北側壁面でとった。この溝の方向性からみると、SD-1・SD-8さらには第1調査区のSD-1・SD-2へと続く環濠に合流するものである。

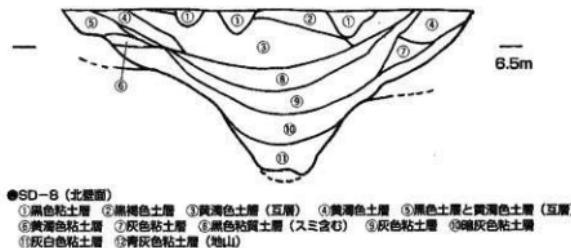


第14図 SD-4 断面図 1/50

SD-5は、幅約1.4m、深さ1.0mの比較的小規模な弥生時代前期の溝である。この溝は、第9調査区のSD-01へと続く溝であり、最も内側にある溝であるが、環濠とするには疑問の残る溝である。

SD-8は、幅約4.2m、深さ約1.7mの弥生時代前期の溝である。この溝は、第1調査区のSD-2へと続く環濠の一部である。溝の下部はV字形を呈しており、その溝幅を復元すると幅約1.5mとなる。下層からは弥生時代前期の土器が出土していることから、弥生時代前期に掘られた溝が埋まった後にも溝としての機能は失われなかつた溝である。

内部の堆積層は、大きく上層・中層・下層に分かれ。中層の黒色粘質土層には、黒色の炭化層がみられる。



第15図 SD-8 断面図 1/50

#### (6) 第7調査区

幅約1.4m、長さ約5.5mの南北の調査区で、北から南へ7区画(1~7区)に分けて調査を行った。2区と3区の間には、幅約2mの農業用水路が通っている。この調査区は、遺跡の北東側で、環濠の外側にある調査区であることから、遺構・遺物は、比較的少ない区域である。また遺構面が削平されており1面しか確認されていない。

同一遺構面に、弥生時代前期の土壙1基、中期後半の方形周溝墓5基、井戸状遺構、不定形土壙、溝、掘立柱建物跡、多数の柱穴等が検出されている。さらに古墳時代の井戸状遺構も検出されている。

包含層から出土する遺物としては、弥生時代から古墳時代、さらに中世の瓦器まで含んでいる。

## (7) 第8調査区

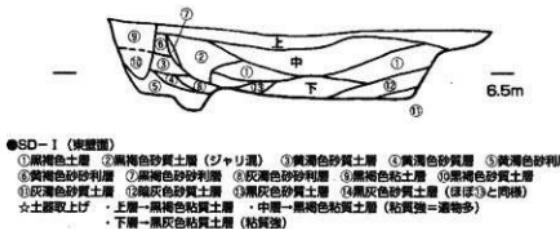
幅約14m、長さ約75mの南北の調査区で、北から南へ8区画(1~8区)に分けて調査を行い、第1・第2・第3遺構面が検出されている。

第1遺構面においては、溝、井戸状遺構等が検出されている。また検出面は第2遺構面からであるが、古墳時代の幅約1m、深さ約1mの溝(SD-1)が、第9調査区まで続々南北に長く検出されている。

第2遺構面においては、円形竪穴住居跡(SH-1・2)、方形周溝状遺構、隅丸方形の大きな土壙(SX-1)、方形区画状溝(SD-2)、溝4条(SD-I・II・III・IV)、小さな木棺墓1基等のほか、多数の柱穴が検出されている。

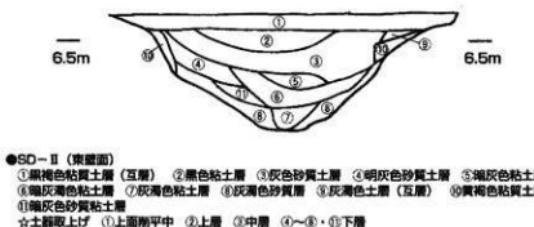
第3遺構面においては、主に弥生時代前期の環濠を中心とした溝3条(SD-IV・V・VI)のほか、多数の柱穴が検出されている。

SD-Iは、幅約4.0m・深さ約0.8mの溝で、大きく上層・中層・下層の3層に分かれ。出土する土器からみると弥生時代後期からの溝で、各層による時期差はほとんどみられないものである。第6調査区のSD-1と連なる溝である。



第16図 SD-I 断面図 1/50

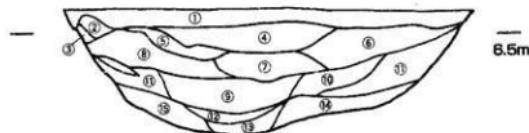
SD-IIは、幅約3.5m・深さ約1.3mの溝で、大きく上層・中層・下層の3層に分かれ。出土する土器からみると弥生時代中期からの溝である。第1調査区のSD-7へ続く溝である。



第17図 SD-II 断面図 1/50

SD-IIIは、幅約4.2m・深さ約1.3mの溝で、出土する土器からみると弥生時代中期からの溝である。小銅鐸の出土した第1調査区のSD-5に続く溝で、内部からは、廃棄物場所として利用されたのか土器や木器が捨てられた状態で出土している。

これらの遺物は、集落の内側（南側）から捨てられたことを示すように、土器は溝南側壁面沿いからの出土が多く、木器は中心部から出土している。

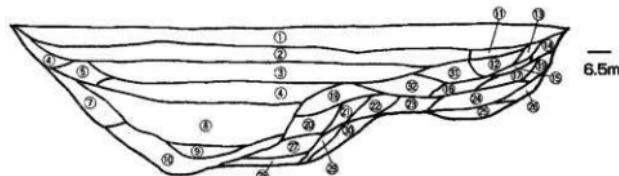


- SD-III (東壁面)
- ①黒褐色粘質土層 ②黄褐色粘質土層 ③黄褐色粘質土層 ④黑色粘土層 ⑤白濁色砂質土層
- ⑥黑色粘土層 (遺物多い) ⑦黑色粘質土層 ⑧灰色粘質土層 (砂混) ⑨黑色粘土層 (粘強)
- ⑩黑色粘土層 (砂混) ⑪灰褐色粘質土層 (砂混) ⑫灰褐色粘土層 ⑬黑灰色粘土層 (若干砂混)
- ⑭黒褐色粘土層 (砂混) ⑮灰褐色粘質土層 (砂混) ⑯灰褐色粘土層
- ☆土器取上げ ①第1層 ②第2層 ③第3層 ⑦以下 第4層

第18図 SD-III 断面図 1/50

SD-IVは、幅約5.8m・深さ約1.5mの大きな溝である。第1調査区のSD-4へ続く溝であるが、内部の中層及び下層から出土する遺物は弥生時代前期のものもあるが中期の土器が多く、逆に上層から前期の土器がみられる。

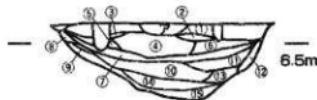
このことは前期に掘られた溝が、そのまま利用される形で中期に一度溝さらえをされた可能性が考えられる。そのため一部は新たに掘られ、また一部は埋められた状態を示しており、二段掘りのような断面形態がみられる。内部からは、土器のほか木器の未製品や半壊品などが出土している。



- SD-IV (東壁面)
- ①黒褐色粘質土層 ②黑色粘質土層 ③灰褐色粘土層
- ④黑灰色土層 ⑤黑色土層 ⑥黑色粘土層 ⑦黑色砂質土層
- ⑧暗黒色粘土層 (やや砂混=木製品) ⑨暗黒色粘土層
- ⑩暗黒色粘土層 (粘強) ⑪灰褐色土層 ⑫灰褐色粘質土層
- ⑬灰褐色土層 ⑭灰褐色粘質土層 ⑮灰褐色粘土層 (砂含)
- ⑯灰褐色土層 ⑰灰褐色粘質土層 ⑱灰褐色粘質土層 (粘有)
- ⑲灰褐色砂質土層 (砂混) ⑳灰褐色砂質土層 ㉑灰褐色砂質土層
- ㉒青灰褐色粘質土層 ㉓青灰色粘質土層 (砂混) ㉔灰色粘質砂質土層
- ㉕灰褐色粘土層 ㉖青灰色粘土層 (地山) ㉗青灰色砂質土層
- ㉘灰褐色粘土層 ㉙灰褐色粘土層 ㉚青灰色粘土層 ㉛灰褐色粘土層
- ㉜灰褐色粘土層 ㉝灰褐色粘土層 ㉞青灰色粘土層 ㉟灰褐色粘土層
- ☆土器取上げ ①第1層 ②第2層 ③第3層 ④第4層 ⑤⑥⑦第5層  
㉛㉜㉝㉞㉟第4層 (南側テラス上部)

第19図 SD-IV 断面図 1/50

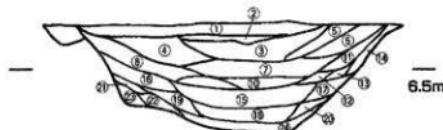
SD-Vは、幅約2.0m・深さ約0.8mの比較的浅くて小規模な溝である。弥生時代前期の環濠であるが、溝が埋まつた跡の上面でも前期の柱穴などがみられることから、溝の存続期間は短期であったと考えられる。この溝は、すぐ北側のSD-IVと並行し、第1調査区のSD-4'へ続く溝と考えられる。



●SD-V (東壁面)  
 ①黄褐色粘質土層 ②黄灰褐色粘質土層 ③泥と同様 ④褐色粘質土層 ⑤暗灰色粘質土層 ⑥灰褐色粘質土層  
 ⑦灰色粘土層 ⑧黄褐色砂質土層(互層) ⑨暗灰色砂質土層 ⑩灰褐色粘土層 ⑪灰褐色砂質土層(砂涙)  
 ⑫黄褐色砂質土層(互層) ⑬灰褐色砂質土層 ⑭灰色砂質粘土層 ⑮灰色砂質土層

第20図 SD-V 断面図 1/60

SD-VIは、幅約3.4m・深さ約1.2mの溝で、この第8調査区でやや弧形の部分を検出で、次の第9調査区へと続く弥生時代前期の環濠の一部である。溝の規模や方向性から考えると第1調査区のSD-3へ続く溝である。



●SD-VI (東壁面)  
 ①黒褐色粘質土層 ②黒色粘質土層 ③黒色粘質土層(明)(遺物多) ④黒色粘質土層(遺物多)  
 ⑤黄褐色砂質土層 ⑥黄褐色土層 ⑦黑色粘質土層(砂涙) ⑧灰褐色砂質土層 ⑨灰色粘土層  
 ⑩灰褐色粘土層 ⑪明黄褐色砂質土層 ⑫灰褐色粘土層 ⑬黄灰褐色土層(砂涙) ⑭黄褐色砂質土層(互層)  
 ⑮明灰色粘質土層 ⑯黄褐色土層(互層) ⑰灰褐色粘質土層 ⑯灰色砂質土層 ⑰青灰褐色砂質土層  
 ⑱灰褐色粘土層(砂涙) ⑲灰褐色土層(粘有) ⑳灰褐色砂質粘土層 ㉑青灰色土層 ㉒青灰褐色砂質土層  
 ☆記録取上げ ①～③上層 ④～⑩中層 ㉓以下下層

第21図 SD-VI 断面図 1/60

### (8) 第9調査区

幅約14m、長さ約100mの南北の調査区で、北から南へ11区画(1～11区)に分けて調査を行い、第1・第2・第3遺構面が検出されている。

第1遺構面においては、溝、井戸状遺構等が検出されている。また第8調査区から続く古墳時代の溝(SD-1)が検出されている。

第2遺構面においては、方形周溝状遺構(北溝が、SD-I)、溝(SD-II)、焼土層、長方形の土壙、井戸状遺構、木棺墓1基等のほか多数の柱穴が検出されている。

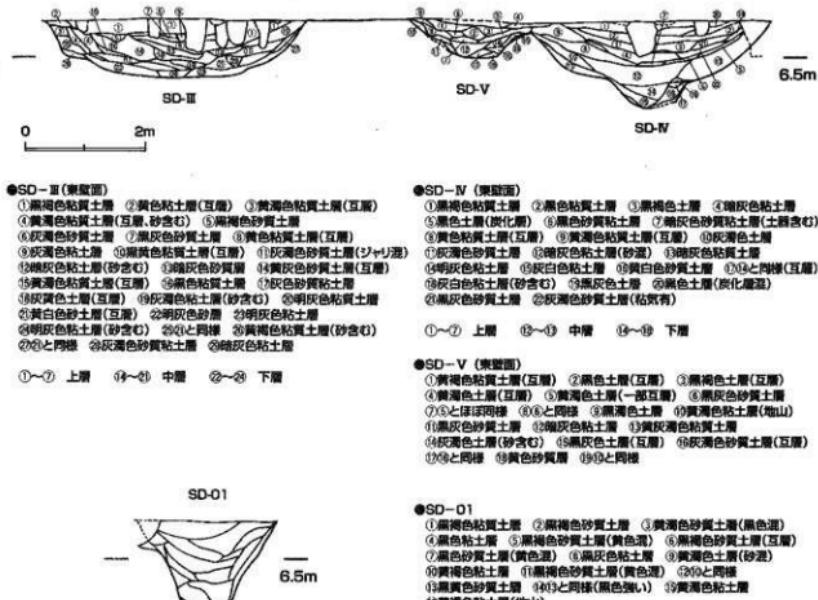
第3遺構面においては、主に弥生時代前期の環濠を中心とした溝3条（SD-III・IV・V）のほか、多数の柱穴が検出されている。

**SD-III**は、幅約4.2m・深さ約1.2mの溝で、弥生時代前期の環濠の一部である。大きく上層・中層・下層と分かれるが、上層では黄色粘質土層などがブロック状に混入し、中層では黄褐色の砂質層がみられる。

**SD-IV**は、幅約4.3m・深さ約1.6mの溝で、弥生時代前期の環濠の一部である。大きく上層・中層・下層に分かれる。溝の下部はV字形を呈している。

**SD-V**は、幅約1.2m・深さ約0.6mの小規模な溝で、SD-IIIとSD-IVの間を並行に掘られた弥生時代前期の環濠の一部である。

この3条の溝は、遺物的にみると、SD-IV、V、IIIの順序で時期差（ほほ時間的差とも考えられるが）がみられる。また3条の溝の延長は、第1調査区や第5調査区、さらには前述の、昭和52年7月から翌年にかけて発掘調査された国鉄貨物引き込み線（当時）に伴う調査で検出された溝-25・27へと続く溝と考えられる。



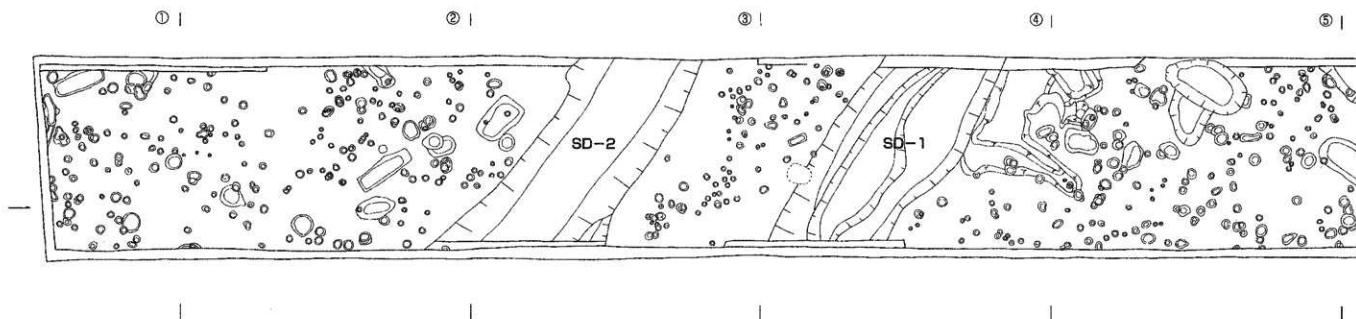
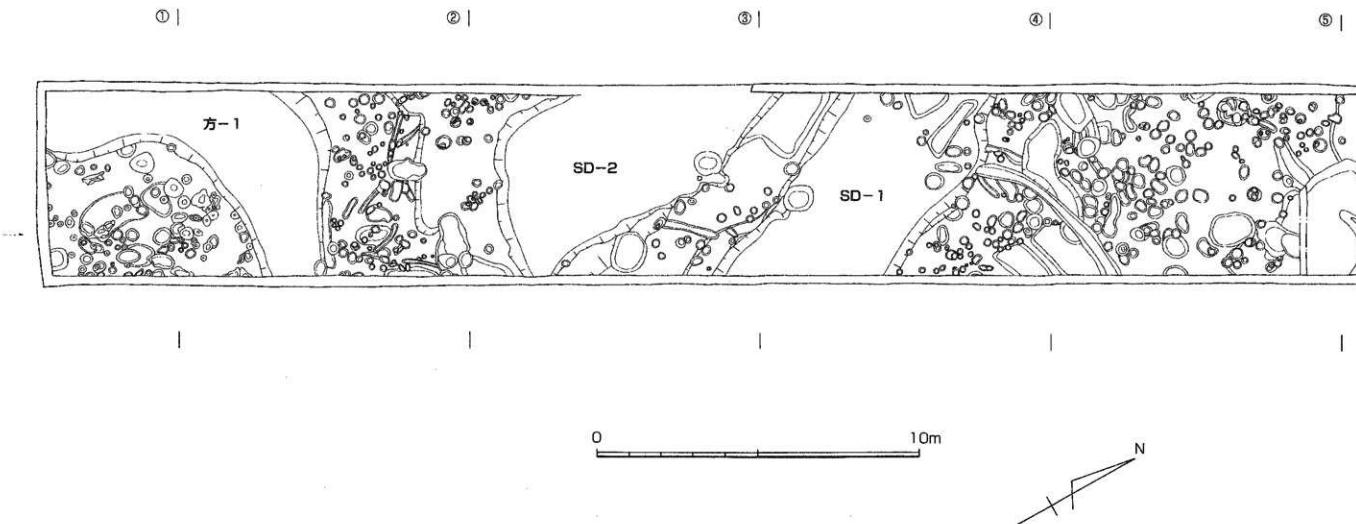
第22図 SD-III・IV・V 断面図, SD-01 断面図

## (9) 第10調査区・第11調査区

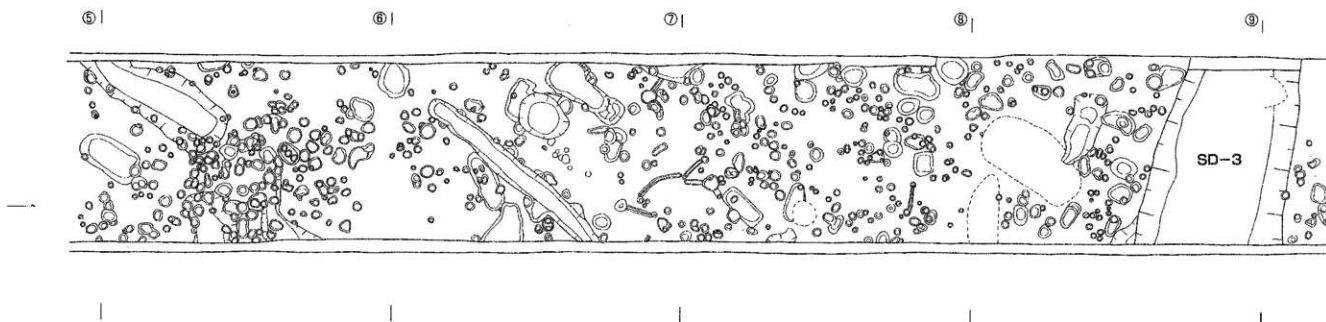
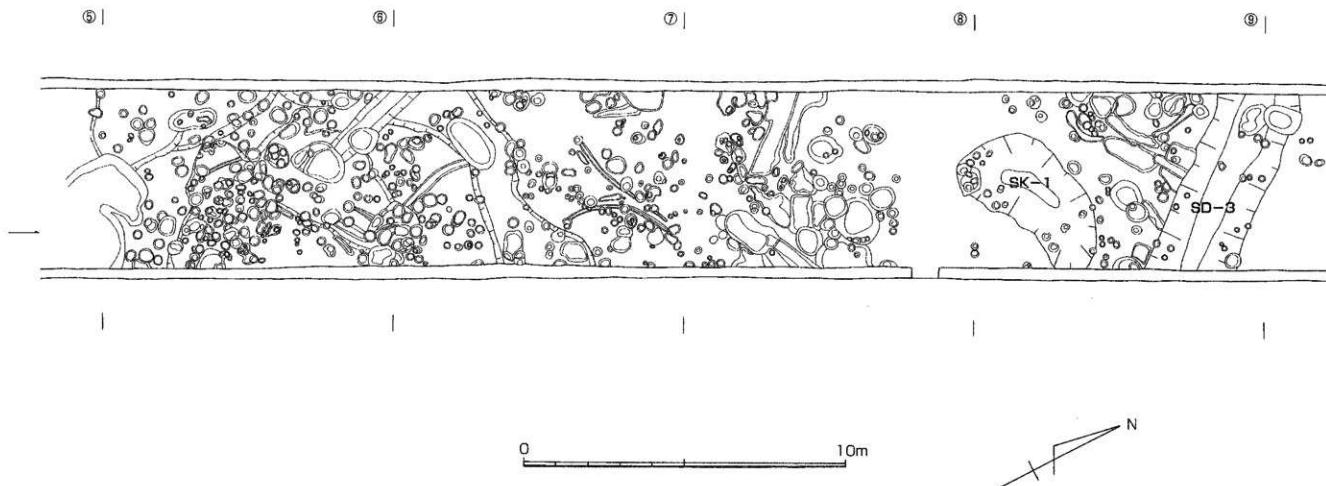
両調査区は連続しており、幅約10m、長さ約35mの東西の調査区である。この両調査区は、今回の調査域の最も北側にあたり、遺構・遺物とも非常に少なくなる地域である。第3遺構面のみが検出されている。この第3遺構面には、上面の第1・第2遺構面からの遺構もみられるが、包含層及び第1・第2遺構面は削平されている。

第3遺構面においては、弥生時代前期の土壌や遺物もみられるが、その量は少ない。

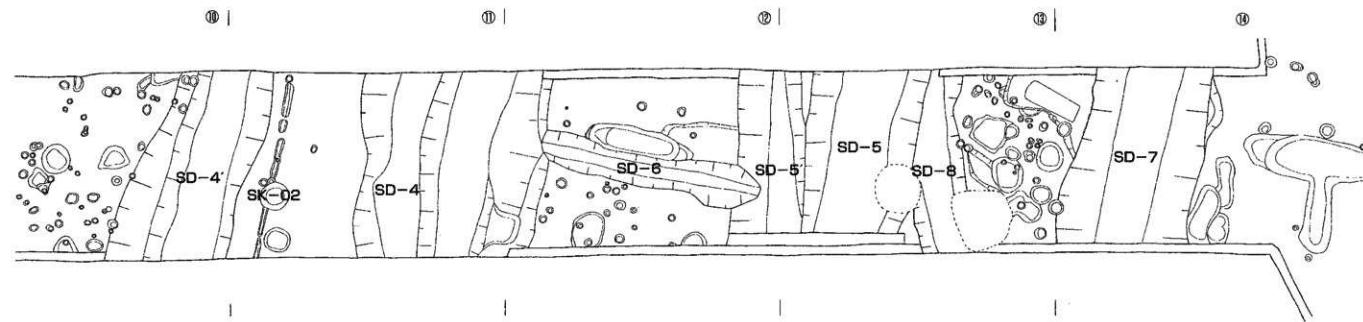
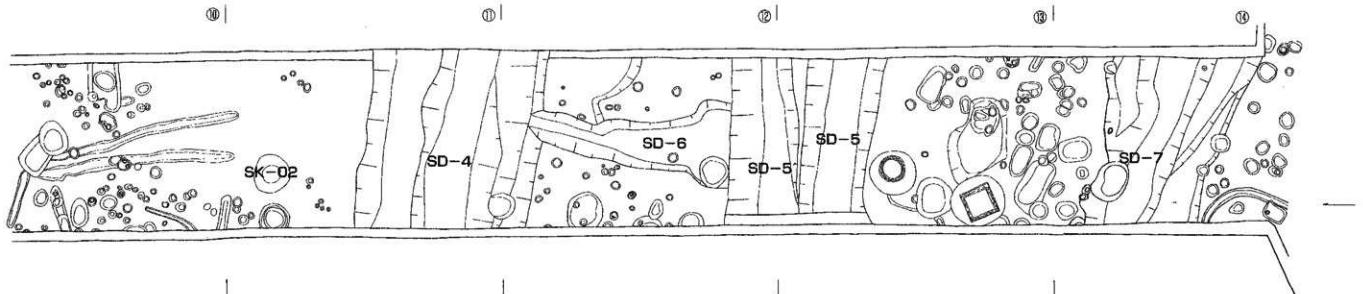
今回は、この調査区は遺構平面図の報告のみにとどめる。



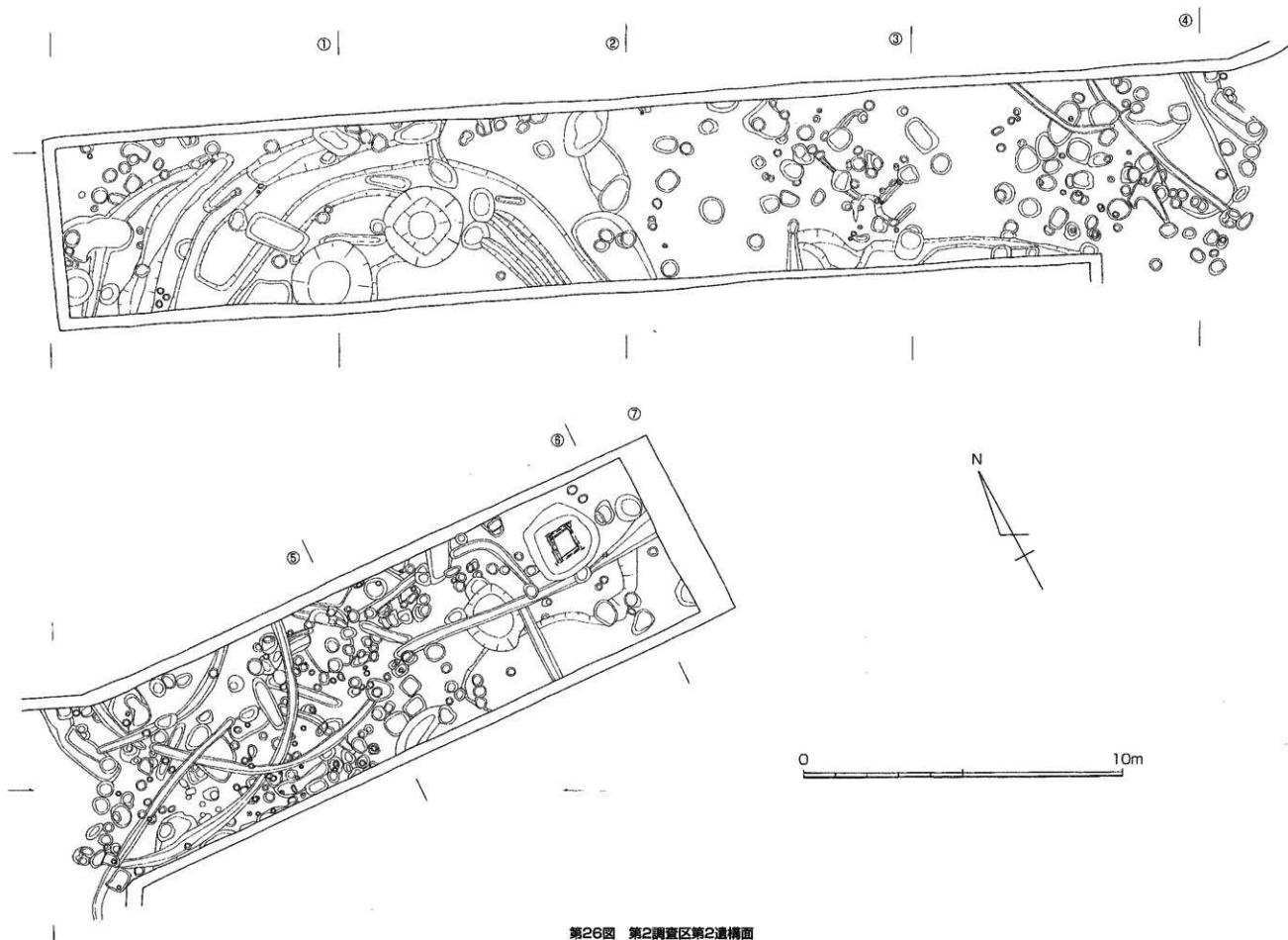
第23図 (上) 第1調査区第2透構面 (下) 同第3透構面



第24図 (上) 第1調査区第2遺構面 (下) 同第3遺構面



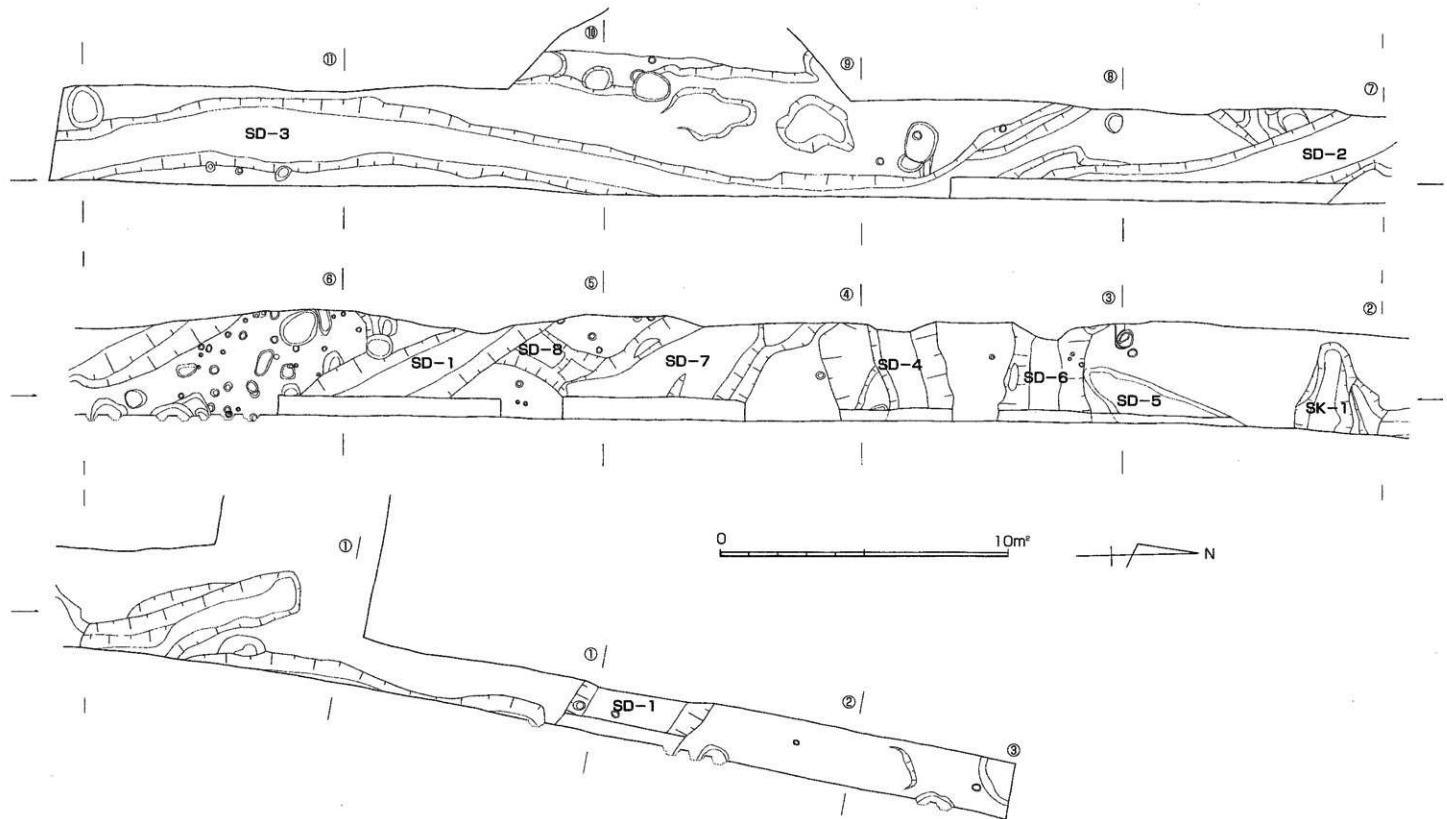
第25図 (上) 第1調査区第2遭構面 (下) 同第3遭構面



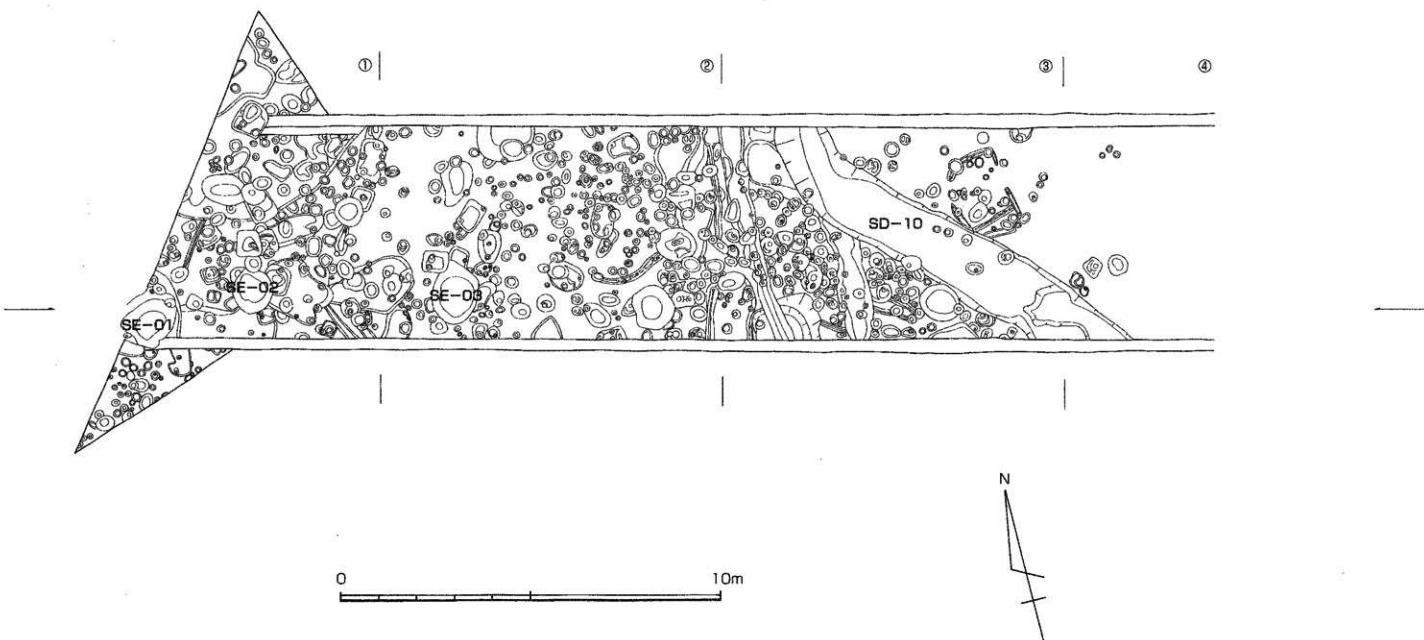
第26図 第2調査区第2遺構面



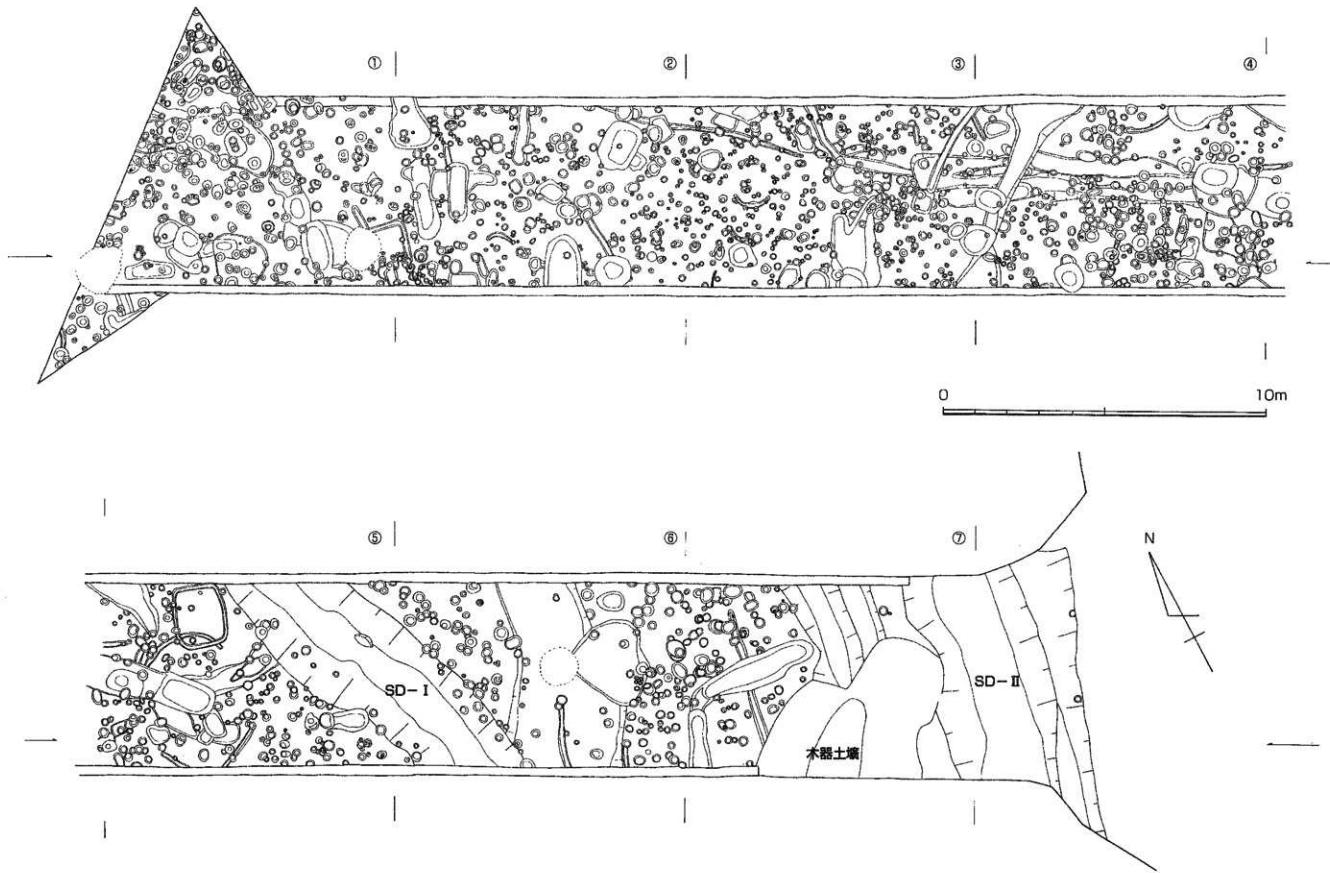
第27図 第2調査区第3遺構面



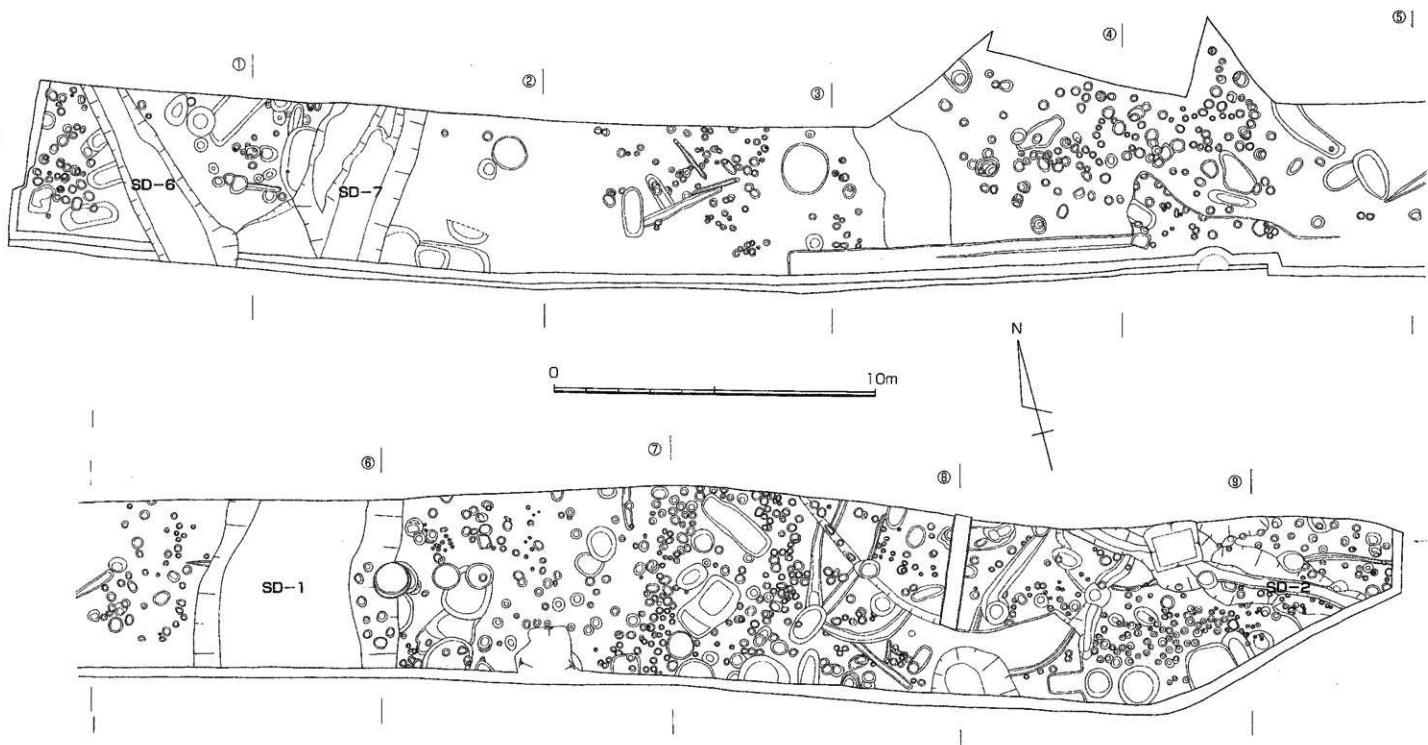
第28図 (上・中) 第3調査区第3透構面 (下) 第6調査区第3透構面



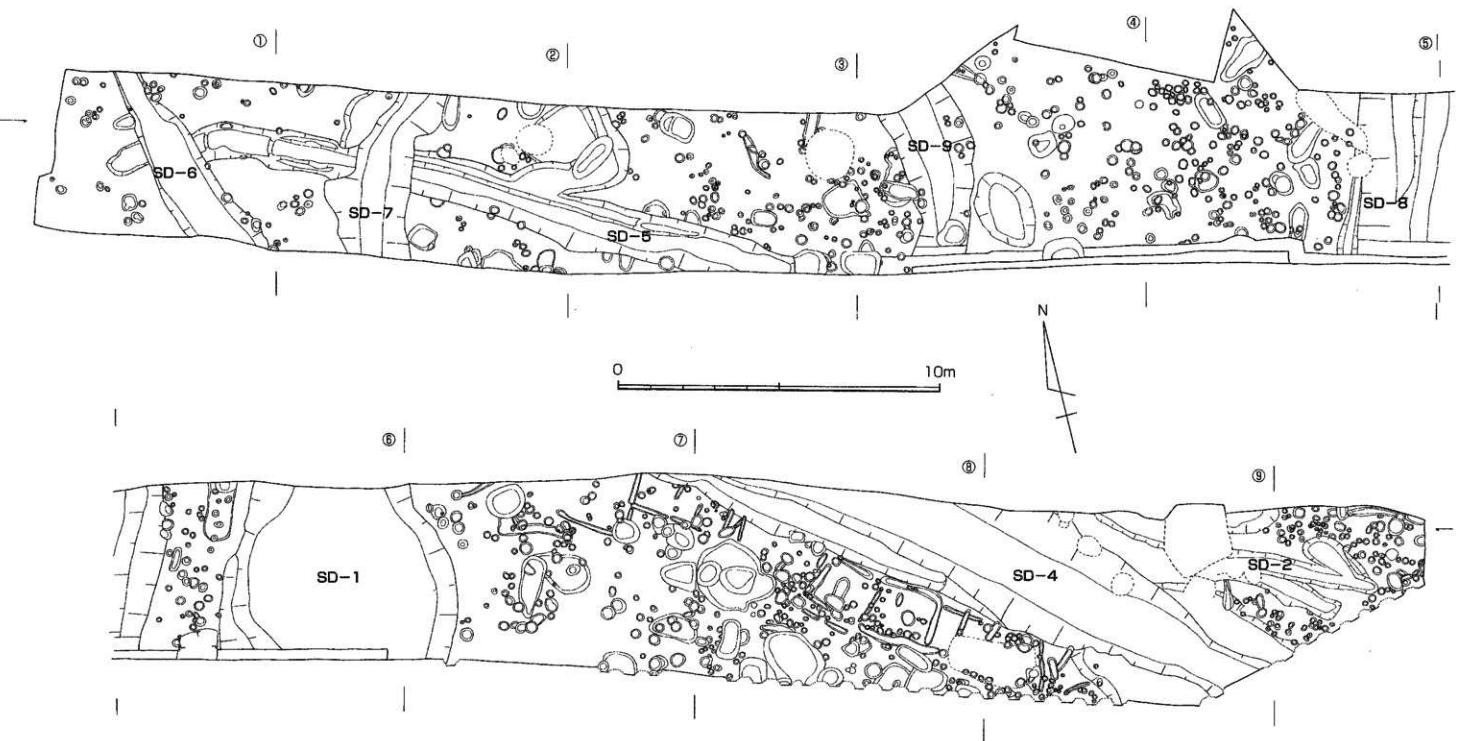
第29図 第4調査区第2透構面



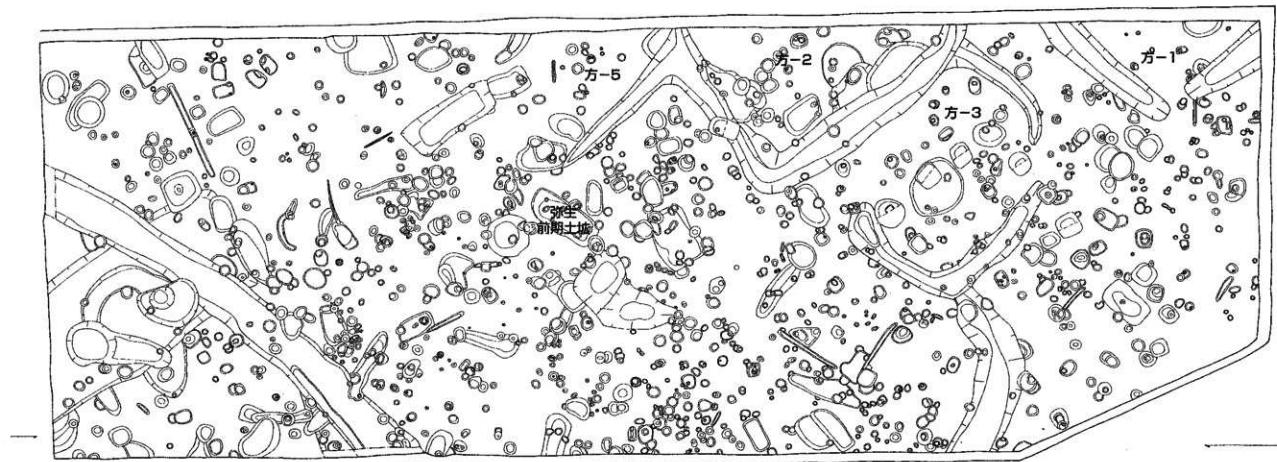
第30図 第4調査区第3遺構面



第31図 第5調査区第2造構面



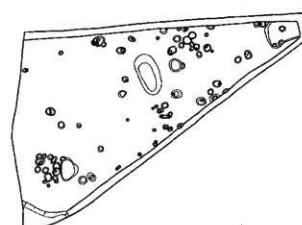
第32図 第5調査区第3透構面



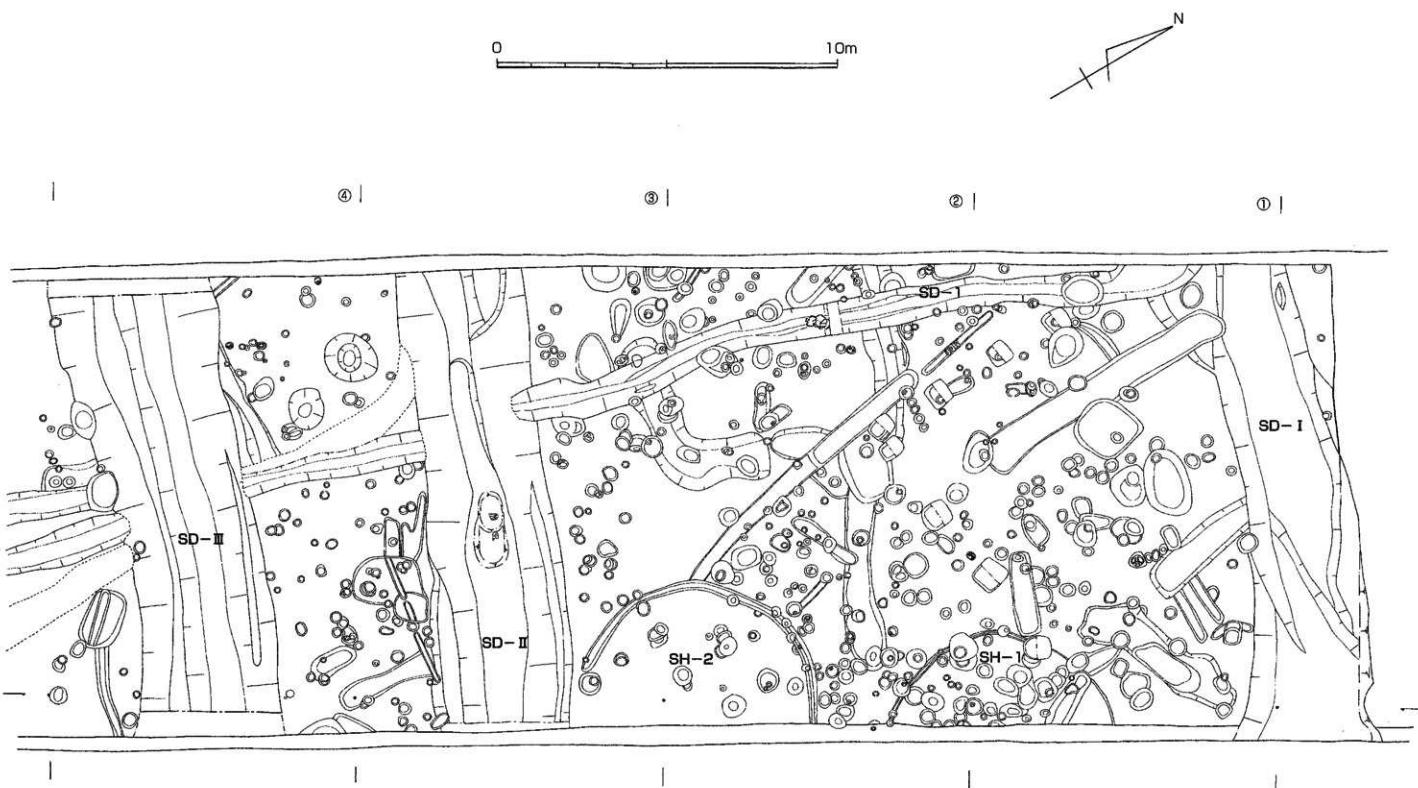
0 10m

N

③ | ② | ①

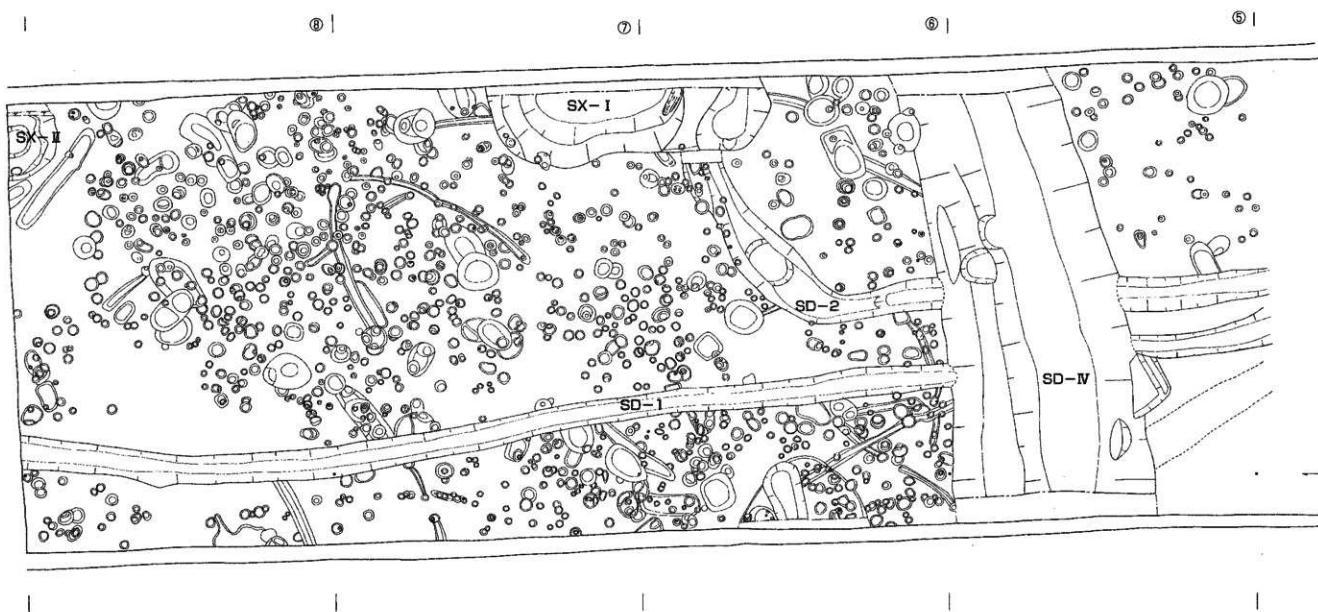


第33図 第7調査区第3造構面

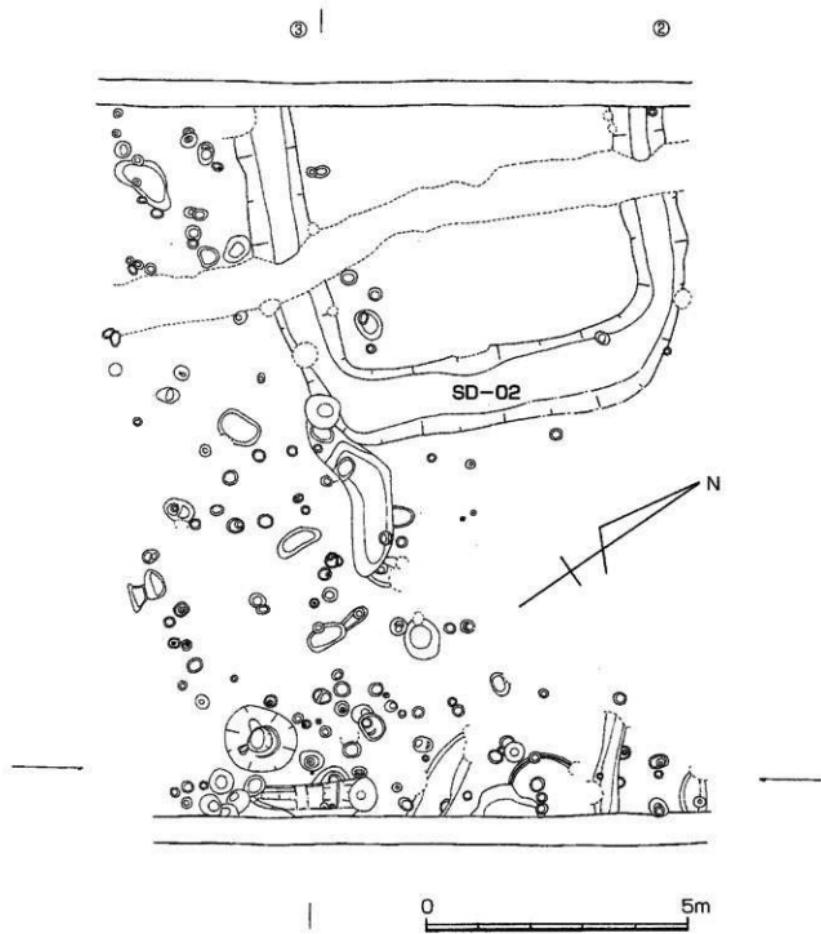


第34図 第8調査区第2造構面

0 10m



第35図 第8調査区第2遺構面

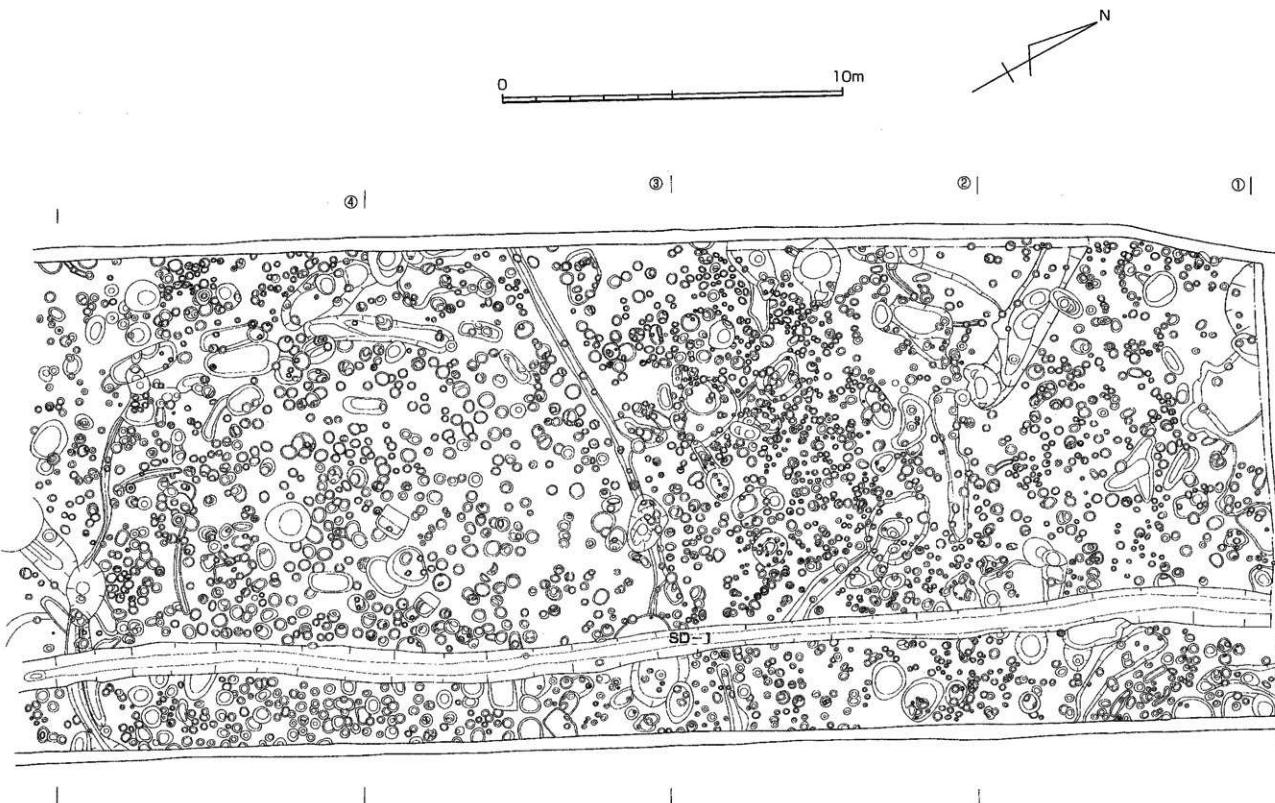


第36図 第8調査区第3遺構面 方形周溝墓

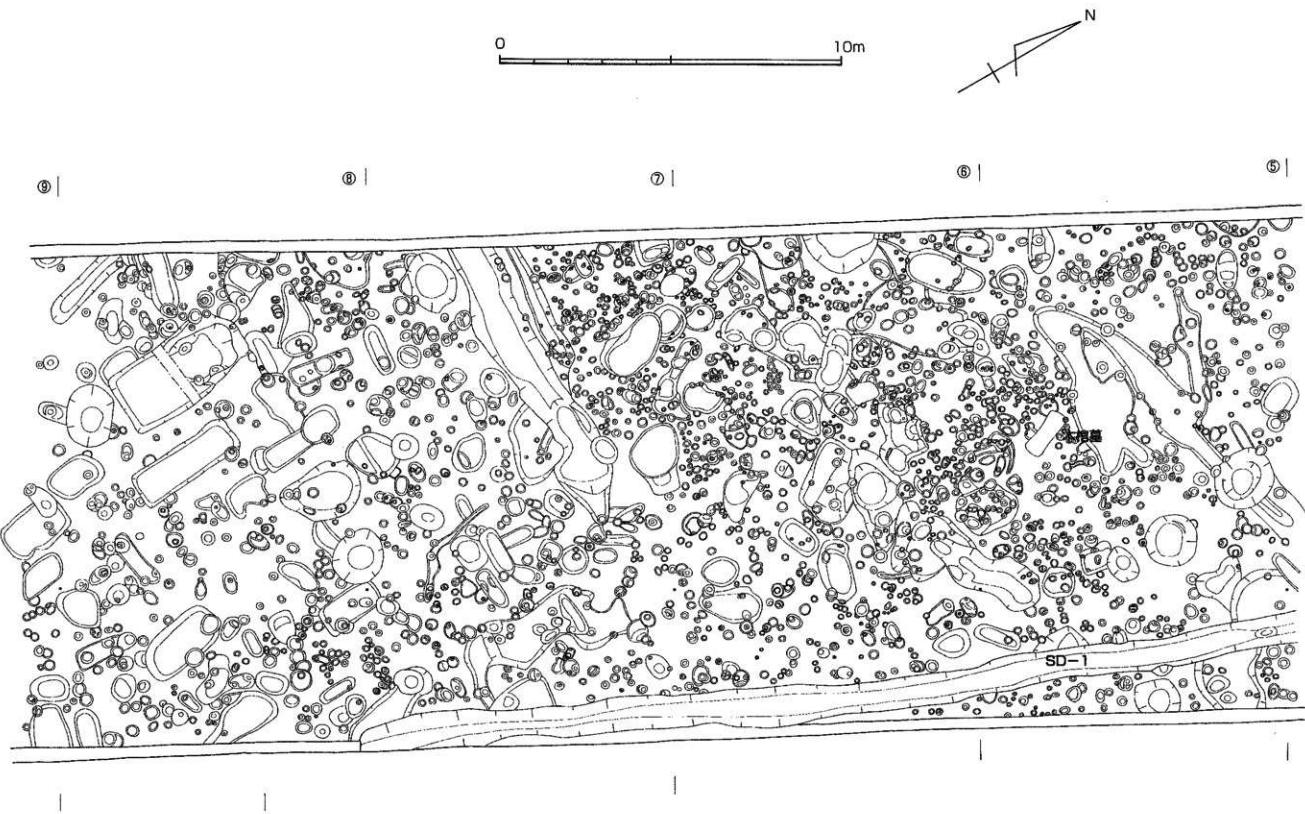




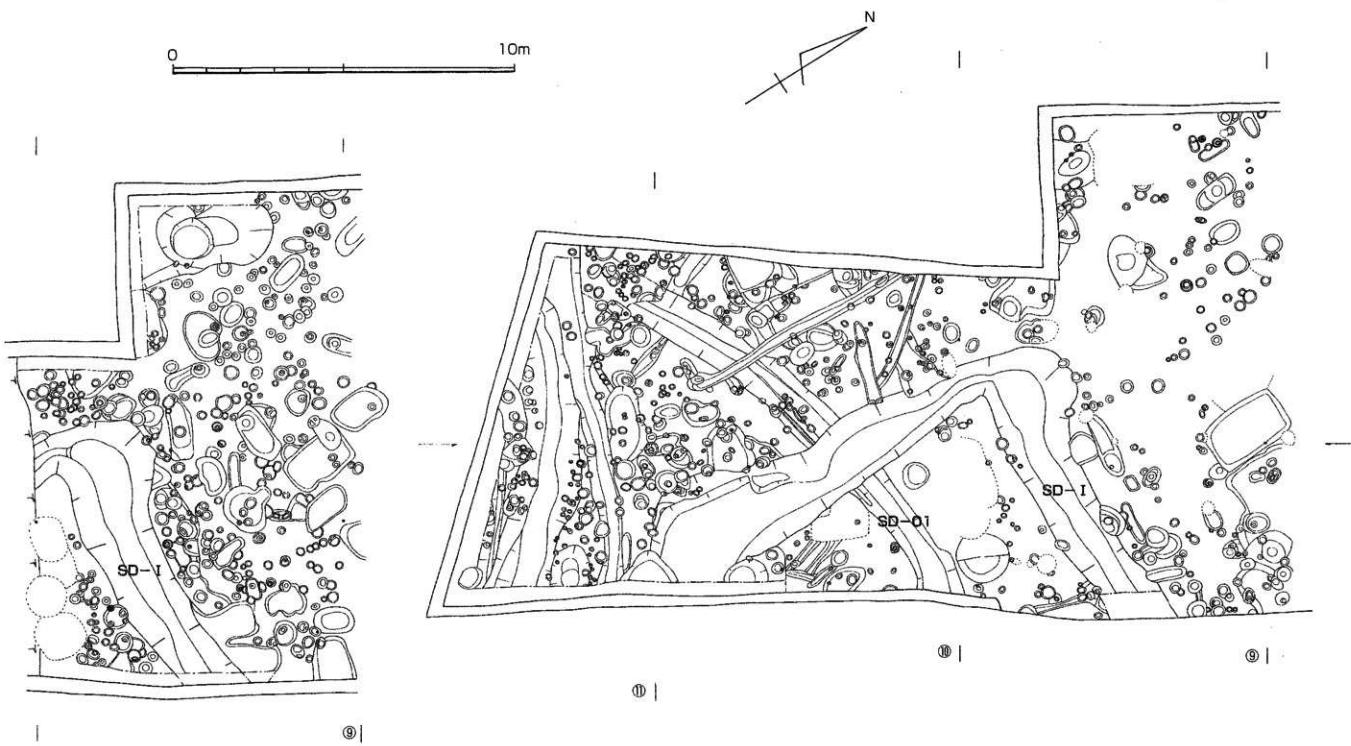
第37図 第8調査区第3造構面



第38図 第9調査区第2遺構面



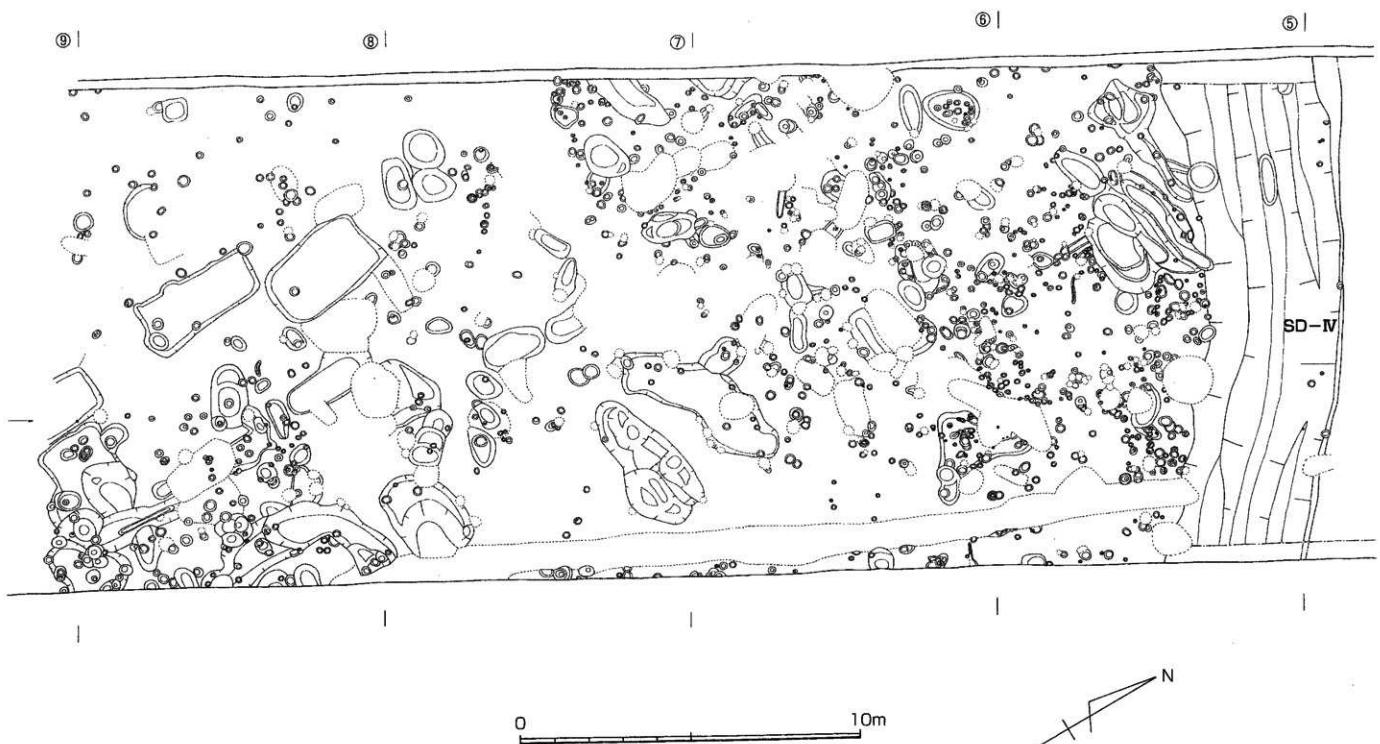
第39図 第9調査区第2遺構面



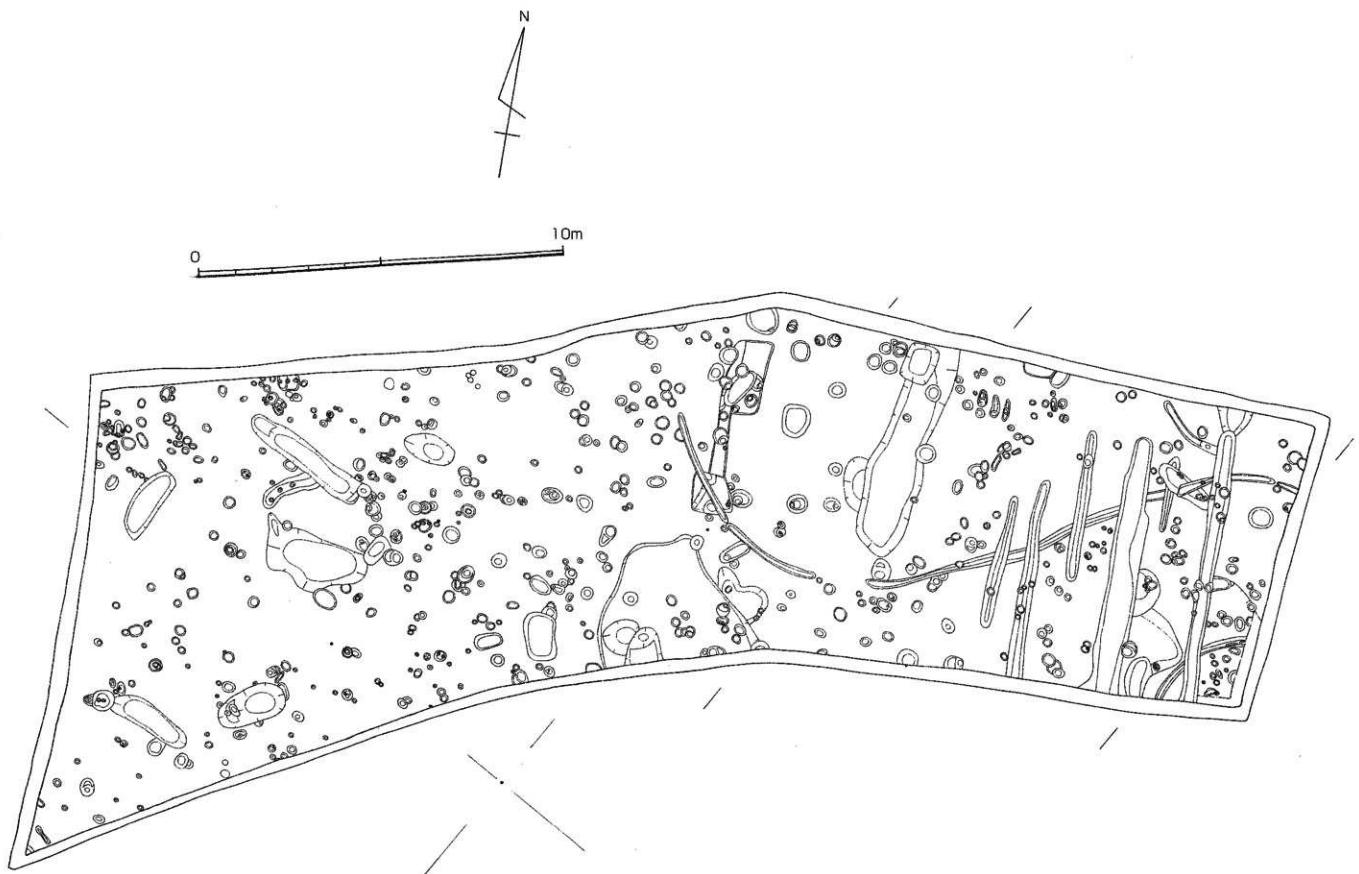
第40図 (左) 第9調査区第2遺構面 (右) 同第3遺構面



第41図 第9調査区第3連構面



第42図 第9調査区第3遺構面



第43図 第10・11調査区第3遺構面

### 第3節 出土遺物

今回の調査では、コンテナバットにして約2500箱の遺物が出土している。遺物の種類としては土器、石器、木器、青銅器、動物遺体などである。本書では、整理作業の現状と紙面の関係上、弥生時代前期に属する溝遺構出土の土器資料を対象として報告を行う。

東奈良遺跡の溝遺構の内、規模の大きなものはその多くが環濠として集落を廻るものとして考えられてきたが、過去の調査では、どの時期に何本の環濠がどのような範囲に廻るのかは今ひとつ不明確であった。今回の調査では、阪急京都線沿いに幅約14mで230mの長距離にわたり調査することができた(第7~第9調査区)。その結果、第8・第9調査区において集落を廻る可能性が高い弥生時代前期の溝遺構7本を確認するに至った。したがって、ここではその溝遺構出土の土器資料を紹介し、さらに第5調査区の弥生時代前期に属する溝遺構の土器資料を考察することで集落形態を復元する上での補強材料としたい。

#### (1) 第9調査区

##### ① SD-O1 (第40図)

この溝は他の溝遺構に比して規模が小さいため、遺物は一括して取り上げている。出土遺物はコンテナバット4箱と少ない。

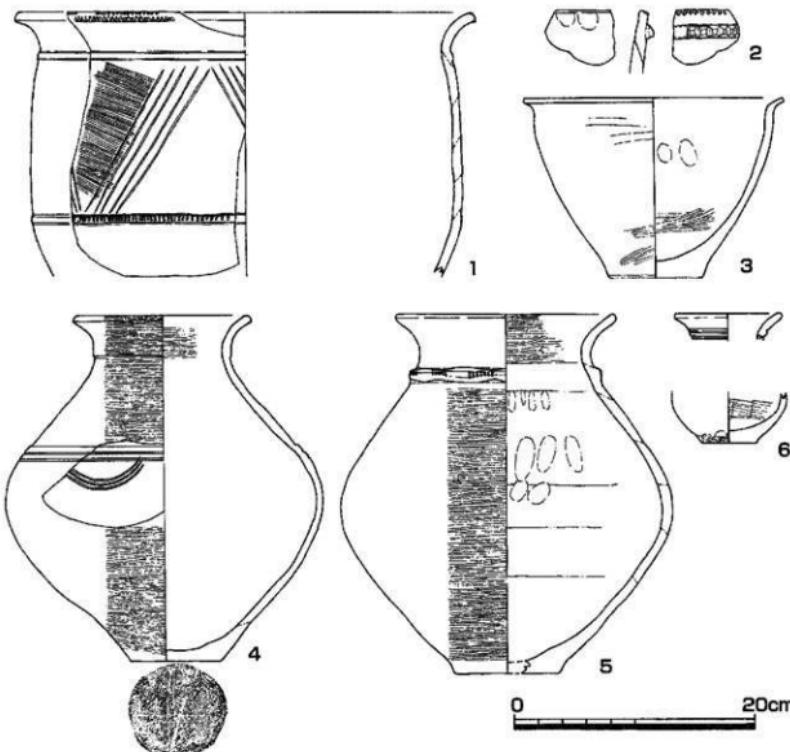
広口壺ではほぼ完形で出土している4・5はどちらも器高と体部最大径が近似値を示し、薄い平底の底部、頸部が比較的不明瞭で口径が小さいという、前期でも古い様相を示すものである。4は頸部と体部に貧弱ではあるがヘラ削りによる段を有し、体部沈線下位にはヘラ描の重弧文を施している。5は頸部に断面台形の削り出し突帯を有している。突帯上面には細かなヘラ刻みが断続的に施されている。両者とも外面全面に緻密なヘラ磨きを行い、内面は口縁から頸部に横方向のヘラ磨きを行っている。6は広口壺の小型品である。体部上半を欠失しているが、成形、調整とも丁寧な作りである。頸部には沈線が2条廻らされている。

甕に関しては器形を復元し得る資料が少ない。1はやや異形の甕であり、砲弾形の体部から、「く」の字状に外反する口縁を有する。口縁下および体部中位に細く低い削り出し突帯を形成し、内部に並行斜線文を鋸歯状に施している。通常の煮炊き用の甕とは考えがたく注意が必要である。2は直立する口縁直下に貼り付け突帯を附加するものである。小片であるが甕の口縁部と思われる。

3は中型の鉢である。外反する口縁を有しており、内外面共に体部下半にヘラ磨きを施している。

##### ② SD-IV (第42図)

出土遺物はコンテナバットで20箱に及ぶ。断面Y字状の溝であるが、遺物は第1層~第7層までを上層、第12・13層を中層、第14~18層までを下層として取り上げた



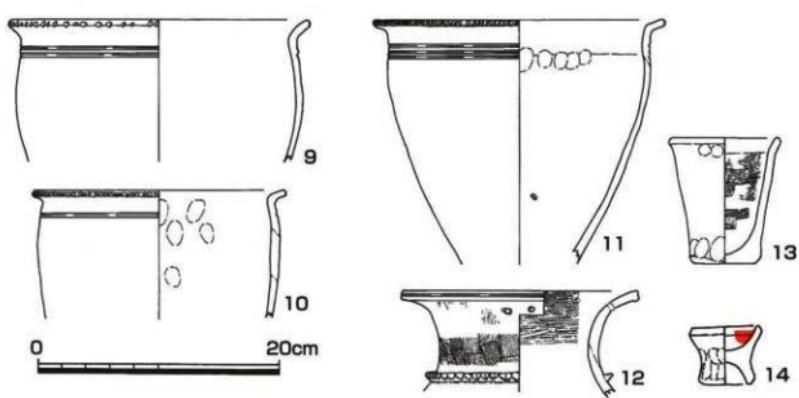
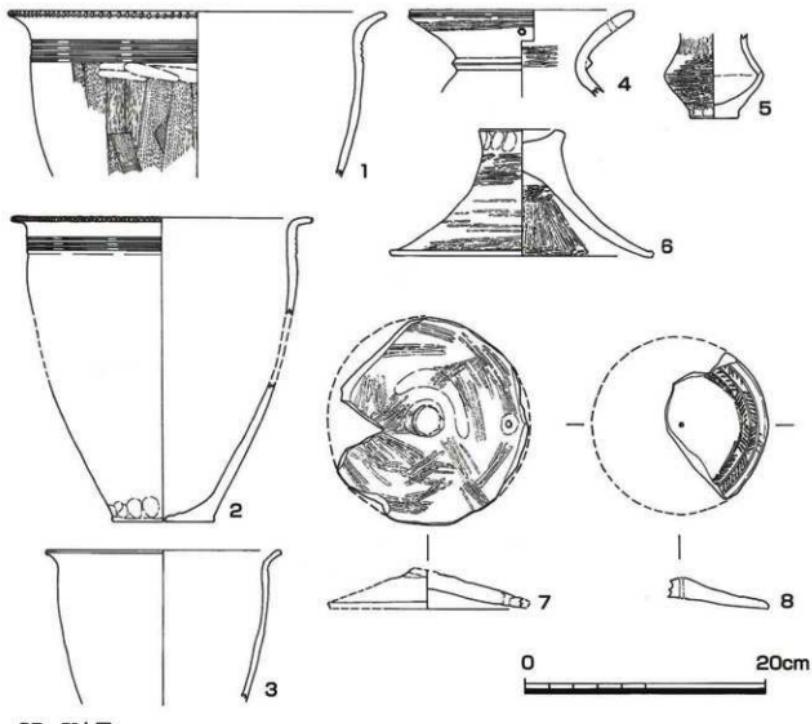
第44図 第9調査区SD-01出土土器 (S=1/4)

(第22図参照)が、全体としては有意な時期差は見出せない。

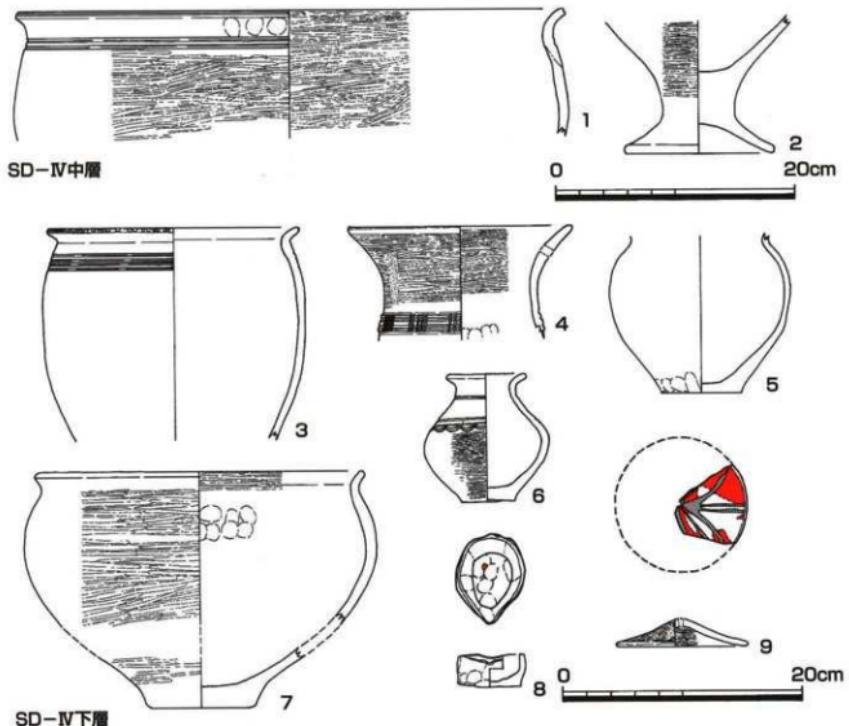
壺は、口縁を「く」の字状もしくは逆「し」字状に外反、屈曲させたものが主体であり、口縁にはヘラ刻みが行われる。体部のヘラ描沈線は1~4条までであり、多条もしくは帯状沈線は未確認である。一方で無文の壺(図45-3)も存在する。体部外面は縦方向にハケを行うものがあるが(図45-1)、ナデによる調整が主流のようである。

広口壺には体部から外反して口縁を形成するもの(図45-4)と比較的明瞭な頸部を有するもの(図45-12、図46-4)がある。この内図45-4、図45-12は頸部に貼り付け突帯を廻らせるが、突帯は突出の大きな断面三角形のものである。図46-4は頸部に幅太の低い削り出し突帯を設け、横方向、縦方向に沈線を施し加飾している。

鉢には大型品(図46-1)と中型品(図46-7)がある。両者とも半球形の体部のもので、口縁を軽く外反させる形態である。体部外面は横方向のヘラ磨きが密に行われる。高杯(図46-2)は杯部上半を欠失しているが、椀形の杯部になるものと思われる。



第45図 第9調査区SD-IV上～中層出土土器 (S=1/4)



第46図 第9調査区SD-IV中～下層出土土器 (S=1/4)

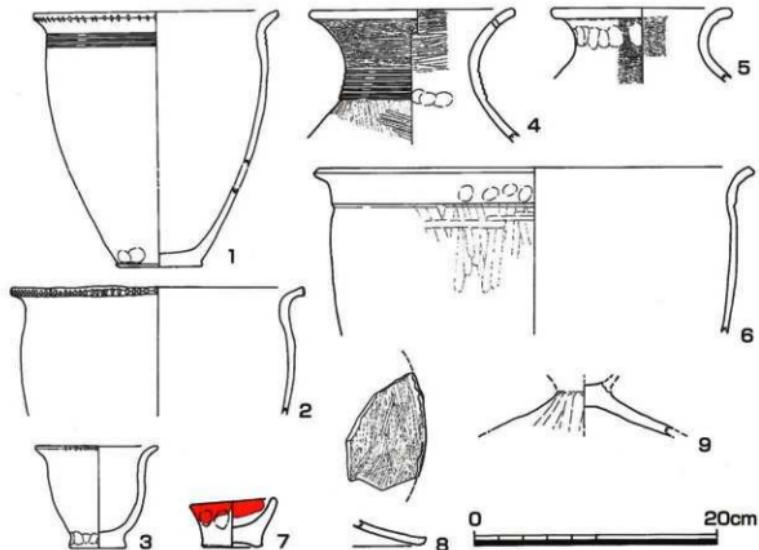
中実の太い脚柱部を有している。裾部はあまり外に開かない。

壺蓋（図45-7・8、図46-9）にはいずれも笠形のものであるが、加飾されたものが目立つ。図45-8は口縁付近に2条の施文帯を設け、内部に短い並行斜線文を綾杉状に施している。図46-9は彩色された蓋である。

この他に、特徴的なものとして小型品またはミニチュア土器の多さが指摘できる。広口壺（図45-5、図46-6）、壺もしくは鉢を模したと思われるコップ形土器（図45-13）、高杯または台付鉢を模したと思われる図45-14、片口の鉢（図46-8）などがある。いずれも非常に丁寧な作りであり、図45-14、図46-8には彩色が施されている。

### ③SD-V (第41図)

SD-IVに北接する幅細の断面「U」字形の溝である（第22図参照）。溝の規模が小さいため、遺物は一括して取り上げている。遺物量は、コンテナバットで2箱分が出土しているに過ぎない。



第47図 第9調査区SD-V出土土器 (S=1/4)

壺1・2はいずれも口縁を外反させるものであり、端部にヘラ刻みを施している。1の体部にはヘラ描沈線が3条廻らされる。両者とも全面ナデ調整を行う。3はミニチュアの壺。形態的に1・2の壺をよく模していることが分かる。

広口壺は、明確な頸部を有する4とやや不明瞭な頸部の5が出土している。前者は頸部に6条のヘラ描沈線が廻らされるが、最上部をヘラで削り取ることによって段状に形成されている。両者とも外面口縁から頸部にかけては横方向のヘラ磨きを密に行うが、4の体部は縦方向のヘラ磨きが行われる。

6は大型の壺もしくは鉢である。外反させる口縁下にはヘラで削り出した段が形成されている。体部外面は縦方向に連続的に幅細のナデを行っている。

7はミニチュアの鉢。高台状の底部から直立気味に立ち上がり口縁に至る形態である。外面には赤色顔料が塗られている。

8は壺蓋、9は壺蓋である。前者は小片であるが現存する口縁からは直径20cm内外になるものと考えられ、大型の広口壺用と考えられる。

#### ④SD-I-III (第41図)

断面「U」字形の幅の広い溝である(第22図参照)。遺物は、第1~7層を上層、第14~21層までを中層、第22~24層までを下層として取り上げた。出土量は、コンテナバットで18箱に及ぶ。

上層資料（第48図）では、壺1～3はいずれも外反する口縁を有するものである。口縁端部にはヘラ刻みが施されるが、1は端部下端に施されている。1は体部にヘラ描沈線1条、2は4条廻らせる。3は上に4条、下に2条の帶条沈線で施文帯を区画し、内部に平行斜線文を鋸歯状に充填している。生駒西麓産の胎土である。

広口壺4はやや短い頸部に4条の沈線を廻らせるが、最上下端をヘラで削り取ることによって3条の細い突線が廻っているように見える。外面は横方向のヘラ磨きを密に行っている。

鉢5・6は外反する口縁を有するものである。中型の鉢5は体部に2条の沈線を廻らせるが、部分的に3条になっている。大型の6は2条の沈線を廻らせている。5は体部に縦方向のヘラ磨き、6は横方向のヘラ磨きを行っている。

壺蓋7～8はいずれも笠形のものである。頂部の形態は、紐孔だけを有するもの（7）、突出するつまみに紐孔を有するもの（9）、双頭のつまみの間に紐孔を有するもの（8）などバリエーションに富む。

中層資料（第48図）では、壺は有文と無文のものとがある。形態としては、「く」の字状に大きく外反する口縁のもの（10・12）と僅かに外反するもの（11）とがある。10は口縁端部にハケ原体で刻みを施す。体部には3条の沈線が廻らされる。

広口壺13は球形の体部のものであり、短い頸部には断面台形の低い削り出し突帯が廻らされる。体部には沈線が2条施される。外面は横方向に丁寧にヘラ磨きを行うが、頸部から体部上半には縦方向のハケが残る。14は広口壺の口縁部片である。頸部には粘土を付加した後にヘラで整形した段が形成されている。

15は鉢の口縁部片。14と同様に粘土付加後にヘラで整形した段が形成されている。

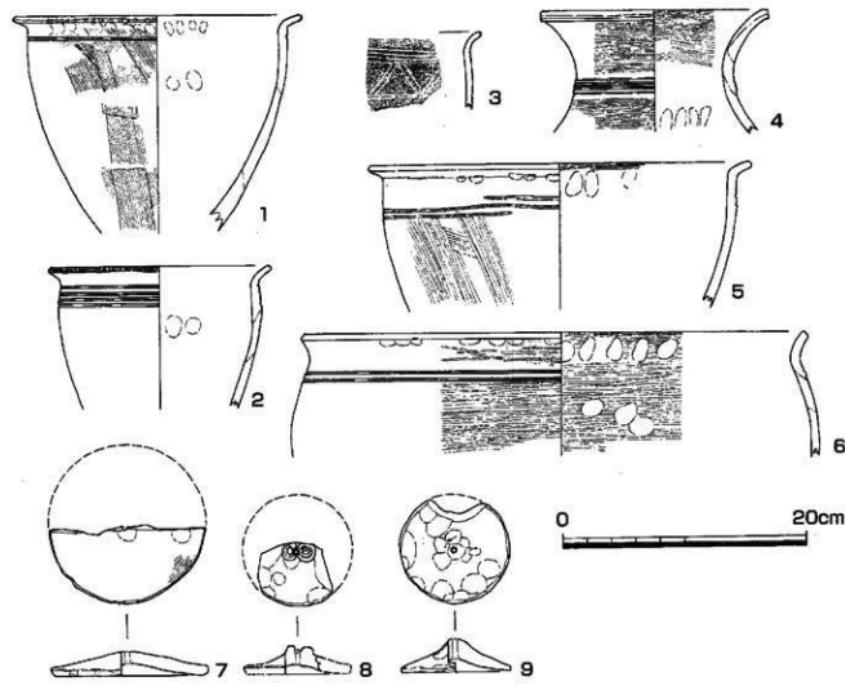
16は有文の壺蓋。同心円の沈線内部に対向する重弧文が施されている。

下層の資料（第49図）では、口縁を「く」の字状に屈曲させるもの（1・3）と軽く外反させるもの（2）とがある。いずれも口縁にヘラ刻みを施し、体部に沈線は3～4条である。

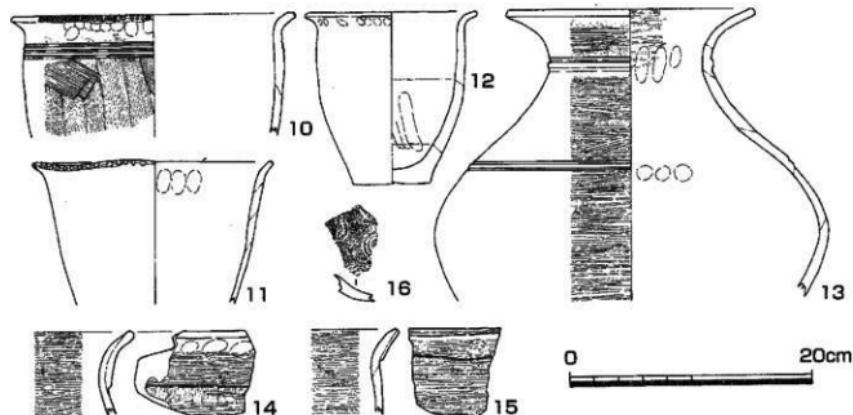
広口壺では、中型品では頸部が短く体部から口縁に外反するもの（6・8）とやや長めの頸部を有するもの（7・9）とがある。頸部には沈線を廻らすものと貼り付け突帯を廻らすものとがある。9は沈線間に竹管による刺突が行われている。8は断面三角形の貼り付け突帯を廻らせており、頸部内面に横方向のハケを行うなど、他のものに比してやや新しい特徴を有している。大型品は、体部から屈曲して口縁に至るものである。4は頸部に段を有するものである。5は卵形の体部に短く外反する口縁が形成される。体部上半にヘラによる削り出しで貧弱な段が形成されている。

10は高杯の杯部と考えられる。やや外開きの杯部であり、口縁は僅かに外反させる。内面には放射線状に細かなヘラ磨きが行われる。非常に精選された胎土であり、搬入品である可能性が高い。

11は大型の鉢である。口縁部を逆「L」字状に屈曲させる。体部外面および口縁部内

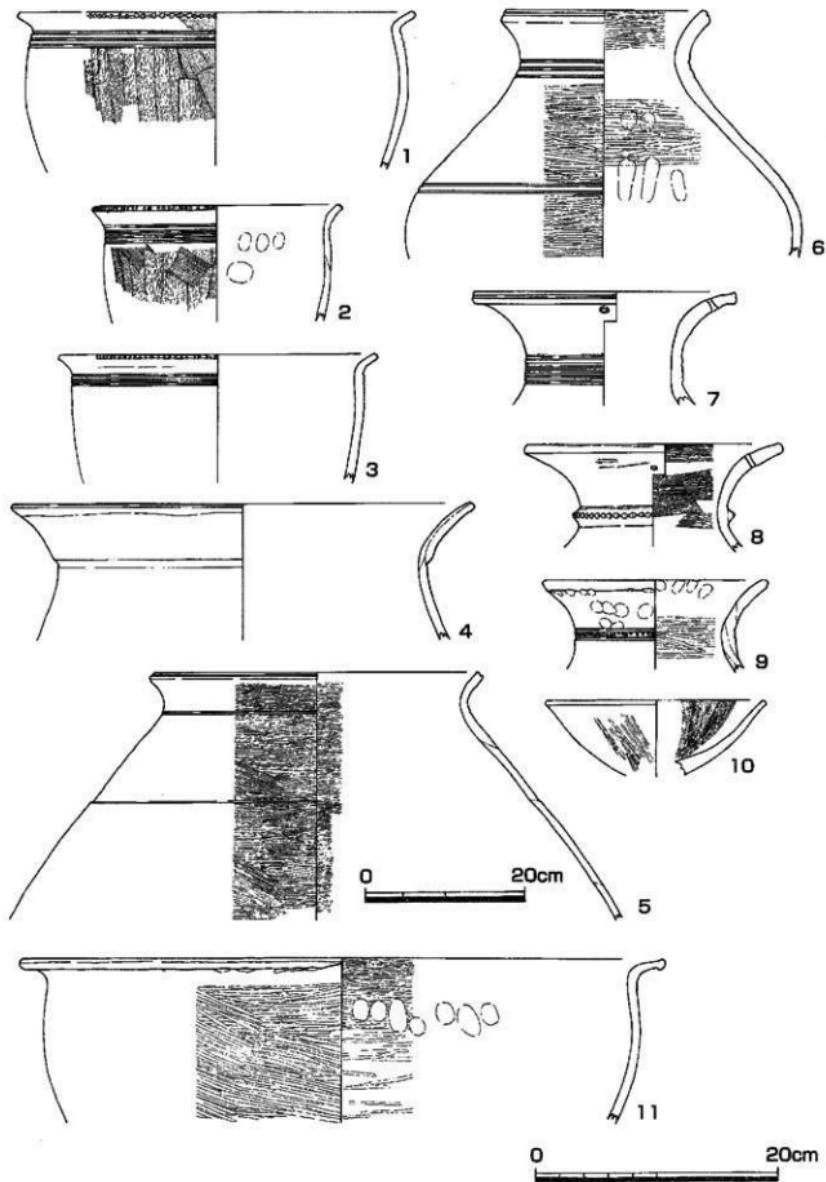


SD-III上層



SD-III中層

第48図 第9調査区SD-III上層～中層出土土器 (S=1/4)



第49図 第9調査区SD-III下層出土土器 (S=1/4)

面に横方向のヘラ磨きを密に行っている。

以上に見ると、SD-VIは森田編年<sup>(注1)</sup> 摂津 I-2・3様式に収まるようであるが、下層から上層にかけて若干の時期差が見いだされるものと考えられる。

#### ⑤ SD-VI (第37・41図)

第8調査区から第9調査区にまたがる断面台形の幅広の溝である（第21図参照）。遺物は、第1～3層を上層、第7～10層を中層、第15層以下を下層として取り上げている。出土量は、第9調査区ではコンテナバットで33箱、第8調査区で29箱に及ぶ。報告はこの内第9調査区出土資料で行う。（但し、第IV章第2節では、第8調査区としてとりあつかった。）

上層資料（第50図上）では、壺（1～3）はいずれも口縁を「く」の字状に外反させるものである。この内1は無文の壺である。2は口縁端部にヘラ刻みを施し、体部には6条の沈線が廻る。3は口縁端部に細い棒による刺突を施している。体部には棒による直線文が3帯廻らされる。4は壺底部であるが、底部に焼成後の穿孔が行われている。瓶としての使用が考えられる。

広口壺（5・6）はいずれも短い頸部に2条の沈線を廻らせている。5は外面に基本的にはナデ調整を行うが、部分的に横方向にヘラ磨きを行う。6は横方向に密にヘラ磨きを行うが、頸部には縦方向のハケが残る。

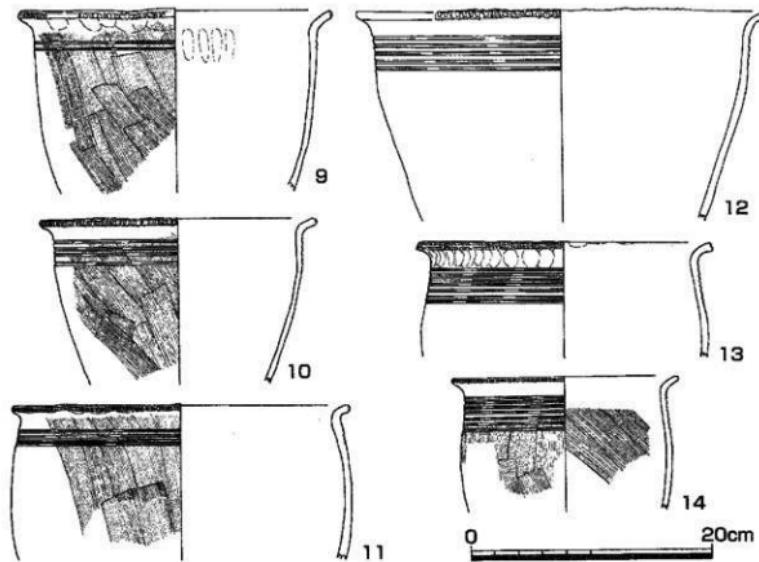
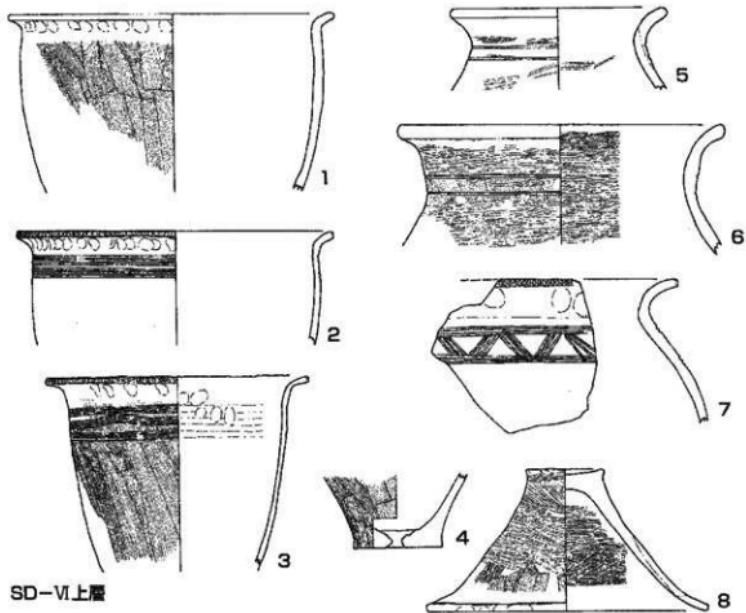
大型の鉢7は体部上半に沈線を上下に2条ずつ廻らせることによって施文帯を形成している。内部には平行斜線文を鋸歯状に充填している。

8は壺蓋。器高の高い笠形のものである。外面は上半が横方向のヘラ磨き、下半は縦方向のハケ。内部は上半が横方向のヘラ磨き、下半は横方向のハケで調整している。

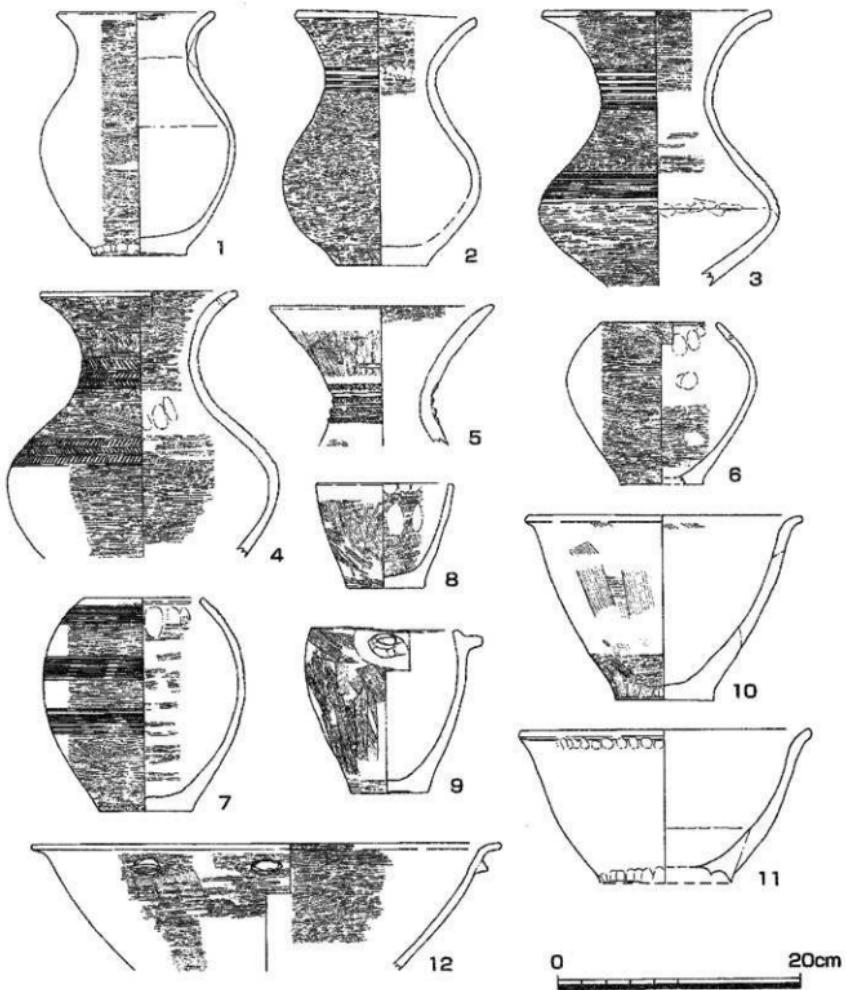
中層資料（第50図下、第51図）では、壺は上層同様に口縁を「く」の字状に外反させるのである（図50-9～14）。端部にはヘラ刻みが施されるが、13は端部に沈線を1条廻らせた後に軽くヘラ刻みを行っている。体部には沈線が2条～7条廻らされている。外面は縦方向のハケ調整が主体を占める。

広口壺（図51-1～5）には、無文のもの（1）と有文のもの（2～5）がある。いずれも明確な頸部を有するものである。3は口縁が体部最大径にまで広がるものであり、頸部に7条、体部に8条の沈線が廻らされる。4は頸部、体部にそれぞれ4条の沈線を廻らせ、内部にヘラで平行斜線文を綾杉状に施している。5は細頸の壺であり、体部は卵形状になるものと思われる。頸部には断面三角形の貼り付け突帯が4条廻らされ、頂部はヘラ刻みが行われる。1～4は外面に横方向のヘラ磨きが密に行われる。

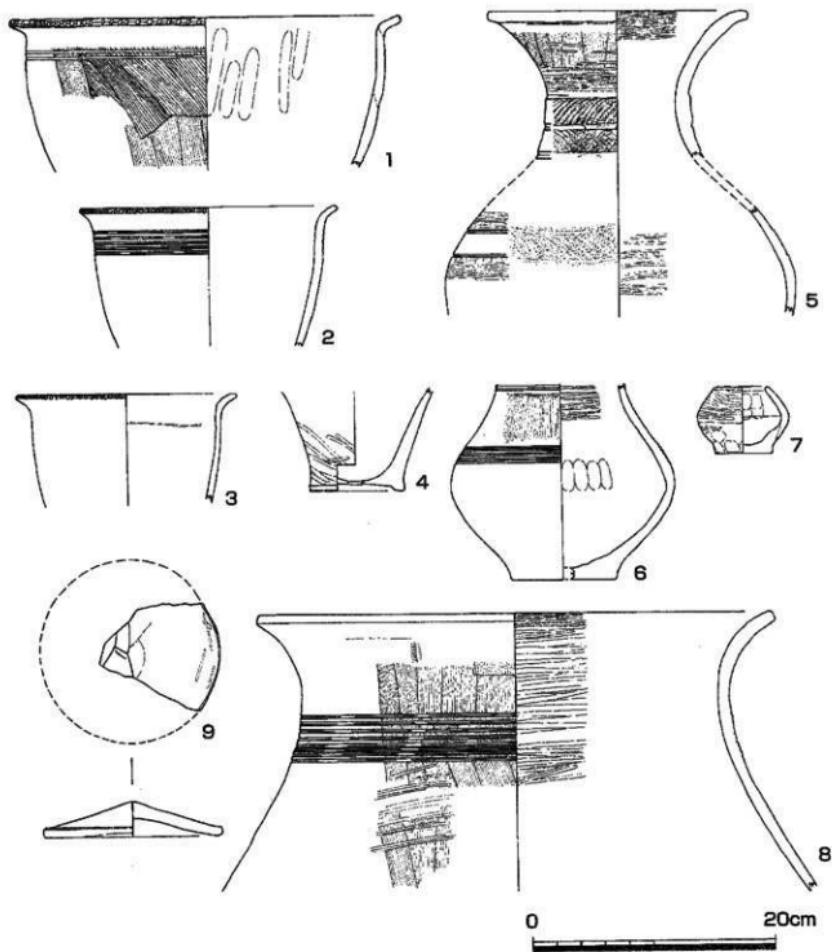
無頸壺には、やや体部の張るもの（図51-6）と卵形のもの（図51-7）とがある。両者とも外面に緻密な横方向のヘラ磨きが行われている。7は6条ずつの帯状沈線が施されているが、最下段は体部最大径の下方に位置しており、前期以来の施文法則が崩れていることが分かる。



第50図 第9調査区SD-VI上層～中層出土土器 (S=1/4)



第61図 第9調査区SD-VI中層出土土器 (S=1/4)



第52図 第9調査区SD-VI下層出土土器 (S=1/4)

鉢には、小型品（図 51-8・9）、中型品（図 51-10・11）、大型品（図 51-12）がある。小型品は、底部からやや内湾気味に立ち上がるもので、口縁は直立する。9は口縁下に瘤状の把手を貼り付けている。中型品は口縁を外反させるものである。10は内面口縁付近に横方向のハケを行う。大型品 12 は体部から大きく開くものであり、口縁を大きく屈曲させる。口縁下には瘤状の把手を貼り付けているが、破損品であるため現状で 2 個が残るのみである。体部外面の調整は縦方向のハケ→把手の貼り付け→横方向のヘラ磨きである。

下層出土資料（第 52 図）では、甕（1～3）はいずれも口縁を外反させる形態のものである。端部にはヘラ刻みが施される。体部には 2 条（1）、5 条（2）の沈線が廻らされる。甕底部 4 は高台状の上げ底となっており、薄い底部に焼成後穿孔が行われている。

広口壺 5 は球形の体部に長い頸部を有するものである。頸部には幅太の低い削り出し突帯が 2 条廻らされ、上部に貝殻の腹部を押しつけた平行斜線文が緩杉状に施されている。体部にも沈線 2 本で区画した施文帶内部に同様の手法で平行斜線文が施される。6 は頸部が欠失しているが、頸部から体部上半にかけて縦方向のヘラ磨きが行われていることが特徴である。8 は大型の広口壺。太い頸部に沈線を 8 条廻らせる。外面は縦方向のハケ調整が行われるが、部分的に横方向のヘラ磨きが施される。

7 はミニチュアの無頸壺。平底の底部に体部の張る形態である。

9 は壺蓋。笠形のものである。頂部から直線的に口縁に開く器形である。頂部につまみ、紐孔は見られない。

S D - VI はその出土土器の特徴から前期末葉の時期が与えられる（森田編年 I - 4 期）。その中でも、櫛描きの直線文が施される甕（図 50-3）、帯状沈線の文様部位の崩れが見られる無頸壺（図 51-7）などは II 様式への過渡的な様相を示す資料といえる。

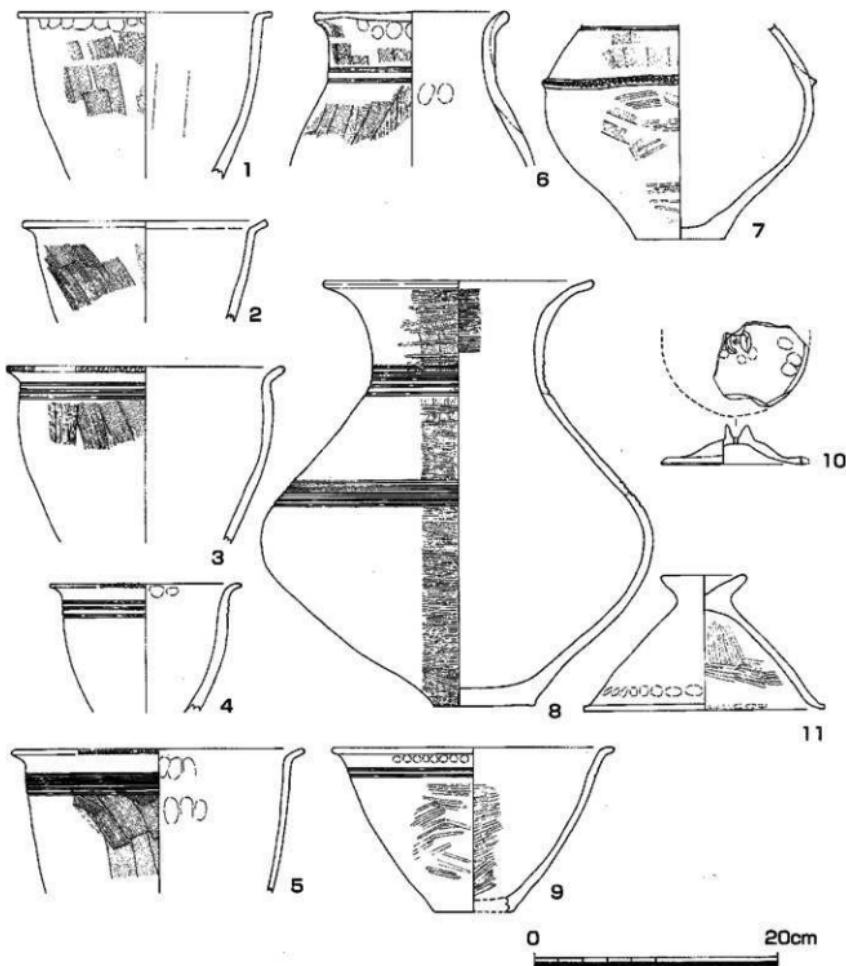
## （2）第 8 調査区

### ① S D - V (第 37 図)

断面「U」字形の幅細の溝である（第 20 図参照）。規模が小さいため、遺物は一括して取り上げている。遺物は、コンテナバットで 10 箱出土している。

甕（1～5）は、口縁を逆「L」字状に屈曲させるもの（1）と「く」の字状に外反させるもの（2～4）とがある。1・2 は無文の甕であり、3～5 は口縁端部にヘラ刻み、体部に 3～6 条のヘラ描沈線を廻らせる。3 の口縁端部のヘラ刻みは全周せずに空間を設ける部分がある。

広口壺には、球形の体部から明確な頸部を有し口縁が大きく外反する 8 と、卵形の体部に直立する頸部を有し口縁を短く外反させる 6 とがある。前者は頸部に 5 条、体部に 6 条のヘラ描沈線を廻らせる。外面は縦方向のハケ後横方向の丁寧なヘラ磨きで調整を行う。一方後者は頸部に沈線を 2 条廻らせるが、外面は縦方向のハケ後部分的に横方向にナデ消すのみであり、やや粗雑な調整となっている。7 は広口壺の体部。体部最大径の直上に断



第53図 第8調査区SD-V出土土器 (S=1/4)

面三角形の貼り付け突帯を1条廻らせる。頂部にはハケ原体で刻みを施している。外面は縦横方向のハケ後部分的にナデ、ヘラ磨きである。

9は中型の鉢。口縁を「く」の字状に屈曲させる形態であり、体部に2条のヘラ描沈線が廻らされる。内外面共にナデ後やや粗雑な横方向のヘラ磨きが行われる。

10は壺蓋。笠形のもので、頂部に双頭のつまみを付加し、間に紐孔を設ける。

11は壺蓋。口径に対して器高の高いものである。頂部は周縁を斜め上方に拡張してつまみとしている。内面はヘラ磨きが行われるが、外面は板状の工具によるナデである。

この溝の所属時期に関しては、体部が卵形の広口壺（6）の存在や壺体部の沈線が多条化することなどから、I-3様式を中心とした時期が与えられる。

## ②SD-IV

SD-Vの北側に位置する断面台形状の溝である（第19図参照）。溝の南側には一部テラス状の平坦部があり二段に掘り込まれていることが分かるが、このテラス状の部分が弥生時代前期の溝の残存部分であり、中期（IV様式）に大きく掘り直されている。中期の溝で搅乱を受けていない堆積層からは前期後半の遺物が出土している。この状況は第8調査区の東側に位置する第1調査区のSD-6、また今回の調査範囲の南東側で平成3年度に行われた東奈良公民館の建設に伴う調査<sup>(22)</sup>で検出されているSD-01と同じ様相を見せている。現在確認されている弥生時代前期の溝では最外縁を廻る環壕である。

遺物は図化が行えておらず、今後の報告で掲載したい。

## （3）第5調査区

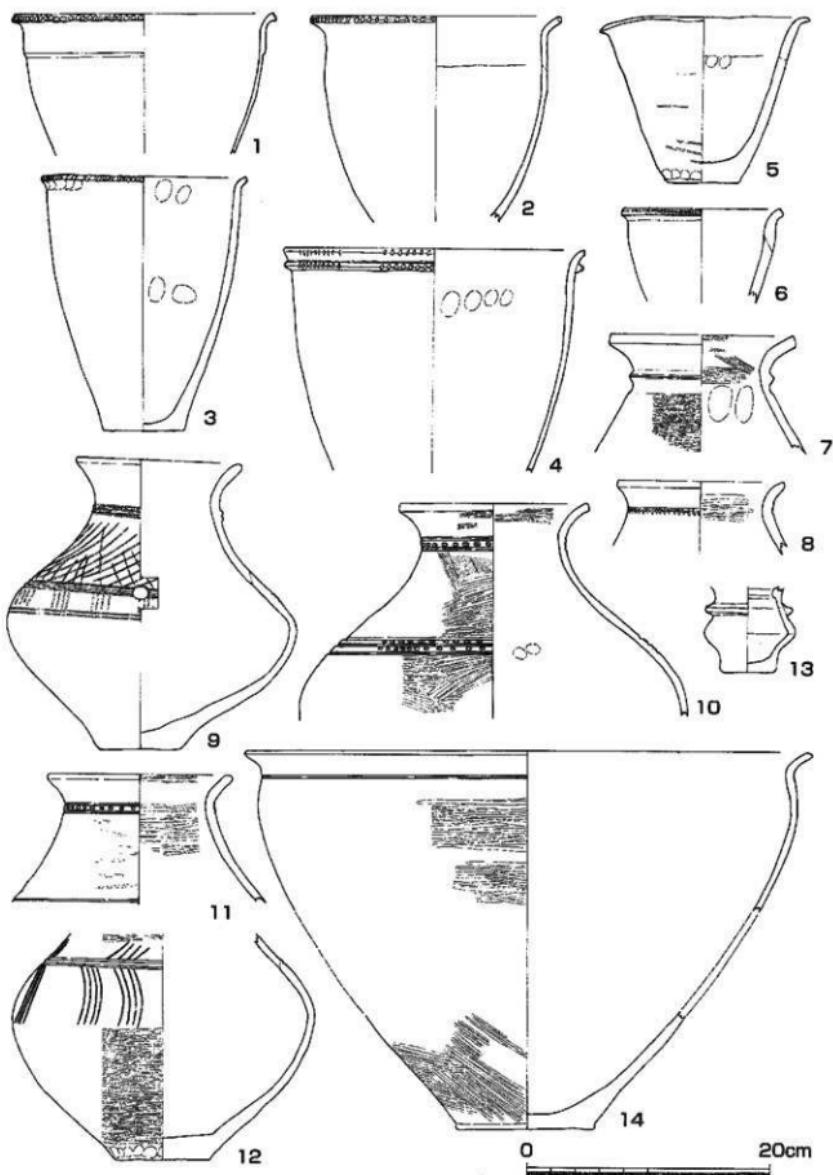
### ①SD-5（第32図）

東西方向に伸びる規模の小さい溝であり、溝の形状、位置関係から見て第9調査区のSD-01と同一の溝である。遺物は一括して取り上げており、出土量はコンテナバットで4箱である。

壺（1～4）は口縁を緩やかに外反させる形態である。いずれも体部があまり張らないもので、全面ナデ調整が行われる。口縁端部にはヘラ刻みが行われるが、4は軽く外反させた口縁直下に断面三角形の突出する突帯を貼り付けており、口縁端部、突帯頂部を同時にヘラで刻む。刻みは全周せずに空間を設ける部分がある。1は口縁下にヘラで削り出した段が形成されている。

5・6は厚い器壁の小型品であり、壺と言うよりは鉢として分類した方がよいと考えられる。全面ナデで調整されている。両者とも口縁を短く外反させており、6は口縁端部に竹管による刺突が行われている。

広口壺（7～12）は、頸部、体部の文様構成にバリエーションに富む。形態的には体部から屈曲して口縁に至るもの（7・8・11）と頸部が明瞭なもの（9・11）に分類される。



第54図 第5調査区SD-5出土土器 (S=1/4)

7は頸部に断面三角形の削り出突帯を廻らせる。8は頸部に1条沈線を廻らせた後に沈線下端にヘラ刻みを行っている。9は薄手の平底から球形に膨らむ体部を有しており、口縁は軽く外反する。頸部には断面台形の細い削り出し突帯が2条廻らされており、頂部には断続的なヘラ刻みが行われている。体部には3条、2条の沈線で施文帯を形成するが、上方の沈線は最上段をヘラ削りすることにより段状に形成されている。施文帯間には4本単位の平行直線文が施される。また体部上半には沈線による斜格子文が施される。体部の3条沈線の部位には注口の孔が穿たれている。10は頸部に2条、体部に3条の沈線を廻らせ、それぞれ沈線間に細い棒による刺突が行われている。11にも頸部に同様の文様が施される。12は頸部以上を欠失しているが、体部には沈線を2条廻らせ、その上下に4本単位の縦方向の弧線文を施している。13はミニチュアの広口壺。口縁端部を欠失している。頸部には強調された貼り付け突帯が廻らされており、頸部内面を断面台形状に肥厚させている。

14は大型の鉢。薄い平底から大きく広がる体部を有する。口縁は「く」の字状に外反させる。口縁下には沈線が1条廻らされる。体部外面は横、斜め方向のヘラ磨きが行われる。

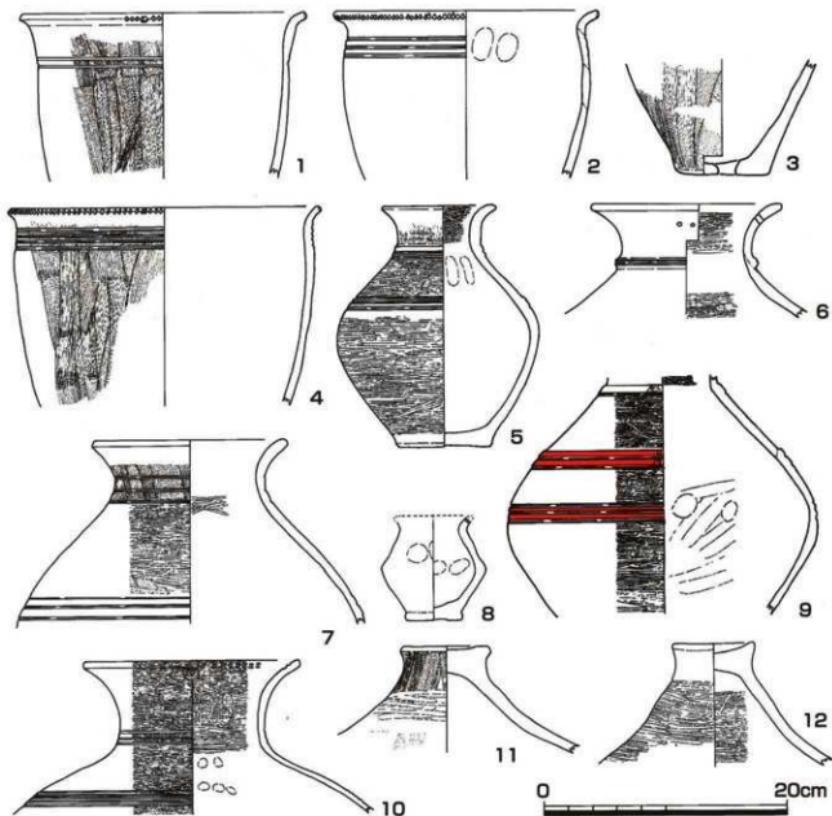
この溝の出土資料は、溝の存続期間に問題を残すものの、東奈良遺跡では前期でも最も古い時期に該当するものと考えられる。

## ②SD-8 (第32図)

断面「Y」字状の幅広の溝である(第15図参照)。コンテナバットで5箱の遺物が出土している。

甕(1・2・4)はいずれも短く外反する口縁を有する。口縁端部にはヘラ刻みが行われており、体部の沈線は2~4条廻らされている。底部片3は、中央に焼成後の穿孔が行われている。外面調整は縦方向のハケが主体となっている。

広口壺(5~10)はミニチュアである8を除くと比較的明瞭な頸部を有している。いずれも口径に対して体部が大きく膨らむ形態である。5は完形に復元できる個体である。幅広の底部に球形の体部のものであり、口縁はあまり広がらない。頸部、体部にはそれぞれ3条の沈線が廻らされるが、頸部の最上位はヘラで削り出すため段状になっている。体部外面は丁寧な横方向のヘラ磨きが行われる。6はやや大きく開く口縁を有するもので、頸部に断面台形の削り出し突帯が廻らされる。7は卵形の体部から短い頸部を有し、緩やかに外反して口縁に至る。頸部には3条の沈線が廻らされる。体部には微弱な段が形成されており、その下位には現状で2条の沈線が廻る。外面は縦方向のハケ後横方向のヘラ磨きが行われる。9は口縁と底部を欠失している。最大径が体部下半に位置するもので、細い頸部下、体部上半には低い断面台形の削り出し突帯が廻らされ、さらに体部最大径部位に沈線が3条廻らされる。突帯上、沈線間に彩色が施される。生駒西麓産の胎土である。10は薄い器壁であり、大きく肩の張る器形である。頸部、体部にそれぞれ3条、5条の沈線を廻らしている。口縁は緩やかに外反しており、内面に細い棒状工具により上下2列



第55図 第5調査区SD-8出土土器 (S=1/4)

の刺突が施される。その内の1つは貫通して紐孔となっている。外面及び内面口縁から頸部にかけて非常に緻密な横方向のヘラ磨きが行われる。胎土、焼成状況が他の土器とはやや異なっており、搬入品である可能性が高い。8はミニチュアの広口壺。微弱な上げ底状の底部であり、算盤球形の体部から屈曲する口縁を有する。

11・12は壺蓋。両者とも口縁部を欠失している。11はやや偏平な笠形のもので、つまみ部は周縁を外側に僅かに拡張するに留まる。12は器高の高い笠形であり、つまみ部は周縁を斜め上方に大きく拡張する。

この溝の所属時期に関しては、壺の沈線が最多でも4条に留まること、また広口壺の器形が5など古手のものが存在する一方で7・9など卵形の体部が存在することなどから考えて、I-2様式期からI-3様式期までの存続が想定される。

### ③SD-1 (第32図)

SD-8の東側に位置する南北方向の溝であり、断面形態は幅広の「U」字形を呈する(第13図参照)。遺物は一括して取り上げている。出土量は、コンテナバットで10箱である。

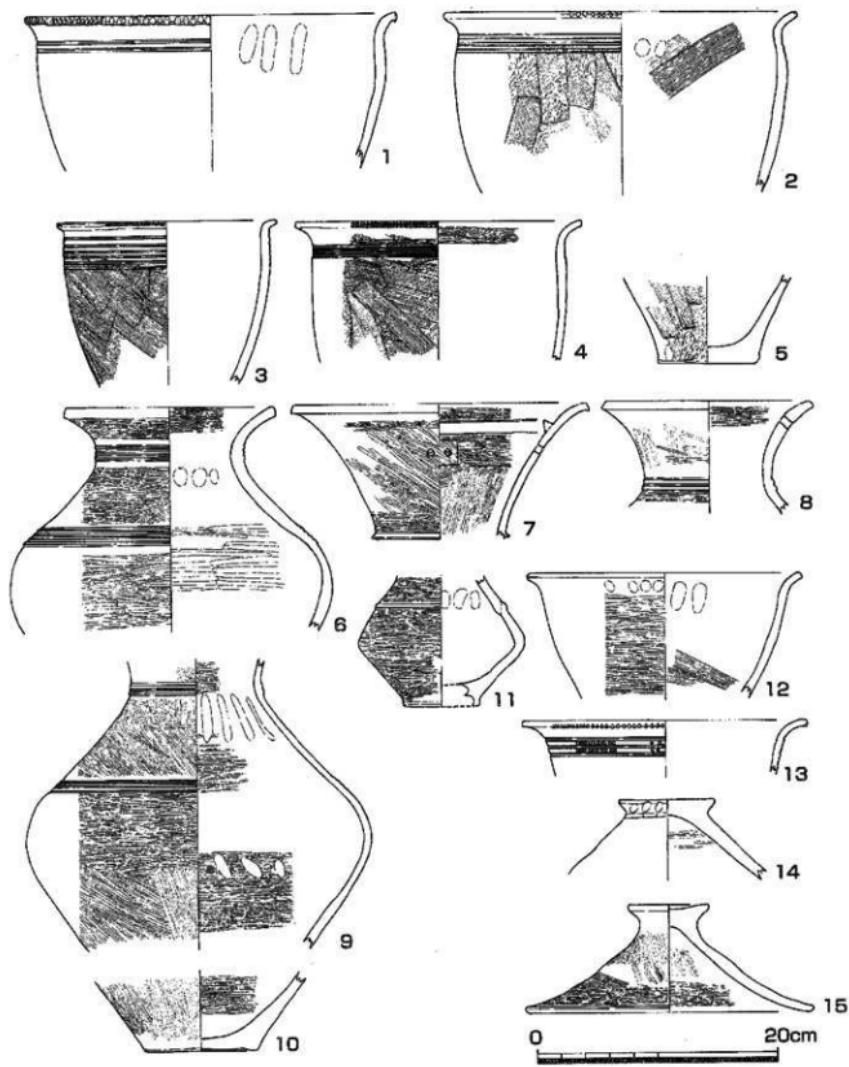
甕(1~4)は外反させる口縁端部にヘラ刻みを施すものである。この内4は口縁端部に沈線を1条廻らせた後に細かなヘラ刻みを行っている。体部には2条~6条の沈線が廻らされるが、2は半裁竹管による直線文が3条施されている。5は甕の底部片であるが、やや厚手の平底である。甕の外面調整は縦及び斜め方向のハケが主体を占めている。4の口縁内面には横方向のハケが行われる。

広口壺(6~10)は明瞭な頸部を有する。6は太頸の壺であり、球形の体部を有する。頸部、体部に低い幅太の削り出し突帯を廻らせ、上面に沈線を廻らせて頸部は3条、体部は5条の細い突線として表現されている。外面は横方向に密にヘラ磨きを行う。7は漏斗状に大きく開く口縁を有する。口縁内面には断面三角形の貼り付け突帯が廻らされる。また頸部にも断面三角形の貼り付け突帯が廻らされる。非常に薄い器壁であり、胎土から搬入品の可能性がある。8はあまり広がらない口縁のもので、頸部には断面台形の低い削り出し突帯が2条廻らされる。9、10は同一個体と考えられる。薄い平底であり、強く張り出した算盤球形の体部であり、短いが明瞭な頸部には細い削り出し突帯が2条廻らされる。体部には沈線が4条廻らされるが、最上部はヘラで削り取ることにより段状になっている。内外面とも丁寧なヘラ磨きが行われるが、その方向には特徴が見られる。11は小型の広口壺。口縁部は欠失している。厚手の平底に、最大径が体部下半にくる算盤球形の体部を有する。体部上半には削り出し突帯が1条廻らされる。外面は横方向に密にヘラ磨きを行う。

12の鉢は軽く外反する口縁を有する。体部外面は横方向に密にヘラ磨きを行う。13は大きく外反する口縁の下端にヘラ刻みを行うものである。体部には沈線を3条廻らせ、沈線間に竹管による刺突を施す。残存する器形からは甕である可能性があるが、残存部分のナデの特徴や体部の傾きからここでは鉢として報告しておく。

14・15は甕蓋である。15は大きく外に広がる笠形のものであり、つまみ周縁は横方向に大きく拡張されている。14は甕蓋としては異形のものであり、底部が外に拡張する鉢の底部である可能性もあるが、ここでは蓋として報告を行う。つまみ部上面は板に押しつけるもしくは板上で倒置して成形したために非常に平坦に整えられている。身部は直線的に広がっている。

SD-1は、位置関係からすると第9調査区のSD-IIIに対応するものと考えられるが、甕では多状沈線が見られ(3)、口縁部内面に横方向にハケを行うなどやや時期の下るものも見られる。同一の溝の場所による存続時期には考慮が必要であろうが、SD-III同様I-2からI-3様式内には収まるものと考える。



第56図 第5調査区SD-1出土土器 (S=1/4)

#### ④SD-4 (第32図)

断面浅いU字形の東西方向の溝である。(第14図参照) 遺物は一括して取り上げており、出土量はコンテナバットで9箱である。

甕(1~3)は口縁端部にヘラ刻みを施すものであるが、口縁部形態は「く」の字状に外反させるものの(1・2)と「L」字状に強く屈曲させるもの(3)とがある。体部には4~5条のヘラ描沈線を廻らせている。1は口径に対して体部が大きく膨らむ形態である。外面調整にはハケ、ナデが見られる。

広口壺(4~7)では、全体形の分かることは4の1点に過ぎない。4は厚手の平底に球形の体部を有するもので、明確な頸部から外反して口縁に至る。頸部には3条、体部には2条のヘラ描沈線が廻らされるが、体部の沈線は始点と終点が合致していない。外面は横方向のヘラ磨きを密に行う。内面は口縁から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。5は口縁から頸部にかけての破片。口縁端部にヘラ描沈線を2条廻らせる。頸部には幅細の削り出し突帯が4条巡る。6は口縁部から体部上半が残存している。口縁端部はナデによりシャープな面を形成する。短い頸部には断面台形の低い削り出し突帯を2条巡らせる。体部は肩の張らない器形である。7は頸部以上を欠失している。薄いやや上げ底状の底部から大きく腹部の張る器形である。体部上半にはヘラ描沈線が4条巡らされる。外面は横方向のヘラ磨きを密に行う。内面は名ナデ。8は壺底部。外面にヘラ描沈線を3条巡らしている。

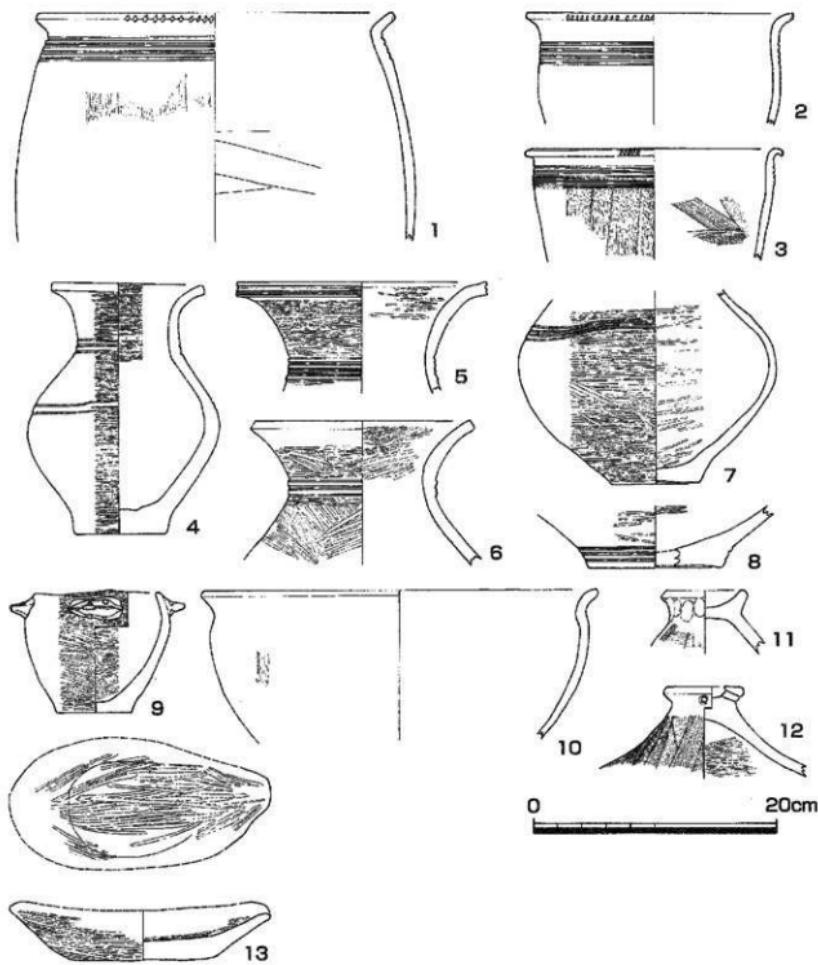
9は無頸壺。平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁端部はナデにより面を形成する。口縁下には瘤状把手を付加するが、1つのみが残存するだけである。把手の上下面に並列する2個の孔を穿っているが貫通していない。外面は横方向のヘラ磨きを密に行う。内面はナデ。

10は椀形の鉢。口縁は外面を強く横ナデすることにより「S」字形を呈する。外面はハケ後ナデ。内面はナデ。

甕蓋11は笠形の蓋と思われるが、笠部がやや内湾しているため台付きの鉢などになる可能性がある。12は笠形の甕蓋。つまみ部周縁を斜め上方に大きく拡張させる。つまみ部には紐孔が1孔穿たれているが、甕蓋としては稀な例である。外面は縱方向のハケを丁寧に行う。内面は横方向のヘラ磨きを密に行う。

13はパレット形土器。平面形態は木の葉形であり、残存する片側端部には注ぎ口が形成されている。底部はやや厚手の平底である。内外面とも丁寧なヘラ磨きが行われている。東奈良遺跡では今まで確認されていなかった器種である。

SD-4は上層(第2遺構面)から竪穴住居址が掘り込まれているため、検出時に資料が混ざってしまっている可能性も捨てきれない。事実パレット形土器13は竪穴住居址出土品との接合資料である。しかしながら、竪穴住居出土遺物に多量の弥生時代前期の土器資料が混ざることから、上層遺構掘削時に下層遺構を掘り込んだものと判断した。これらの遺物はI-2・3様式内に収まるものと考えられる。



第57図 第5調査区SD-4出土土器 (S=1/4)

#### (4) 弥生時代前期溝遺構の形成時期と出土土器に関して

以上、第9・8・5調査区の弥生時代前期に属する溝出土の土器資料を紹介した。ここでは、各溝遺構の形成時期を考察することで第3節のまとめとしたい。

まず、今回調査区内において確認された弥生時代前期の溝遺構の内、最も古式の資料として挙げられるのは第9調査区SD-01、第5調査区SD-5の資料である。両者は同一の遺構と考えられるもので、溝の規模が小さいこともあり一括性の高い資料と思われる。

この資料の内、壺は体部の張らない器形であり、段を有するものが出土している。口縁端部に加飾が施されるものの、体部にヘラ描沈線を施すものは確認できていない。体部内外面ともにナデ調整が行われており、ハケ調整は確認できていない。また、口縁端部直下に貼り付け突帯を廻らすものが存在する。

広口壺にも同様に段が形成されるもののが存在する。体部はヘラ描の直線文、曲線文、斜格子文など加飾に富んでいることが特徴である。また突帯上、沈線間に棒状工具による刺突が見られることも特徴の一つと言える。

これらの特徴は国鉄貨物線調査におけるII-A区溝26<sup>(註3)</sup>と様相が似通っており、検出位置から見ても同一の溝となる可能性がある。

次に形成される溝は、第9調査区SD-III、およびSD-Vと考えられる。SD-IIIは第5調査区SD-1と同一遺構と考えられる。SD-III・SD-1では壺に半裁竹管による直線文が、壺には刺突文が施されるのが特徴である。SD-Vは第1調査区及び第5調査区では確認できていない。部分的にSD-IIIに付随する溝である可能性がある。

第9調査区SD-IVはそれに後続する時期の溝と考えられるが、両者にはあまり時期差はないものと考えられる。しかしながら、SD-IVに北側（集落外側）から流入する地山状の土の問題が残る。出土資料的にはSD-VがSD-IVにやや先行するものと考えられるため、SD-Vの掘削土がSD-IVに流入したとは考えがたい。また、SD-IVと同一の遺構と考えられる第5調査区のSD-8にも同様の土が堆積していることからも、SD-IVの外側肩部外縁には土壘状の施設が廻っていたと推定できないであろうか。その場合は、SD-Vはすでに埋没していたものと考えなくてはならない。

また、SD-IVとほぼ同時期の溝としては第8調査区SD-V、第5調査区SD-4が該当するものと考えられる。第5調査区SD-4は第9調査区、第1調査区に該当する溝がなく、途中で派生する溝と考えられる。

弥生時代前期最終段階の溝は第9調査区SD-VIである。SD-VIの下層資料はすでに前期末に該当する資料であり、中層、上層では統く第II様式への過渡期的な要素が見いだされる。このSD-VIをもって弥生時代前期は終末を迎えるものと考えられる。

註1) 春田克行（1990）「3各地域の様式編年7揖津地域」、寺沢薫・森岡秀人（編）『弥生土器の様式と編年 近畿編II』所収、東京

2) 濱野俊一（1992）「東奈良遺跡」、茨木市教育委員会（編）『平成3年度発掘調査概報』所収、茨木（大阪）

3) 奥井哲秀他（1981）、東奈良遺跡調査会（編）『東奈良遺跡発掘調査概報II』、茨木（大阪）

# 出土土器観察表

検査番号	調査区	出土遺構	器種	特 徴				備 考
				外反させる口縁部の上下端にヘラ刻みを施す。上端部分は施文の途切れる部分がある。口縁下、体部には低い削り出し突帯がそれぞれ1条回り、体部の突帯にはヘラ刻みが施される。突帯で区画された施文帯には現状で5条のヘラ描沈線が施文状に施されている。残存する鋸歯間の「V」部分には幅1.3cm程度の板状工具で斜め方向にハケが行われている。残りはナデ調整。	口径(38.2cm) 残高 21.6cm 色調 淡明橙色 焼成 良 胎土 密			
44-1	9	SD-01	甕?	直立する口縁部であり、端部外側にヘラ刻みを施す。口縁直下に貼り付け突帯を廻らせ、ヘラ刻みを行っている。現存する部分はナデ調整。	口径 20.7cm 底部径 7.7cm 色調 14.6cm 焼成 淡灰褐色 胎土 良 密	黒灰色 焼成 良 胎土 密		
44-2	タ	タ	タ?	「く」の字状に屈曲させる口縁部を有する。口縁端部は丸く収められている。厚手の平底の底部から体部はあまり張り出さずに立ち上がる。基本的に全面ナデ調整であるが、部分的に細い板状の工具でナデが行われており、体部下半外側には部分的なヘラ磨きが見られる。体部外面に黒斑がある。	口径 15.0cm 腹部径 26.6cm 底部径 7.7cm 色調 23.3cm 焼成 淡灰褐色 胎土 良 密			
44-3	タ	タ	鉢	頭部および体部に段を有する。頭部から頸く外反して口縁部に至り、口縁端部は面を形成する。体部には微弱なヘラ描沈線を2条廻らせており、沈線の下位には3条単位の重強文を施している。底部は薄手の平底であり、底面にはヘラ描の「#」記号が見られる。体部最大径に比して口径は約1/2。外面および口縁端部は横方向の丁寧なヘラ磨きが行われ、内面は頭部のみ横方向のヘラ磨き。残りはナデ調整。黒斑が見られる。	口径 18.4cm 腹部径 27.6cm 底部径 8.8cm 色調 29.4cm 焼成 淡橙色 胎土 良 密			
44-4	タ	タ	広口壺	太い頭部から緩やかに外反する口縁部を有する。口縁端部はナデで鈍く面を形成する。頭部下には削り出し突帯(貼り付けの可能性有り)を1条廻らせており、端部に開隙を空けて6~8単位のヘラ刻みを施している。底部は薄い平底。体部外面は横方向のヘラ磨き、頭部以上はナデ調整。内面は口縁から頭部は横方向のヘラ磨き、以下はナデ調整。約4cmの粘土板を積み上げて成形されている。	口径 31.6cm 腹部径 13.5cm 底部径 12.6cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 密			
45-1	タ	SD-IV 上層	甕	大きく外反させる口縁部を有し、端部中位から下端にかけてヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線を4条廻らせている。体部外面は横方向のハケ。口縁部内外面は横ナデ、体部内面はナデ調整。	口径 (25.0cm) 腹部径 8.4cm 底部径 (25.0cm) 色調 暗褐色 焼成 良 密			
45-2	タ	タ	タ	「L」字状に屈曲させた口縁端部にヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が3条廻らされるが、沈線下部をへラ状工具で強く削ることにより段段の仕上げとなっている。底部は薄い平底であるが、焼成後に穿孔が行われている。全面ナデ調整。	口径 (19.6cm) 腹部径 12.6cm 底部径 12.6cm 色調 暗褐色 焼成 良 密			
45-3	タ	タ	タ	無文の甕であり、外反する口縁部を有し、端部はナデにより面を形成する。胎土から見て撤入品である可能性がある。	口径 (18.8cm) 腹部径 5.7cm 底部径 5.7cm 色調 淡灰白色 焼成 良 密			
45-4	タ	タ	広口壺	大きく外傾して開く口縁部を有し、口縁端部にはヘラ描沈線が1条廻らされる。蓋用の孔が1孔空たれています。屈曲するのみの頭部には断面三角形の貼り付け突帯が付加されている。内外面とも基本的にはナデ調整であるが、外面部縁端部下と内面部付近は横方向のヘラ磨きが行われている。	口径 8.2cm 腹部径 4.0cm 底部径 4.0cm 色調 暗灰褐色 焼成 良 密			
45-5	タ	タ	壺	ミニチュアの広口壺。口縁部を欠失している。非常に丁寧な作りであり、外面は頭部が縱方向のヘラ磨き、体部は横方向のヘラ磨き、底面もヘラ磨きを行っている。内面はナデ調整。	口径 10.4cm つまみ径 7.1cm 色調 明灰橙色 焼成 良 密			
45-6	タ	タ	甕蓋	つまみ端部を上方向に拡張させる笠形の蓋。緩やかに外反して口縁に至る。外面は粗い横方向のヘラ磨き。内面は口縁付近とつまみ付近が横方向のヘラ磨き。中位は縦方向のヘラ磨き。				

探査番号	調査区	出土層構	器種	特徴		備考
				外	内	
45-7	9	SD-IV 上層	壺蓋	やや偏平な笠形の壺蓋。壺蓋としては器壁が厚い。つまみ部はやや欠失しているが、あまり突出する形態ではないようである。口縁付近には紐孔が1孔が空たれている。対角位置は破損しているため孔の有無は不明。口縁端部には使用による剥離が見られる。外面はナデ後ハラ磨き。内面はナデ調整。		直径 16.9cm 残高 3.4cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 やや粗
45-8	タ	タ	◆	偏平な笠形の壺蓋。頂部に紐孔が1孔空たれている。外面口縁付近にヘラ描沈線を2条施させ、その内側をヘラで削ることにより2条の施文帯を形成する。内部には、ヘラ状工具により綾糸状に粗雑な沈線を施している。一部さらに外側の区間に沈線を施す。外面はハケ後粗雑なヘラ磨き。内面はナデ。		直径(14.6cm) 器高 2.6cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密
45-9	9	SD-IV 中層	壺	「く」の字状に外反する口縁を有し、端部の中位から下端にかけてヘラ刻みを行うが、間隔はランダムである。体部にはヘラ描沈線が2条施らされる。全面ナデ調整。		口径(25.1cm) 残高 11.5cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 やや粗
45-10	タ	タ	タ	「く」の字状に強く外反させる口縁を有し、端部の中位から下端にかけてヘラ刻みを施すが、強さ、間隔などやや雑な様相である。体部にはヘラ描沈線を1条施らせ。内面にもナデ調整。内面には指顎圧痕が強く残る。		口径(21.1cm) 残高 10.4cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密
45-11	タ	タ	タ	「く」の字状に強く外反させる口縁を有し、端部にヘラ刻みを密に施す。体部にはヘラ描沈線が3条施らされる。内面には粘土板接合位置には指顎圧痕が強く残る。内面下半部に切圧痕が残る。内面ともナデ調整。		口径(24.2cm) 残高 19.9cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密
45-12	タ	タ	広口壺	明瞭な頸部を有し、口縁は大きく外反して開く。口縁端部にはヘラ描沈線が1条施らされる。口縁には紐孔が2孔空たれている。頸部と体部は貼り付け突審によって区画されており、突審頂部にはヘラ状工具により「V」字状に連続して抉られている。調整は外面口縁から頸部は縱方向のハケを行なうが、口縁付近は横ナデによって削されている。内面は口縁から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。以下はナデ。		口径(19.8cm) 残高 8.3cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密
45-13	タ	タ	コップ 形土器	口縁を「く」の字状に軽く屈曲させており、蓋を意識したミニチュアの土器。外面はナデ調整。内面は口縁は横ナデ。体部は細い板状工具によるハケ状のナデ。		口径 8.4cm 底部径 4.8cm 器高 10.2cm 色調 白色 焼成 良 胎土 密
45-14	タ	タ	台付鉢	ミニチュアの台付鉢と考えられるが、高杯を模している可能性もある。鉢部に対して台部が高い。口縁端部はナデで面を形成する。全面ナデ調整。体部内面には赤色顔料とスヌが付着している。		口径 5.3cm 台部径 3.6cm 器高 4.9cm 色調 淡灰白色 焼成 良 胎土 密
46-1	タ	タ	鉢	大型の鉢。口縁を軽く外反させており、端部にはヘラ描沈線が1条廻る。口縁と体部は2条のヘラ描沈線によって区画される。調整は残存部分では口縁外縁のみ横ナデ。他は横方向の緻密なヘラ磨き。		口径(45.4cm) 残高 10.5cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密
46-2	タ	タ	高杯	明確な脚柱部を持ち、脚部に対して大きな杯部を有する。杯部外面は横方向のヘラ磨き。杯内部及び脚部内外面は丁寧なナデ調整。		脚部径 12.6cm 残高 10.8cm 色調 灰黃白色 焼成 良 胎土 密
46-3	9	SD-IV 下層	壺	体部最大径から内湾気味に立ち上がり、口縁は「く」の字状に軽く屈曲する。口縁端部中位から下端にかけてヘラ刻みが施される。体部にはヘラ描沈線が4条施らされる。全面ナデ調整。		口径 21.1cm 残高 17.4cm 色調 淡灰白色 焼成 良 胎土 密
46-4	タ	タ	広口壺	やや長頸の広口壺であり、口縁は緩やかに外反する。紐孔が1孔残存する。頭部には前り出しの低い突審を施らせるが、突審上面にはヘラ描沈線2条施らせ。さらに縦方向に5本単位の沈線を間隔を空けて施している。調整は外面は頭部から口縁部にかけて縦方向のハケ後横方向のヘラ磨き。内面は口縁部から頭部途中まで横方向のヘラ磨き。以下はナデ。		口径(18.6cm) 残高 9.3cm 色調 淡灰白色 焼成 良 胎土 密

博物番号	調査区	出土遺物	器種	特徴	備考
46-5	9	SD-IV 下層	広口壺	頸部以上が欠失しているが太頸の広口壺である。腹部最大径は体部のやや上方に位置する。底部は薄い平底。内外面はヘラ状工具で横方向に磨き、なでられている。	腹部径 15.1cm 底部径 6.3cm 残高 12.8cm 色調 淡灰白色 焼成 良 胎土 やわらか
46-6	タ	タ	タ	小型の広口壺。腹部最大径が体部のはば中央に位置しており、頸部から口縁部にかけては鋸く外反する形態である。頸部に1条、体部に2条へラ括沈線を刨らせる。体部の沈線下には2本埠位の直弦文を左一右一方に連続して施している。底部は僅かに上げ底状である。体部外面は横方向の細かいヘラ磨き。以上はナデおよび粗い横方向のヘラ磨き。内面は口縁部のみ横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。牛頭西窓系である。	口径 6.8cm 腹部径 10.6cm 底部径 4.4cm 器高 10.3cm 色調 黒褐色 焼成 良 胎土 硬めて密
46-7	タ	タ	鉢	楕円の中型鉢。厚い平底の底部から外開きに大きく立ち上がり、鋸く外反する口縁部を有する。口縁部はヘラ状工具によって面が形成されている。調整は体部外面は横方向のヘラ磨き、口縁、底部はナデ。内面は口縁のみ横方向のヘラ磨き。以下はナデ。	口径 27.0cm 腹部径 29.4cm 底部径 9.2cm 器高 19.2cm 色調 淡黄褐色 焼成 良 胎土 密
46-8	タ	タ	片口鉢	ミニチュアの鉢形上器。薄い底部からはば垂直に立ち上がり口縁に至る。平面は殆円形の器形であり、長軸の片側に片口が形成されている。対応する位置も四形に形成されている。内面および口縁の一帯に赤色顔料が付着している。全面ナデ調整。	口径 7.3cm×5.7cm 2.65cm 色調 淡灰黄色 焼成 良 胎土 密
46-9	タ	タ	壺	笠形の壺であり、頂部に紐孔が1孔穿たれている。外面には頂部から放射状線に黒色の塗料が塗られており、また不定形に赤色顔料も塗布されている。内面にも黒色塗料が塗られている。調整は外面上半は縱方向のヘラ磨き、口縁付近は横方向のヘラ磨きを行う。内面も丁寧なヘラ磨きが行われる。	直徑 (11.0cm) 器高 2.2cm 断面色調 黑褐色 焼成 良 胎土 密
47-1	9	SD-V	壺	やや厚手の平底であり、鋸く偏卵形の体部を有する壺。口縁は緩やかに外反する。口縁端部下端にヘラ刻みを施す。体部にはヘラ括沈線が3条施される。内外面ともナデ調整。	口径 20.0cm 底部径 7.0cm 器高 21.0cm 色調 黑褐色 焼成 良 胎土 密
47-2	タ	タ	壺	強く外反する口縁部を有する。口縁端部にはヘラ刻みを施す。内外面ともナデ調整。	口径 (24.0cm) 残高 10.4cm 色調 明褐色 焼成 良 胎土 密
47-3	タ	タ	タ	ミニチュアの壺。厚手で端部が外に張る底部を有し、外反させる口縁の端部には極めて薄くヘラ刻みが施されている。全面ナデによる調整が行われる。	口径 (9.8cm) 底部径 4.5cm 器高 8.3cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
47-4	タ	タ	広口壺	明確な頸部を有し、緩やかに外反して口縁部を形成する。口縁部に紐孔が1孔穿たれている。頸部にはヘラ括沈線が6条施されるが、沈線下をヘラ工具により段状に削り出すことで5条の突線が彫刻されているように見える。調整は口縁部が内外面共に横方向のヘラ磨き。体部外面は横方向のヘラ磨き。体部内面はナデ調整。	口径 (16.6cm) 残高 10.4cm 色調 淡灰黄色 焼成 良 胎土 密
47-5	タ	タ	タ	短い頸部から大きく外反する口縁部を有する。口縁端部はナデにより丸く取める。外面頸部から体部は横方向の細かなヘラ磨き。内面頸部も横方向の細かなヘラ磨きを行う。他はナデ調整。	口径 (15.4cm) 残高 6.2cm 色調 明橙色 焼成 良 胎土 硬めて密
47-6	タ	タ	壺?	大型の變形土器であるが、他の壺と比べるとやや異形のものである。口縁と体部はヘラで削ることにより段を形成することで区画されるが、段はあまり明瞭なものではない。外反する口縁の端部はヘラナデによりシャープな面を形成する。体部外面は指先により縱方向に丁寧にナデする。一部横方向にもナデする。口縁内外面は横ナデ。体部内面もナデ調整。	口径 (35.4cm) 残高 13.7cm 色調 明橙色 焼成 良 胎土 密

掲図番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
47-7	9	SD-V	鉢	ミニチュアの鉢。手捏ねによる成形。高台状の底部を有する。口縁内外面には赤色顔料が付着している。全面ナデによる調整が行われる。	口径 6.8cm 底部径 4.9cm 器高 3.95cm 色調 灰白色 焼成 良 脱土 密
47-8	◆	◆	壺	薄い器壁から壺の蓋と考えられるが、口径は大きい。口縁端部はナデにより面を形成している。内外面とも丁寧なヘラ磨きが行われている。	直径 (20.0cm) 色調 明褐色 焼成 良 施して密
47-9	◆	◆	壺蓋	つまみ部と口縁部が欠失しているが、やや偏平な笠形の蓋になると思われる。全面ナデ調整。	残高 4.4cm 色調 灰褐色 焼成 良 脱土 密
48-1	9	SD-Ⅲ 上層	壺	「く」の字状に肩曲させる口縁の下端部にやや間隔を空けてヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が1条廻らされる。体部外面は縱方向にハケを行なうが、口縁付近は横ナデにより消されている。内面はナデ調整。	口径 23.8cm 残高 17.7cm 色調 暗褐色 焼成 良 やや粗
48-2	◆	◆	◆	「く」の字状に外反させる口縁の端部にヘラ刻みを密に施す。体部にはヘラ描沈線が4条廻らされる。内外面ともナデ調整。	口径 (18.3cm) 残高 11.6cm 色調 赤褐色 焼成 良 脱土 密
48-3	◆	◆	◆	「く」の字状に外反させる口縁の端部にヘラ刻みを施す。体部には4条と2条のヘラ描沈線で施文帯を設け、内部に2本単位の沈線を鋸歯状に施している。内外面ともナデ調整。生駒西遺産。	色調 暗褐色 焼成 脱土 密
48-4	◆	◆	広口壺	明確な腹部から緩やかに外反する口縁部を有する。口縁端部は沈線の凹みがあるが、粘土板接合痕である。頭部にはヘラ描沈線が4条廻らされるが、上下2条は体部をヘラで削り取ることにより3条の突起が残っているように見える。外面は横方向のヘラ磨き。内面は口縁部が横方向へのラ磨き。以下はナデ調整。	口径 (18.8cm) 残高 9.8cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
48-5	◆	◆	鉢	中型の鉢。体部から直立して立ち上がり、「く」の字状に口縁を屈曲させている。体部にはヘラ描沈線が2条廻らされているが、一部3条になる部分がある。体部外面は縱方向のヘラ磨き。口縁内外面は横ナデ。体部内面はナデと横方向の書き気味のヘラナデ。	口径 (31.6cm) 残高 12.0cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
48-6	◆	◆	◆	大型の輪形の鉢。口縁部は軽く外反させており、端部はナデとヘラ磨きにより明瞭な面を形成する。体部にはヘラ描沈線が2条廻らされる。体部外面は横方向のヘラ磨き、「口縁外面は縱方向のハケ後横ナデ、一部横方向のヘラ磨き。口縁部内面は横方向の皮ナデ? 後横方向の粗いヘラ磨き。以下は横方向のヘラ磨きで調整。	口径 (40.7cm) 残高 10.2cm 色調 淡黄褐色 焼成 良 胎土 密
48-7	◆	◆	壺蓋	やや偏平な笠形の蓋。頂部に紐孔を1孔穿つ。口縁端部はナデで面を形成する。全面基本的にナデ調整を行なっているが、内外面とも一部横方向にヘラ磨きを行う。	直径 12.85cm 器高 2.0cm 色調 暗褐色 焼成 良 脱土 密
48-8	◆	◆	◆	やや偏平な笠形の蓋であり、頂部に紐孔を1孔穿つ。紐孔両側に双頭のつまみを附加している。口縁端部はナデにより面を形成する。全面ナデ調整。	直径 (9.1cm) 器高 2.35cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
48-9	◆	◆	◆	頂部がつまみ状に突出する蓋であり、頂部に紐孔を1孔穿つ。口縁端部はナデにより面が形成される。全面とも指ナデにより調整が行われているが、一部ヘラナデも行われる。	直径 9.0cm 器高 2.75cm 色調 灰白色 焼成 良 脱土 密
48-10	◆	SD-Ⅲ 中層	壺	強く外反する口縁端部にハケ原体による刻みを密に施している。体部にはヘラ描沈線が3条廻らされている。体部外面は縱方向のハケを行なうが、口縁付近は横ナデによって消されている。内面は剥離が激しいがナデ調整が行われているようである。	口径 (23.5cm) 残高 9.9cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 粗
48-11	◆	◆	◆	体部下半から口縁部にかけて直線的に開く器形であり、口縁は僅かに外反する。口縁端部にはヘラ刻みが行われている。内外面ともナデ調整。器形のひずみが大きい。	口径 19.8cm 残高 11.6cm 色調 黄褐色 焼成 良 脱土 密

発掘番号	調査区	出土遺構	器種	特徴			備考
						形	
48-12	9	SD-III 中層	甕	小型の甕。中央部がやや上げ底状の底部から体部はあまり膨らまずに立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈曲しておらず、端部は丸く取れられている。器壁が厚く、粘土に接合部が明瞭に残る。全面指ナデにより調整されている。			口径 14.3cm 腹部径 6.4cm 器高 14.0cm 色調 暗灰色 焼成 良 脱土 密
48-13	*	*	広口壺	頸部から口縁部にかけて大きく外反する器形。口縁端部はナデで面を形成している。頸部には削り出しの突起が1条廻らされる。体部にはヘラ削沈線が2条廻る。外面調整は口縁部から体部上半までは縱方向のハケ後横方向のヘラ磨き。体部下半は横方向のヘラ磨き。内面調整は口縁部から頸部がナデ後横方向の粗いヘラ磨き。以下はナデ調整。			口径 (20.2cm) 腹部径 (32.4cm) 器高 24.7cm 色調 黄白色 焼成 良 胎土 密
48-14	*	*	*	口縁と頸部との境界に段を有する広口壺の破片。段は口縁部に粘土板を付加し、ヘラ削り後縱方向にハケを行うことによって形成されている。口縁は繩やかに外反するが、端部を指でつまみ曲げてやや屈曲意味で開く。口縁端部はナデで丸く取れられる。外面調整は口縁付近は横ナデ、以下段までは横方向のヘラ磨き、段以下は縱ハケ後横方向のヘラ磨き。内面は横方向のヘラ磨き。			色調 赤褐色 焼成 脱土 良 密
48-15	*	*	鉢	口縁下に段を有する鉢の破片。段は粘土を付加することによって形成されている。口縁は僅かに外反すが、端部はナデにより面を形成する。内外面共に横方向のヘラ磨きで調整を行う。			色調 淡橙色 焼成 脱土 良 密
48-16	*	*	壺蓋	小片であるが、恐らく外面中央にヘラ削による沈線を円形に1～2条廻らせ、2本単位の重張文を外向側に加飾し、さらに口縁付近に1～2条のヘラ削沈線を円形に廻らせ、3本単位の重張文を内向側に加飾しているものと考えられる。外面ヘラ磨き、内面ナデ調整。生駒西麓産の胎土である。			色調 暗灰褐色 焼成 脱土 良 極めて密
49-1	9	SD-III 下層	甕	「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、端部の中位から下端にかけてヘラ削みを施す。体部にはヘラ削沈線が3条廻らされる。外面調整は口縁部が横ナデが行われるが、一部に縱ハケが残っている。体部は縱方向のハケ。内面はナデ調整。			口径 (32.8cm) 12.5cm 色調 黄灰色 焼成 良 脱土 密
49-2	*	*	*	軽く外反させる口縁を有し、体部にはヘラ削みが施される。体部にはヘラ削沈線が4条廻らされる。外面調整は口縁部が横ナデ、体部は縱方向・斜め方向のハケが行われる。内面はナデ調整。			口径 (20.8cm) 9.5cm 色調 黄褐色 焼成 良 やや粗
49-3	*	*	*	「く」の字状に外反させる口縁部を有し、端部には細かなヘラ削みが施される。体部にはヘラ削沈線が3条廻らされる。全面ナデ調整。			口径 (26.4cm) 10.5cm 色調 黒色 焼成 良 脱土 密
49-4	*	*	広口壺	大型の広口壺。口縁と頸部の境界に段を有している。段は粘土板を付加して形成されており、ヘラで削り取ることで調整している。口縁部は繩やかに外反しており、端部には粘土板の接合部にヘラ削沈線が1条廻らされている。内外面ともナデ調整。			口径 (36.4cm) 11.2cm 色調 黄白色 焼成 良 脱土 密
49-5	*	*	*	大型の広口壺。矧く外反する口縁部を有し、端部にはヘラ削沈線が1条廻らされる。矧く頸部にもヘラ削沈線が1条廻らされている。体部上半には微弱な段が形成されている。内外面ともナデ調整で横方向のヘラ磨きで調整されている。			口径 (41.2cm) 29.3cm 色調 橙褐色 焼成 良 脱土 密
49-6	*	*	*	短い頸部からなだらかに外反する口縁を有する。端部にはヘラ削沈線が1条廻らされる。頸部には3条、体部には2条のヘラ削沈線が廻らされる。外面調整は口縁部は皮状の道具で強く横方向にナデられており、体部は横方向のヘラ磨きが行われている。内面は口縁、体部上半は横方向のヘラ磨き。他はナデ調整。			口径 17.2cm 腹部径 (32.8cm) 残高 20.2cm 色調 明橙色 焼成 良 脱土 密
49-7	*	*	*	明確な頸部を有し、大きく外反する口縁を有する。口縁端部にはヘラ削沈線が1条廻らされる。口縁には孔状が1孔空たれている。頸部にはヘラ削沈線が3条廻らされるが、最上下端をヘラで削り取るために4条の実線が廻っているように見える。内外面ともナデ後横方向の粗いヘラ磨きであるが、外面口縁部～頸部には縱方向のハケをナデ消している痕跡が残る。			口径 (21.8cm) 9.3cm 色調 淡橙色 焼成 良 密

括弧番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
49-8	9	SD-Ⅲ 下層	広口壺	頸部から大きく外反する口縁部を有する。口縁端部はナデにより丸く收められている。紐孔は1孔空たれている。頸部には断面三角形の貼り付け突帯が埋らされており、頂部に大きくヘラ割みを行っている。外面調整は横方向の細かいヘラ磨き、内面は口縁端部付近は横方向のヘラ磨き、腹部にかけては横方向のハケ、以下はナデ調整が行われる。	口径 21.3cm 残高 8.3cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
49-9	*	*	*	頸部から緩やかに外反するあまり大きく広がらない口縁を有する。口縁端部はナデにより丸く收められている。頸部にはヘラ描沈綱が2条廻らされており、間に竹箸による刺突が施されている。外面調整は横方向のヘラナデ。内面は口縁部がナデ後横方向の粗いヘラ磨き、腹部が横方向のヘラ磨き、以下はナデ調整。	口径 (18.5cm) 残高 7.2cm 色調 暗灰褐色 焼成 良 胎土 やや粗
49-10	*	*	高杯	高杯の杯部と考えられる個体である。精選された胎土で作られており、胎土の特徴からは撒入品である可能性が高いと考える。外開きの楕形の体部であり、口縁は僅かに外反させている。口縁端部はナデにより面を形成する。内面には放射線状に極めて密にヘラ磨きが行われている。外面は縱方向にナデ気味に粗いヘラ磨きが行われる。	口径 (18.3cm) 残高 6.1cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
49-11	*	*	鉢	口縁部を「し」字形に屈曲させる大型の鉢。口縁上下を強くなすことによって口縁端部は肥厚している。体部外面は横方向のヘラ磨き、内面は口縁部が横方向の細かいヘラ磨き、体部はナデ後横方向の粗いヘラ磨き。	口径 (53.4cm) 残高 13.5cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
50-1	9	SD-Ⅵ 上層	甕	口縁を「く」の字形に屈曲させ、端部をナデにより丸く收める。體壁が厚い。外面調整は体部が縱方向のハケ。口縁は横ナデ。内面はナデ調整。	LJ径 (26.9cm) 残高 14.4cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
50-2	*	*	*	指つまみにより短く外反させる口縁を有し、端部にヘラ割みを施す。体部にはヘラ描沈綱が6条廻らされる。調整は口縁横ナデ。体部外面は縱方向の板ナデ。内面はナデ。	口径 (26.4cm) 残高 9.3cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
50-3	*	*	*	大きく外反させる口縁を有し、端部に棒で追続する刺突を施している。体部には3条の箇離の直線文が廻らされる。調整は口縁部が横ナデ。体部外面は縱方向のハケ。内面はナデ調整。ひずみが大きい。	口径 (21.8cm) 残高 15.7cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
50-4	*	*	*	甕の底部。平底の底部中央には焼孔が行われている。外面は縱方向の細かいハケ。内面はナデ調整。	底部径 7.4cm 残高 5.9cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
50-5	*	*	広口壺	頸部から短く外反する口縁を有する。端部はナデにより丸く收める。頸部にはヘラ描沈綱が2条廻らされる。調整は口縁部が横ナデ。外面頸部から体部にかけてはナデ後横方向の粗いヘラ磨き。内面はナデ調整であるが、一部横方向のヘラ磨きが行われる。	口径 (18.0cm) 残高 6.7cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
50-6	*	*	*	太い頸部から短く外反する口縁を有する。端部はナデにより丸く收める。頸部にはヘラ描沈綱が2条廻らされる。調整は口縁部が横ナデ。外面頸部から体部にかけてはナデ後横方向のハケ後横方向のヘラ磨き。内面は横方向のヘラ磨き。	口径 (27.0cm) 残高 9.7cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密
50-7	*	*	鉢	破片であるため口径は不明であるが、口径 40 cm前後の大型の鉢になる。体部から内洗して立ち上がり、口縁は強く外反させている。口縁端部にはヘラ割みが施される。体部上位には上下にヘラ描沈綱を2条ずつ廻らせてこれを施文帶を形成しており、内部に3本単位の沈綱を籠状に施している。外面ともナデ調整であるが、口縁外面は皮もしくは布で強く横ナデしている。	色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密
50-8	*	*	甕	やや器高の高い形の甕。頸部は周縁を斜め上方に拡張している。口縁端部はナデにより面を形成する。調整は内外面口縁付近は横ナデ。外面下半は縱方向のハケ、上半は横方向のヘラ磨き。内面下半は横方向のハケ、上半は横方向のヘラ磨き。	直径 23.3cm つまみ径 6.6cm 器高 11.5cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密

辨別番号	調査区	出土場所	器種	特徴	備考
50-9	9	SD-VI 中層	甕	「く」の字状に外反させる口縁を有し、端部にはヘラ刻みを施すが、残さずに空間を設ける部分がある。体部にはヘラ描沈線が2条廻らされる。調整は口縁部が横ナデ、体部外面は縱方向のハケ、内面はナデ調整。	口径(26.0cm) 残高 14.7cm 色調 灰黄色 焼成 良 密
50-10	*	*	*	「く」の字状に外反させる口縁を有し、端部中位から下端にかけてヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が4条廻らされる。口縁部は横ナデ、体部外面は縱方向のハケ。内面はナデ調整。	口径(23.0cm) 残高 13.3cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
50-11	*	*	*	短く強く外反させる口縁を有し、端部にはハケ原体による刻みが施される。体部にはヘラ描沈線が4条廻らされる。外面は縱方向のハケ、内面はナデ調整。	口径(26.0cm) 残高 12.5cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
50-12	*	*	*	やや大型の甕である。「く」の字状に外反させる口縁を有し、端部中位から下端にかけてヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が5条廻らされる。全面ナデによる調整が行われる。	口径(33.8cm) 残高 16.8cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
50-13	*	*	*	強く短く外反する口縁を有し、端部には横方向にヘラ描沈線を1条廻らせた後で軽いヘラ刻みを行っている。体部にはヘラ描沈線が7条廻らされる。全面ナデ調整。	口径(24.4cm) 残高 9.2cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
50-14	*	*	*	「く」の字状に外反する口縁を有し、体部には細かなヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が7条廻らされる。調整は口縁が横ナデ、体部外面は縱方向のハケ、体部内面は斜め方向のハケ。	口径(18.8cm) 残高 10.8cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
51-1	9	*	広口甕	やや上げ底状の底部であり、体部はあまり張らず立ち上がる。最大径は体部のやや上部にくる。明確な頸部から軽く外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより丸く収める。外面は横方向のヘラ磨き、内面は口縁部付近のみ横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。粘土板接合痕が明瞭に残る。	口径(13.1cm) 腹部径(16.1cm) 底部径 7.7cm 器高 14.7cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
51-2	*	*	*	厚手の平底から大きく膨らむ体部を有する。体部最大径はやや下位に位置する。ヘラ描沈線が4条廻らされる頸部から大きく外反して口縁を形成する。口径は体部最大径とは同じとなる。口縁端部はナデにより面を形成する。調整は外面部は横方向のヘラ磨き。内面は口縁部から頸部にかけては横方向のヘラ磨き。以下はナデ。	口径 14.5cm 腹部径 16.3cm 底部径 7.4cm 器高 20.7cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
51-3	*	*	*	算盤球形の体部に長い頸部を有する。体部上半と頸部に4条のヘラ描沈線が施されるが、最下段はヘラで削り取るため7条の突起に見える。頸部にはヘラ描沈線が7条廻らされる。頸部から大きく外反する口縁を有するが、口径は体部最大径とほぼ同一となる。端部はナデとヘラ磨きにより鏡く面を形成する。調整は外面部から体部上半は縦ハケ後横方向のヘラ磨き。他は横方向のヘラ磨き。内面は口縁部から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整を行うが、一部横方向のヘラ磨きが見られる。	口径(19.0cm) 腹部径(19.8cm) 残高 22.4cm 色調 黄褐色 焼成 脱土 良 密
51-4	*	*	*	球形の体部に明確な頸部を有する。体部上半と頸部に4条のヘラ描沈線で区画した施文帯にヘラで織糸状の刻みを施す。頸部から大きく外反して口縁を形成しており、口縁端部はヘラ磨きにより面が形成されている。口縁は紐孔が1孔穿たれている。調整は頸部外面が縦ハケ後横方向のヘラ磨き。残りは横方向のヘラ磨き。内面は口縁部から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。体部上半はナデ。以下は横方向のヘラ磨き。	口径(16.2cm) 腹部径(22.5cm) 残高 21.6cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
51-5	*	*	*	細い頸部から緩やかに大きく外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより丸く収める。頸部には断面三角形の貼り付け突帯を4条廻らせ、頂部にヘラ刻みを施す。外面調整は口縁は縦ハケ後横方向のヘラ磨き。体部はナデ調整であるが、部分的に横方向のヘラ磨きを行なう。内面は口縁端部付近は横方向のヘラ磨き。以下はナデ。	口径(18.4cm) 残高 11.3cm 色調 赤褐色 焼成 脱土 良 密

括弧番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
51-6	9	SD-VI 中層	無蓋壺	薄い平底の底部であり、体部の最大径はやや上半に位置する。口縁端部はナデにより面を形成している。口縁下には縫孔を1孔焼成前に穿っているが、焼成時に粘土がつまり貫通していない。外面調整は横方向のヘラ磨き。内面は体部上半は横方向のヘラ磨き、下半はナデ調整。	口径 (9.8cm) 底径 (15.8cm) 底厚 7.0cm 器高 13.15cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
51-7	タ	タ	タ	やや厚手の平底であり、卵形の体部を有する。口縁端部はナデにより面を形成している。口縁下、体部上半、体部下半にそれぞれ6条のヘラ捺述線を施されている。外面調整は横方向のヘラ磨きを密に施すが、底部付近に縫ハケが残る。内面はナデ後粗い横方向のヘラ磨き。	口径 9.8cm 底径 16.6cm 底厚 7.6cm 器高 17.3cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
51-8	タ	タ	鉢	平底の底部から直立気味に外に開く体部を有する。口縁端部はナデにより面を形成する。外面調整は口縁付近は横ナデ。体部は縫方向のハケ後横方向の粗いヘラ磨き。内面は横方向のヘラ磨き。	口径 (11.4cm) 底径 6.4cm 器高 13.45cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
51-9	タ	タ	タ	微弱な上げ底状の底部から直立気味に立ち上がり、やや内湾して口縁に至る。口縁端部はナデにより面を形成する。口縁下には縫状把手を貼り付けるが、対角位置が欠失しているために対応する把手の形状は不明である。外面調整は口縁付近は横方向のハケ。体部以下は縫方向のハケ。内面はナデ調整。	口径 (12.0cm) 底径 6.3cm 器高 13.4cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密
51-10	タ	タ	タ	平底の底部を有する。口縁は「く」の字状に外反させ、端部はナデにより面を形成している。外面調整は縫方向のハケを行った後、底部付近は横方向のヘラ磨き、体部はナデによりハケを消している。内面は口縁部を横方向のハケ、体部以下はナデ調整。	口径 (23.0cm) 底径 6.2cm 器高 14.9cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
51-11	タ	タ	タ	底部を欠失している。器高に対して口径の大きな鉢であり、口縁は軽く外反させる。口縁外面には指でつまみ曲げた痕跡が明瞭に残る。外面調整は外外面とも丁寧なナデ調整。	口径 (24.1cm) 底径 12.4cm 器高 14.9cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 極めて密
51-12	タ	タ	タ	大型の鉢。「く」の字状に口縁を屈曲させる。口縁端部はナデにより純く面を形成する。口縁下には現状で2個の縫状把手が貼り付けられているが、その間隔は狭い。体部外面は縫ハケ後横方向のヘラ磨きが行われているが、把手を含めた成形順序は、縫ハケ→把手の貼り付け→ヘラ磨きである。内面は口縁下を横方向にハケ、他は横方向のヘラ磨き。	口径 (38.6cm) 底径 10.3cm 器高 10.0cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
52-1	9	SD-VI 下層	壺	「く」の字状に強く屈曲させる口縁を有する。端部には大きめのヘラ刻みが施される。体部にはヘラ捺述線が2条施されている。調整は外外面ハケ後口縁を横ナデしている。内面はナデ調整。	口径 (32.4cm) 底径 12.3cm 器高 10.0cm 色調 黄褐色 焼成 良 胎土 密
52-2	タ	タ	タ	口縁を軽く外反させ、端部中央から下端に細かなヘラ刻みを施す。体部にはヘラ捺述線が5条施されている。外外面とも丁寧なナデ調整。	口径 (21.4cm) 底径 11.3cm 器高 9.0cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 極めて密
52-3	タ	タ	タ	大きく外反させる口縁を有し、端部には細かなヘラ刻みを施す。体部は無文。外外面ともナデ調整。	口径 (18.3cm) 底径 9.0cm 器高 8.0cm 色調 黄褐色 焼成 良 胎土 密
52-4	タ	タ	タ	高台状の上げ底の薄い底部を有する。底部中央には焼成後に穿孔が行われている。体部外表面は指によるナデ調整であるが、斜め方向にヘラナデも行われている。内面は丁寧なナデ調整。	底径 7.8cm 底厚 7.3cm 器高 9.0cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 胎土 密

採因番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
52-5	9	SD-VI 下層	広口壺	長く明瞭な頸部を有し、口縁は緩やかに外反して大きく聞く。口縁端部はナデにより面を形成する。頸部には低い削りだし空窓を2条形成し、上面に貝殻の腹部を押しつけることにより幾枚状の文様を施す。体部にもヘラ描沈線2条によって区画した施文帯に同様の施文を行う。外面調整は瓶方向のハケ後一部横方向のヘラ磨き。内面は口縁上位は横方向のヘラ磨き。頸部にかけてナデ。体部はナデ後横方向の粗いヘラ磨き。	口径 (21.6cm) 腹部径 (29.0cm) 残高 (24.8cm) 色調 灰黄色 焼成 良 胎土 密
52-6	タ	タ	タ	頸部から口縁部を欠失している。平底の底部から球形の体部を有するが、体部最大径はやや下方に位置する。頸部には現状で2条、体部上半には5条のヘラ描沈線が廻らされる。外面調整は頸部から体部上半にかけては縱方向のヘラ磨き、以下はナデ調整。内面は頸部が横方向のヘラ磨き、以下はナデ調整。	腹部径 (18.4cm) 底部径 (8.8cm) 色調 赤褐色 焼成 良 胎土 密
52-7	タ	タ	無頸壺	ミニチュアの無頸壺。平底の底部に算盤球形の体部を有する。口縁は丸く収める。外面調整は体部上半は横方向のヘラナデ気味の磨き。以下は指押さえ。内面はナデ調整。	口径 (4.4cm) 腹部径 7.6cm 底部径 4.8cm 器高 5.4cm 色調 暗灰色 焼成 良 胎土 密
52-8	タ	タ	広口壺	大型の広口壺。太い頸部から緩やかに外反する口縁を有する。端部はナデ及びヘラ磨きにより面を形成する。頸部にはヘラ描沈線を8条廻らせてある。外面調整は縱方向のハケであるが口縁は横ナデで消している。体部は一部横方向のヘラ磨きを行っている。内面は口縁から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。	口径 (42.8cm) 残高 22.4cm 色調 灰黄色 焼成 良 胎土 密
52-9	タ	タ	壺蓋	やや偏平な壺蓋。尖り気味の頂部であり、直線的に口縁に広がる。調整は外面は横方向のヘラ磨き。口縁端部ナデ。内面は口縁付近はナデ。頂部付近はナデ後粗いヘラ磨き。	直径 (14.8cm) 器高 2.9cm 色調 赤褐色 焼成 良 胎土 密
53-1	8	SD-V	壺	厚い器壁であり、口縁は「L」字状に屈曲させる無文の壺。調整は体部外面縦ハケ。内面は縱方向の板ナデ。	口径 (21.0cm) 残高 13.7cm 色調 灰褐色 焼成 良 胎土 密
53-2	タ	タ	タ	口縁を「く」の字状に屈曲させる無文の壺。調整は体部外面縦ハケ。内面は指ナデ。	口径 (20.2cm) 残高 8.4cm 色調 灰褐色 焼成 良 胎土 密
53-3	タ	タ	タ	口縁を「く」の字状に外反させ、端部にヘラ刻みを施すが、空間を空ける部分を設ける。体部にはヘラ描沈線が3条廻らされる。調整は体部外面縦ハケ。口縁内外面及び体部内面はナデ調整。	口径 (23.0cm) 残高 14.4cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 粗
53-4	タ	タ	タ	厚い器壁の小型品である。強く外反する口縁を有し、端部には細かいヘラ刻みが施される。体部にはヘラ描沈線が3条廻らされる。内外面ともナデ調整。	口径 (15.8cm) 残高 10.5cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
53-5	タ	タ	タ	「く」の字状に外反する口縁を有し、端部の中位から下半に細かいヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が6条廻らされる。調整は体部外面が縱方向のハケ。口縁内外面は横ナデ。体部内面はナデ調整。	口径 (24.2cm) 残高 11.8cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 やや粗
53-6	タ	タ	広口壺	細身の体部から直立する長い頸部を有し、口縁は短く外反する。口縁端部は丸く收める。頸部にはヘラ描沈線が2条廻らされる。外面調整は縦ハケ後部分的に横ナデ。内面は指及びヘラによるナデ。	口径 (16.0cm) 残高 18.6cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 やや粗
53-7	タ	タ	タ	薄い平底の底部に球形の体部を有する。口縁部は欠失。体部上半に断面三角形の貼り付け突部を1条廻らせ、頂部をハケ原体で割む。頸部との境界には現状で1条のヘラ描沈線が残る。体部外面は縦ハケ後ナデ。部分的に横方向のヘラ磨き。内面はナデ調整。	腹部径 (22.0cm) 底部径 7.2cm 残高 17.5cm 色調 白橙色 焼成 良 胎土 粗

括弧番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
53-8	8	SD-V	広口壺	薄い平底の底部に算盤球形の体部を有する。体部最大径は体部のやや下辺に位置する。明確な頸部から縁やかに大きく外反して口縁に至る。口縁端部は丸く收める。頸部には5条、体部上半には6条のヘラ彫沈縁が廻らされる。体部外縁は横方向のハケ後頸部には粗く、体部には常に横方向のヘラ磨きを行う。内面は口縁から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。ひずみの大きな部である。	口径 (22.2cm) 腹部径 (32.2cm) 底径 8.4cm 器高 34.8cm 色調 淡白橙色 焼成 良 胎土 やや粗
53-9	*	*	鉢	底部を一部欠失している。口縁を短く外反させ、端部はナデにより丸く收める。体部にはヘラ彫沈縁が2条廻らされる。体部外縁はナデ後粗い横方向のヘラ磨き。内面はナデ後横方向のヘラ磨き。口縁は横ナデ。	口径 (23.0cm) 腹部径 (6.6cm) 底径 13.5cm 器高 13.5cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
53-10	*	*	壺蓋	頂部に双頭のつまみ有する壺蓋。つまみ間に縦孔を1孔穿つ。口縁は偏平に伸びる。全面ナデによる調整が行われる。	直径 (12.2cm) 器高 3.2cm 色調 灰白色 焼成 やや粗 胎土 やや粗
53-11	*	*	壺蓋	笠形の壺蓋。頂部は端部を斜め上方に拡張させることでつまみとしている。直線的に外方に伸びて口縁に至るが、口縁は強く外反させている。外周調整は板ナデ。内面は口縁付近はナデ。上部は横方向・縱方向のヘラ磨き。	口径 19.6cm つまみ径 7.1cm 器高 11.0cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
54-1	5	SD-5	壺	口縁下にヘラ削りにより段を形成する壺。薄い器壁の個体である。口縁端部にはヘラ刻みを施す。内外面ナデ調整。	口径 (21.2cm) 残高 11.4cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密
54-2	*	*	*	あまり張らない体部の壺であり、口縁はやや大きく外反させる。口縁端部にはヘラ刻みが確に施されている。内外面共にナデ調整。	口径 20.4cm 残高 16.8cm 色調 灰橙色 焼成 良 胎土 密
54-3	*	*	*	薄い平底から肩が張らずに立ち上がる体部を有する。口縁は軽く短く外反させ、端部にヘラ刻みを施す。施文方向は反時計回りである。内外面ともナデ調整。	口径 16.6cm 底径 6.6cm 器高 16.6cm 色調 暗橙褐色 焼成 良 胎土 密
54-4	*	*	*	軽く外反させた口縁直下に貼り付け突帯を1条廻らす。突帯と口縁端部に同時にヘラ刻みを施すが、1.0前後の単位で間隔を空けて施している。外面は縱方向の丁寧な指ナデ、内面は横方向のナデ調整。	口径 (24.6cm) 残高 18.1cm 色調 淡橙褐色 焼成 良 胎土 密
54-5	*	*	鉢	厚手の平底から直線的に外傾する体部を有する。口縁は粗雑に短く外反させる。器形のひずみが大きい。全面丁寧なナデ調整。	口径 (16.0cm) 底径 5.8cm 器高 13.5cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 極めて密
54-6	*	*	*	器壁の厚い小壺の鉢。短く外反させる口縁を有する。端部には直径約2.5mmの竹管で刺突を施しているが、粗雑な刺突のため大半は逆「C」字状の痕跡となっている。内外面共にナデ調整。口縁下部を強く横ナデ。	口径 (12.6cm) 底径 7.7cm 器高 9.7cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密
54-7	*	*	広口壺	短く外反する口縁を有し、端部はナデにより面を形成している。壺部には断面三角形の削り出した突帯が1条廻る。外周調整は口縁から頸部が横ナデ、体部は横方向のヘラ磨き。内面は口縁が横方向のヘラ磨き。頸部には横方向のハケが残る。体部はナデ。	口径 (14.8cm) 底径 5.7cm 器高 9.7cm 色調 暗橙色 焼成 良 胎土 密
54-8	*	*	*	やや小型の広口壺。通部から短く外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより面を形成する。頭部にはヘラ彫沈縁が1条廻らされており、沈縁の下端をヘラにより刻み状に刺突している。外側はナデ調整。内面は口縁が横ナデ。頭部は横方向に粗く磨く。	口径 (13.6cm) 底径 5.3cm 器高 5.3cm 色調 淡橙色 焼成 良 胎土 密

検査番号	検査区	出土遺物	器種	特 微	備 考
54-9	5	SD-V	広口壺	平底から算盤球形に大きく膨らむ体部を有し、短い口縁から軽く外反して口縁に至る。口縁端部は丸く取れる。頭部には断面台形の細い削り出しの突帯が2条燃らされ、頭部にヘラ刻みを施す。体部上半にはヘラ描沈線による斜格子文が施される。その下位にはヘラ描沈線を3条廻らせるが、最上部をヘラで段状に削り出すために2条の突起が廻るように見える。沈線部には注口の孔が穿たれている。さらに下に2条の斜いヘラ描沈線を廻らせることで文様帶を形成し、内部にヘラ描による4本単位の縦方向の平行線文を施す。調整は内外面共に丁寧なナデ調整。ひずみの大きい體体である。	口径 (13.4cm) 腹部径 23.9cm 底部径 6.5cm 器高 23.8cm 色調 明緑色 焼成 良 胎土 密
54-10	タ	タ	*	大きく膨らむ体部の壺であり、頭部から緩やかに外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより鋭い面を形成する。頭部に2条、体部上半に3条のヘラ描沈線を廻らせており、沈線間に約1cm間隔で細い棒による刺突を施している。体部上半の沈線の最上部はヘラで段状削り取られている。外面調整は横方向のヘラ磨きを基本とするが、頭部上半には縦方向のハケが残る。内面は口縁部のみ横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。	口径 (15.2cm) 腹部径 (32.0cm) 残高 18.5cm 色調 黄灰色 焼成 良 胎土 密
54-11	タ	タ	*	頭部から軽く外反する口縁を有する。端部にはナデ及びヘラ磨きにより面を形成する。頭部にはヘラ描沈線を2条廻らせ、間に約1cmの間隔で棒による刺突を施している。体部にも現状で1条のヘラ描沈線が残る。外面調整は口縁が横ナデ、頭部から体部が丁寧なナデ後細かな横方向のヘラ磨き。内面はナデ後横方向のヘラ磨き。頭部が横方向のヘラ磨き。体部はナデ。	口径 (14.4cm) 残高 10.4cm 色調 淡褐色 焼成 良 胎土 密
54-12	タ	タ	*	頭部より上を欠失している。厚手の平底、球形の体部を有する。体部上半にヘラ描沈線を2条廻らせ、その上位には4本1単位の縦方向の弧線文を、下位には4本2単位の縦方向の弧線文を施している。調整は体部外側が横方向のヘラ磨き。内面はナデ調整。	腹部径 (25.0cm) 底部径 7.8cm 残高 18.6cm 色調 黄白色 焼成 良 胎土 密
54-13	タ	タ	*	ミニチュアの広口壺。口縁部を欠失している。平底に算盤球形の体部を有し、体部上半には貼り付け突帯を1条廻らせる。頭部内面を断面台形状に肥厚させている。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。全面ナデ調整。	腹部径 7.4cm 底部径 4.1cm 残高 6.9cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
54-14	タ	タ	鉢	大型の鉢。平底の底部から大きく開く体部を有する。口縁は「く」の字状に外反する。口縁端部はナデにより面を形成している。口縁下にはヘラ描沈線が1条燃らされる。調整は口縁部が横ナデ。体部外側は上半が横方向のヘラ磨き。下半は斜め方向のヘラ磨き。内面は基本的にナデ調整が行われるが、部分的にヘラ磨きが見られる。	口径 (45.6cm) 底部径 11.6cm 器高 (31.0cm) 色調 底灰褐色 焼成 やや不良 胎土 密
55-1	5	SD-8	壺	ほぼ直立する体部に「く」の字状に短く屈曲する口縁を有する。口縁端部下端にヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が2条廻らされる。調整は口縁が横ナデ。体部外側は縦方向のハケ。内面はナデ調整。	口径 (23.0cm) 残高 13.5cm 色調 灰白色 焼成 良 胎土 密
55-2	タ	タ	*	「く」の字状に外反する口縁を有する。口縁端部中位から下端にかけてヘラ刻みを施す。体部にはヘラ描沈線が3条廻らされる。内外面ともナデ調整。	口径 (21.4cm) 残高 13.8cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密
55-3	タ	タ	*	底部片。底部のほぼ中央に焼成後に孔を穿っている。調整は外面が縦方向のハケ。内面はナデ調整。	底部径 7.9cm 残高 9.1cm 色調 灰黄色 焼成 良 胎土 密
55-4	タ	タ	*	軽く外反させる口縁の端部にヘラ刻みを施す。体部には4条のヘラ描沈線が廻らされるが、上から2条目上方に僅斜しすぎたために引き直されている。その沈線を1条目が切っているため、施文の順序は下→上であることが分かる。調整は体部外側は縦方向のハケ。口縁部は横ナデにより外面のハケを消している。内面はナデ調整。	口径 (25.2cm) 残高 16.2cm 色調 底灰褐色 焼成 良 胎土 密

探査番号	調査区	出土遺構	器種	特徴				備考
				口径	腹部径	底部径	高さ	
55-5	5	SD-8	広口壺	器形に対して幅広で微弱な上げ底状の薄い底部を有する。球形の体部であり、直立する頸部から短く外反して口縁に至る。口縁端部は丸く收められる。頸部には3条のヘラ描沈線が施されるが、最上部をヘラで削ることにより2条の突帯が残るよう見える。体部上半には3条のヘラ描沈線が廻らされる。調整は外面口縁部から頸部にかけてナデ、一部横方向のヘラ磨き。体部は横方向のヘラ磨き。内面は口縁から頸部にかけて横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。	（8.4cm）	16.7cm	7.6cm	19.6cm 灰黄色 焼成 良 胎土 密
55-6	タ	タ	タ	大きく膨らむ体部の壺であり、兼やかに外反する口縁を有する。口縁端部は丸く收める。粗孔が2孔存在する。頸部には断面台形の削り出し突帯が1条廻らされ、頂部にはヘラ描沈線が1条廻らされる。外面はナデ調整。内面は口縁端部下はナデ調整。以下は横方向のヘラ磨きを行なうが、頸部粘土板接合部分はナデ調整。	（15.6cm）	9.5cm	8.5cm	15.6cm 灰橙色 焼成 良 胎土 密
55-7	タ	タ	タ	大きく膨らむ体部の壺であり、口縁は短く外反する。口縁端部は丸く收める。頸部にはヘラ描沈線が2条施される。体部上半には微弱な筋が形成されており、その下にヘラ描沈線を2条廻らせている。体部外面は縱方向のハケを行なうが、口縁部は横ナデにより、体部は横方向のヘラ磨きにより消されている。内面は頸部に横方向の粗いヘラ磨きが行われるが、他はナデ調整。	（15.4cm）	15.2cm	12.5cm	15.4cm 赤褐色 焼成 良 胎土 密
55-8	タ	タ	タ	ミニチュアの広口壺。口縁端部を欠失している。微弱な上げ底状の底部であり、算盤球形の体部を有する。口縁は短く外反させる形態である。全面ナデ調整。	（8.7cm）	4.8cm	4.8cm	8.7cm 灰黄色 焼成 良 胎土 密
55-9	タ	タ	タ	底部と口縁部を欠失している。頸部と体部の境界に1条、体部上半に2条の低い削り出し突帯を廻らせる。また体部最大径の部分にはヘラ描沈線が3条廻らされる。突帯上、また比線間に赤色顔料を塗布している。体部外面は横方向のヘラ磨き。内面は頸部が横方向の細かなヘラ磨き。以下は指もしくは丸石、ヘラによる丁寧なナデにより滑らかに仕上げられている。生刷西麓産の胎土である。	（25.6cm）	25.6cm	25.6cm	25.6cm 暗褐色 焼成 良 極めて 密
55-10	タ	タ	タ	器壁の薄い個体である。大きく肩の張る体部のもので、明確な頸部から口縁は兼やかに外反する。口縁端部は細かなヘラ磨きにより面を形成している。口縁内面には上下2列に棒による刺突が行われるが、その内1つは貫通しており粗孔となっている。頸部、体部上半にそれぞれ3条、5条のヘラ描沈線を廻らす。調整は外面が横方向の微密な横方向のヘラ磨き。内面は口縁から頸部にかけて緻密な横方向のヘラ磨き。以下はナデ調整。	（17.6cm）	12.3cm	12.3cm	17.6cm 暗褐色 焼成 良 胎土 密
55-11	タ	タ	壺蓋	やや偏平な笠形の壺蓋。口縁部は欠失している。つまみ部周縁をやや外方に拉張させており、頂部は僅かに凹む。外面は縱方向のハケをヘラまたは指でナデ消す。内面はナデ調整。	つまみ径 7.5cm 残高 8.8cm 色調 赤褐色 焼成 良 胎土 密	7.5cm	8.8cm	7.5cm 赤褐色 良 胎土 密
55-12	タ	タ	タ	笠形の壺蓋。口縁部を欠失している。つまみ部周縁を斜め上方に拡張させている。調整は外面部とも横方向のヘラ磨き。	つまみ径 6.8cm 残高 10.1cm 色調 暗褐色 焼成 良 胎土 密	6.8cm	10.1cm	6.8cm 暗褐色 良 胎土 密
56-1	5	SD-1	壺	大型の壺。更く外反する口縁の端部に大きなヘラ削みを施す。体部にはヘラ描沈線が2条廻らされる。外面に煤が付着している。	（30.8cm）	14.9cm	14.9cm	30.8cm 灰白色 焼成 良 胎土 密
56-2	タ	タ	タ	大型の壺。「く」の字状に大きく外反させる口縁を有し、端部にはヘラ削みを施す。体部には半截竹管による沈線が3条廻らされる。体部外面は縱方向のハケで調整。内面は斜め方向のハケが行われる。	（29.0cm）	14.7cm	14.7cm	29.0cm 灰褐色 焼成 良 胎土 密
56-3	タ	タ	タ	「L」字状に短く屈曲させる口縁を有し、端部には細かなヘラ削みを施すが、空隙を設ける部分がある。体部にはヘラ描沈線が6条廻らされる。口縁は横ナデ、体部外面は斜め方向のハケ、内面はナデ調整。	（18.4cm）	13.3cm	13.3cm	18.4cm 灰褐色 焼成 良 胎土 密

拂灰番号	調査区	出土遺構	器種	特徴	備考
56-4	5	SD-1	壺	屈曲気味に外反させる口縁を有し、壺部にヘラ抜沈線を1条廻らせた後、ヘラ状工具で削みを施す。口縁下にヘラ抜き沈線を4条廻らす。外面ハケ、内面は口縁部のみハケ、以下ナデ調整。	口径(23.8cm) 残高11.4cm 色調淡黄白色 焼成良 資土密
56-5	タ	タ	タ	うすい平底を有する。底部からあまり屈曲を持たず以て外に開き、体部に至る。外面は縱方向のハケ。内面は煤が付着しているが、おそらくナデ調整。	残高7.3cm 底径8.6cm 色調淡明褐色 焼成良 資土密
56-6	タ	タ	広口壺	外側にあまり拡張しない外反する口縁を有する。壺部に2本のヘラによる削り出し突帯をもち、間に2条沈線を廻らす。肩部にもヘラによる削り出し状突帯を設け、間にヘラ抜き沈線を4条廻らせる。調整は外面ヨコ方向のヘラ磨き、内面は口縁部がヨコ方向のヘラ磨き、頸部ナデ、体部はヘラで磨き状にナデ。	口径(17.0cm) 残高18.4cm 最大径(27.0cm) 色調淡橙灰褐色 焼成良 資土密
56-7	タ	タ	タ	広口壺。頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。頸部から漸斗状に大きく開く口縁に至る。口縁端部はナデで面をとつておらず、やや下垂させている。内面にも蓋受け用の断面三角形の突帯が貼り付けられている。上面は丁寧にナデるが下面の貼り付けは甘い。内面突帯下方約1cmの位置に蓋用の孔が2孔平行して空たれれている。(焼成前穿孔) 調整は外面とも口縁、突帯周縁以外はヘラ磨きが施されているが、内面の磨きは細かく、粗い。	口径(24.4cm) 残高11.3cm 色調淡褐色 焼成良 資土密
56-8	タ	タ	タ	広口壺。頸部に削り出しによる突帯を2条廻らせる。突帯ははっきりと浮き出る肉厚な作り。頸部から緩やかに外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより面を作り出す。また、蓋用の孔が口縁下1.5cmほどの位置に1孔空たれています。外面は頸部がタテ・ヨコ方向の磨きであるが、微密とは言い難い。わずかに残る体部はヨコ方向の磨き。	口径17.0cm 残高8.5cm 色調淡白褐色 焼成良 資土密
56-9	タ	タ	タ	広口壺。やや胴の張る体部からナラ削形状に頸部に移行。やや纏顯で、ヘラによる削り出し突帯を2条廻らせる。肩部にはヘラ抜き沈線が4条廻らされているが最上段は段状に削り取られている。外側は頸部が縱方向のヘラ磨き、肩部、体部下半がヨコ方向のヘラ磨き、体部中位は指ナデ、もしくは板状工具によるハケ状のナデ。	口径23.8cm 最大径(29.0cm) 色調淡暗灰褐色 焼成良 資土密
56-10	タ	タ	タ	やや上げ底状の底部。外側はやや右下がり縱方向のヘラ磨き。内面はヨコ方向のヘラ磨き。	口径6.5cm 底径(9.4cm) 色調淡暗灰褐色 焼成良 資土密
56-11	タ	タ	タ	小型の壺。胴の張る算盤球形。肩部にヘラ抜き沈線気味に削り出した突帯を1条廻らせる。底部形態は欠損部が大きいため不明。調整は外側がヨコ方向の丁寧なヘラ磨き、内面ナデ調整。	口径10.7cm 最大径(13.8cm) 底径(6.1cm) 色調淡褐色 焼成良 資土密
56-12	タ	タ	鉢	外反する口縁を有す。口縁端部はナデるが、面を作るまでは至らず、やや丸みをおびる。外側はヨコ方向のヘラ磨き、内面はナデ、下半はハケをそのまま残す。	口径(22.4cm) 残高10.2cm 色調淡橙褐色 焼成良 資土密
56-13	タ	タ	タ	屈曲気味に長めに外反する口縁を有する。口縁端部はナデにより、面をもち、下端にヘラ状工具により削み目を入れる。口縁部下にはヘラ抜き沈線を3条廻らし、沈線間に幅3mm程の竹管文を充填する。内外面ともナデ調整。	口径23.6cm 残高4.5cm 色調淡褐色 焼成良 資土密
56-14	タ	タ	甕	上部水平なつまみ部を有する笠形。つまみ上面は板をあてて水平に整えている。つまみ部周縁は押しつまみ、ナデ、ヘラ状工具によるナデで成形。	つまみ径8.0cm 残高6.6cm 色調淡灰白色 焼成良 資土密
56-15	タ	タ	タ	つまみ部を有する笠形の甕。つまみ端部を外側にやや拡張させ、上部はやくぼむ。内外面ともヘラ磨きでつまみ部、口縁部はナデ調整。	口径(23.4cm) 容積8.3cm つまみ径(6.8cm) 色調淡赤褐色 焼成良 資土密

辨認番号	調査区	出土遺構	辨認番号	特 徴	備 考
57-1	5	SD-4	甕	体部から縦やかに内溝して口縁を覗く外反させる。口縁端部中位から下端部にヘラ状工具により刻みを施す。口縁直下にはヘラ書き沈線を4条廻らす。外面にはタテ方向のハケ後ナデ、内面は体部中位はハケ状のイタナデ。	口径 (29.0cm) 残高 18.5cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
57-2	*	*	*	やや強く外反する口縁を有し、口縁端部中位から下端にかけてヘラによる刻みを施す。体部にはヘラ書き沈線を4条廻らせる。調整は外面ナデ、内面は消溝が著しいがナデが残る。	口径 (12.8cm) 残高 9.0cm 色調 淡橙色 焼成 良 脱土 密
57-3	*	*	*	口縁をナデで折り返し、口縁端部にヘラ状工具により刻みを施す。口縁直下にはヘラ書き沈線を5条廻らすが、最下段は削り出し状に段を成して体部に移行する。外面は沈線以下をタテ方向のハケ、内面もハケがみられる。	口径 (19.0cm) 残高 9.2cm 色調 淡暗褐色 焼成 良 脱土 密
57-4	*	*	広口甕	球形の体部から頸部がほぼ直立して立ち上がり、強く外反する口縁を有す。口縁端部はヘラナデにより面を持つ。頸部、体部にそれぞれ3条、2条のヘラ書き沈線を廻らせるが、間隔等が整で、全周はするものの一部では先端が整合していない。底部は厚手の平底。体部のひずみがやや大きい。	口径 20.4cm 腹部径 13.8cm 底径 7.2cm 器高 20.4cm 色調 淡灰黄色 焼成 良 脱土 密
57-5	*	*	*	頸部に削り出し突帯を4条廻らせる。明確に頸部を持つ。口縁端部にはヘラ書き沈線が2条廻らせる。(1本は深く、1本は浅い) 外面はヨコ方向のヘラ磨き。内面は口縁部はナデ、頸部上半はヨコ方向のヘラ磨き、以下はナデ。	口径 (20.3cm) 残高 8.7cm 色調 淡暗褐色 焼成 良 脱土 密
57-6	*	*	*	頸部に削り出し突帯を2条廻らせる。突帯は低い。口縁端部はナデにより面をもつ。器壁は厚め。外面は口縁端部はナデ、突帯以下はランダム方向からのヘラ磨き。内面は上部突帯に対応する位置以上は右上がりのヘラ磨き、以下はナデ。	口径 (17.5cm) 残高 11.3cm 色調 淡橙色 焼成 良 脱土 密
57-7	*	*	*	広口甕の体部。頸部以上は欠欠。肩部にヘラ書き沈線が4条廻らせる。底部はうすくやや上げ底。全体的にひびんでいる。調整は外面ヨコ方向のヘラ磨き、内面は粗いヨコ方向のヘラ磨きで、一部ナデ。	残高 15.7cm 腹部径 21.1cm 底径 7.2cm 色調 淡褐色 焼成 良 脱土 密
57-8	*	*	*	壺あるいは鉢の底部で、周縁にヘラ書き沈線が3条廻らせる。調整は、外面ヘラ状工具によるナデ、細かい磨き。内面は上部にナデがみられるが以下はナデ。	残高 4.3cm (11.0cm) 底径 淡暗褐色 色調 焼成 良 脱土 密
57-9	*	*	無頸壺	把手付の無頸壺。厚手の器壁で口縁を内溝させて収める。平底。1箇所は欠損するが対称する2箇所に口縁下に瘤状把手を貼り付ける。把手の左右2箇所に焼成後に穿孔を試みているが2孔とも貫通していない。	口径 (10.3cm) 腹部径 (11.9cm) 底径 6.1cm 器高 9.7cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
57-10	*	*	鉢	体部からやや内傾気味に立ち上がり口縁は短く外反する。口縁端部は面をもつ。調整は外面はハケ後ナデ、内面はナデ。	口径 (32.0cm) 残高 12.5cm 色調 淡明橙色 焼成 良 脱土 密
57-11	*	*	甕壺	笠形の甕と思われるが体部にかけてやや内湾気味であるため丈高つまみのものとなる。つまみ部は指おさえにより形成されている。調整は笠部の外側はタテ方向のハケ、内面はナデ。	つまみ径 5.9cm 残高 5.3cm 色調 淡橙色 焼成 良 脱土 密
57-12	*	*	*	笠形。つまみ部の対角線上に対応する2孔を焼成前、ナデ調整の後穿つ。笠部は偏平に大きく開いており、壺用であることは間違いないと思われるが、つまみ部に孔を穿つ例は稀である。外面はタテ方向のハケ。内面はヨコ方向のヘラ状工具による細かい磨き。	つまみ径 6.2cm 残高 7.5cm 色調 淡灰褐色 焼成 良 脱土 密
57-13	*	*	パレット 形土器	木の葉形の平面形。片側は破損のため不明であるが片側に注ぎ口が作られている。内外面とも丁寧なヘラ磨き。	全長 (21.6cm) 器高 4.8cm 色調 淡赤橙色 焼成 良 脱土 密

## 第V章　まとめ

今回の調査は、約7,000m<sup>2</sup>と広く、また出土遺物もコンテナバットに約2,500箱も出土していることから、全体の遺物整理にはなお時間を要するものである。

本書は概要報告として、集落の形成及びそのはじまりに重要な弥生時代前期の環濠にかかる溝を中心にまとめたものである。

東奈良遺跡は、昭和46年の第1発見以来、平成14年にいたる今日まで、公共事業や民間開発に伴う発掘調査が数多く行われてきた。

その結果、これまでに集落は北西から伸びた標高約6～7m前後の微高地の先端に位置し、昭和52年の発掘調査から、すでに環濠を持ったこの地域における拠点集落であること。また出土した遺物から、集落の始まりは弥生時代前期の早い段階から形成されていたこと。その当時の基本的な墓制である弥生時代前期の方形周溝墓が、集落の外側に存在すること。弥生時代中期中半から後半にかけて、生活の場は位置的に前期とあまり変わらないが、集落の拡大化がみられること。昭和48年から翌年にかけて出土した銅鐸、銅戈、勾玉の鋳型や轆の羽口などから、金属製品などを鋳造する工人集団がいたこと。さらに集落は、自然的条件などから盛衰を繰り返しながらも古墳時代前期へと続き、その中心は、谷を隔てた西側に移るも集落の広がりはさらに大きくなっていくこと。この頃の遺構としては、幅約10m、深さ約3mで二段掘りされた人工の大溝が造られており、規模の大きさからみて十分に舟を浮かび得るものであり、実際にクスノキを削り抜いた丸木舟がこの大溝に続く溝から発見されている。

こうした過去の調査から、東奈良遺跡の全体像はある程度推察されるが、完全なものではない。今回の調査で発見された小銅鐸などは、これまで東奈良遺跡では銅鐸を造ってはいたが、銅鐸は発見されないと考えられていた。しかし形態は異なるが、溝の底から舌を伴った小銅鐸が発見されたことは驚きであった。

今回の調査区域は、これまでの調査結果から集落の中心部と考えられる区域である。そのうち集落を廻る環濠の広がりがわかりやすい第8調査区と第9調査区の溝についてみてみる。これまでのところ出土遺物からみると、第5調査区から第9調査区に伸びるSD-01が最も古い溝と考えられるが、この溝は集落を廻るものかどうかは現時点では不明である。次に第9調査区のSD-III・IV・Vの3条の溝であるが、それぞれの下層出土土器からみるとIV→V→IIIの順序で築かれているようである。尚SD-IIIは、森田編年によると、摂津I-2・3様式に収まるようである。このSD-III・IVの2条の溝は、昭和52年に調査された国鉄貨物引き込み線の時の調査で確認されたSD-25・27とつながるものであることから、ほぼ同時期に常に並行して集落を廻る溝と考えられる。

この2条の溝の外側に、SD-VI（第8調査区のSD-VIと同溝）が半円形で検出されているが、出土遺物からみると、弥生時代前期末頃（摂津I-4）のものである。さらに

第8調査区には、SD-V・IVの2条の前期溝が検出されている。SD-Vは、比較的小規模な溝であるが、浜津I-3を主体にした遺物が出土している。SD-IVについては、中期の段階で掘り返された状態が伺えるが、前期後半の遺物が出土しており、前期溝としては、最も外側を廻る環濠である。

上記のように今回の調査では、それぞれの時期差を考えると同一時期に築かれたものとは考えられないが、弥生時代前期の環濠としては7条の溝が廻るものであることが判明した。

別に、第1調査区のSD-5（弥生時代中期中葉から後半）の溝の最底部から鐸身を上にして舌を内部に伴った状態で検出した小銅鐸が1口出土している。その大きさは、最大長14.4cm、幅9.5cmの小さなものである。

鐸身の両面ともに文様が施されており、A面には綾杉文や锯歯文、下部には上下に三角文を施し波状文をしている。B面には円形文や三角文、綾杉文、下部にA面と同仕様の波状文が施されている。

また内面下部には突帯が廻っており、「舌と触れあったと考えられる使用痕がみられる」とは、この小銅鐸は、実際に鳴らして使っていた実用的なものであったことを伺わせるものである。

小銅鐸の分布する地域は、朝鮮半島や北部九州、関東地方に多いが、鐸身に文様があるものは少なく、また舌を伴っているということは非常に珍しいものである。この東奈良出土の小銅鐸と似通ったものに、大分県宇佐市の別府遺跡から出土したものがある。

この小銅鐸の造られた時期については様々な意見があるが、高槻市教育委員会の森田克行氏は、鐸身の最下部に施された波状文が、上下から三角文が彫られた結果、必然的に波状文になったととらえ、高槻市の安満遺跡から出土した弥生時代前期の壺に同様の技法での文様があることから、銅鐸の発祥の地が北摂であると論じられたが、今少し整理したいと考えている。

ここで小銅鐸について、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室の肥塚隆保氏に分析していただいた結果を掲載する。

#### 参考文献

- 森田克行（1990）「3各地域の様式編年7浜津地域」、寺沢薰・森岡秀人（編）『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』所収、東京

## 茨木市小型鋼鐸の成分分析

### 1. 調査内容

#### 1) 化学成分分析

- ① ICP (誘導結合プラズマ) 発光分光分析法による半定量分析
- ② ICP (誘導結合プラズマ) 発光分光分析法による定量分析
- ③ ICP (誘導結合プラズマ) 質量分析法による定量分析

試料に硝酸 (1+1) 20mL加え分解した後、塩酸30mL加え分解。未分解残さのある試料はNo.5Bをろ過し、ホウ酸ナトリウムと炭酸ナトリウムの混合融剤で融解したあと塩酸溶液に溶解し、それを純水で100mLに希釈定容して定量分析用溶液とした。

ICP発光分光分析装置(日本ジャーレアッシュ社製:IRIS Advantage R P H R)を用いて、主な元素について定量分析した後、微量元素をICP質量分析装置(VG社製 PLASMA QUAD PL)定量した。検量線溶液は半定量分析結果より各々の元素濃度範囲を求め、SPEX標準溶液の合成により作成した。

### 2. 定量分析結果

定量分析結果を次頁以降の表1に報告する。

表1. 茨木市小型鋼鐸の成分分析結果

マ ー ク	Cu	Sn	Pb	As	Bi	Ni	Zn	Fe	Mn	Ag	Sb	Co	Au	TOTAL	試料枚数	不溶解残さ有り
液銀色部分	68.21	2.68	0.44	0.072	<0.001	<0.001	0.002	0.36	0.023	0.026	0.094	0.001	0.001	71.91	0.0151	○
メタル部 分	91.02	7.27	0.84	0.16	0.002	<0.001	0.002	0.021	<0.001	0.066	0.34	0.001	<0.001	99.72	0.0302	

#### [分析方法]

\* Cu, Sn, Pb, As, Fe

\* Bi, Ni, Zn, Mn, Ag, Sb, Co, Au : ICP発光分光分析法

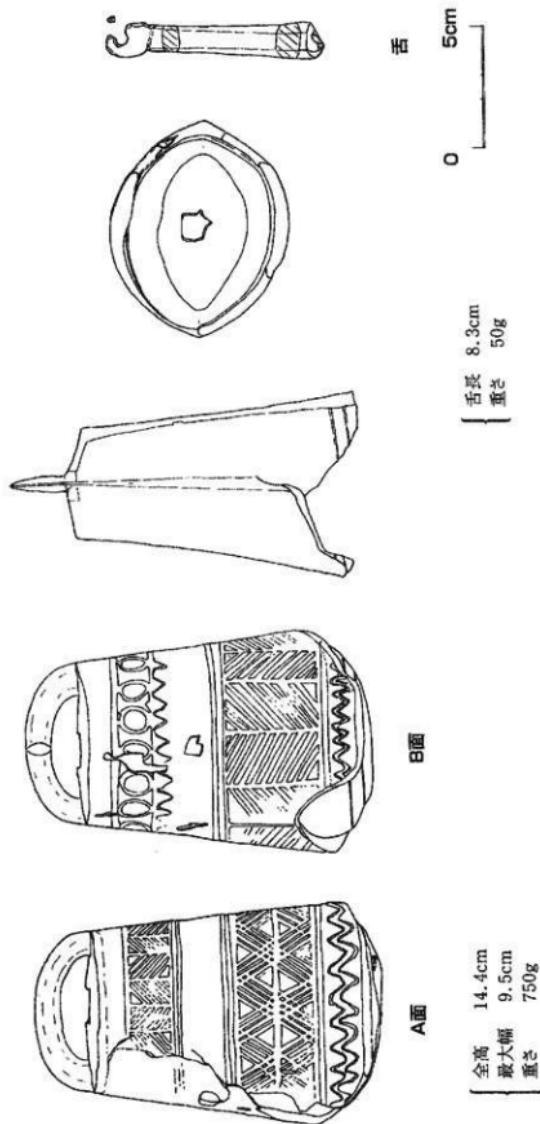
\* Bi, Ni, Zn, Mn, Ag, Sb, Co, Au : ICP質量分析法

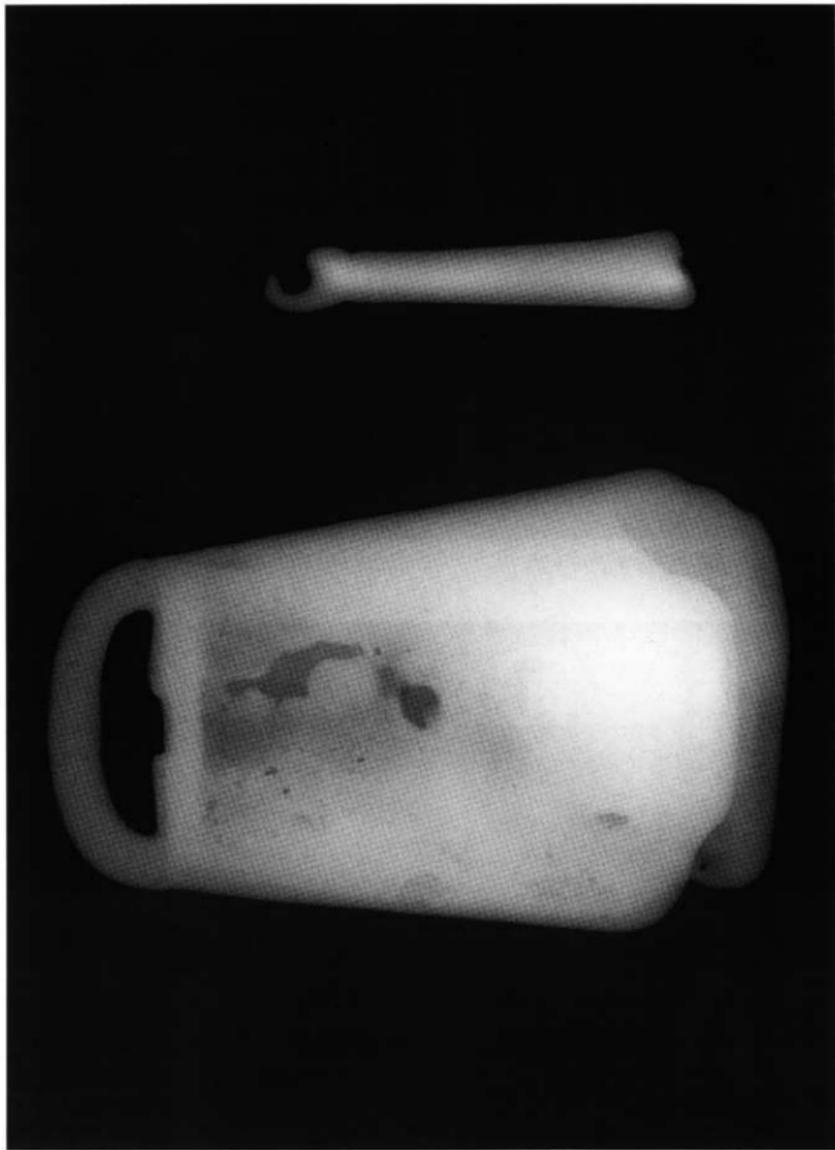
	銅(積分強度)	錫(積分強度)	積分強度比 (Sn/Cu)
舌 1	2493.98	40.65	0.0163
舌 2	2342.08	38.51	0.0164
舌 3	2753.2	47.07	0.0171
舌 4	2435.66	41.9	0.0172
本体表面 1	1735.88	78.47	0.0452
本体表面 2	1928.27	78.22	0.0406
本体表面 3	1894.17	92.84	0.0490

表1の小型銅鐸の成分分析結果では、鉛の含有量が少ないようである。

また非破壊分析では、舌と本体は基本的に同じ材質である。

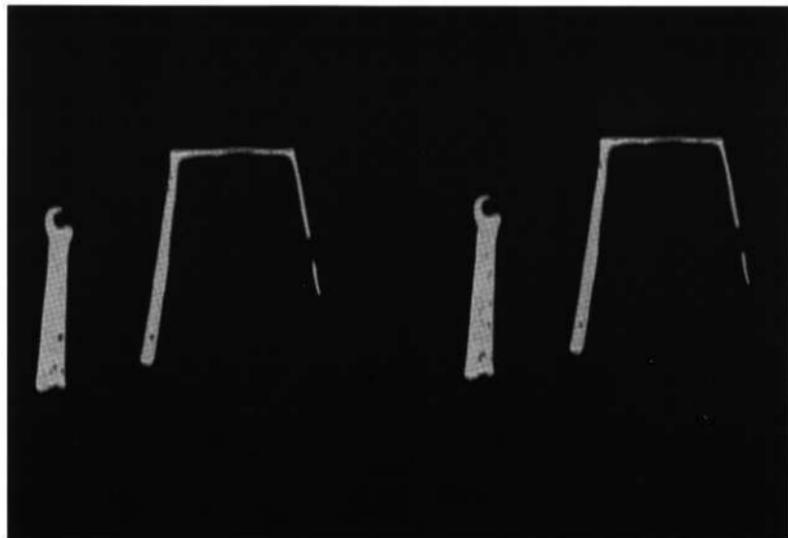
表面のサビの次第によって、若干スズ (Sn) が多い少ないがある。



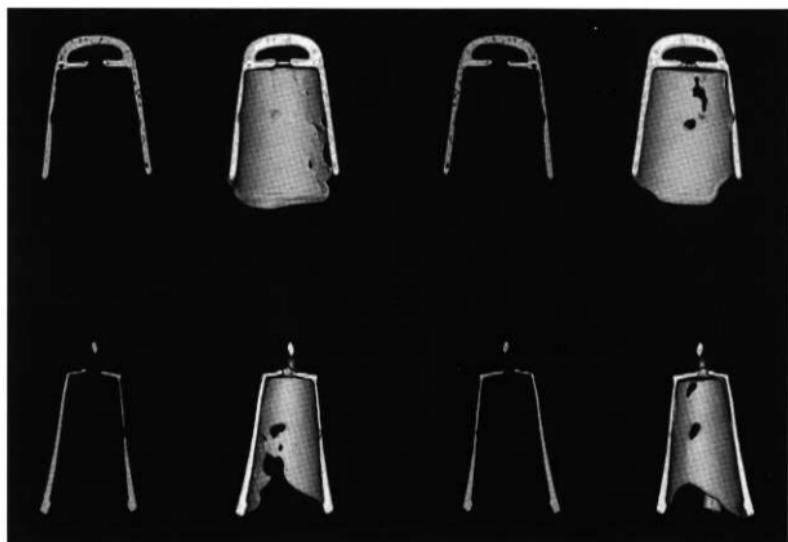


小型銅鐘レントゲン画像

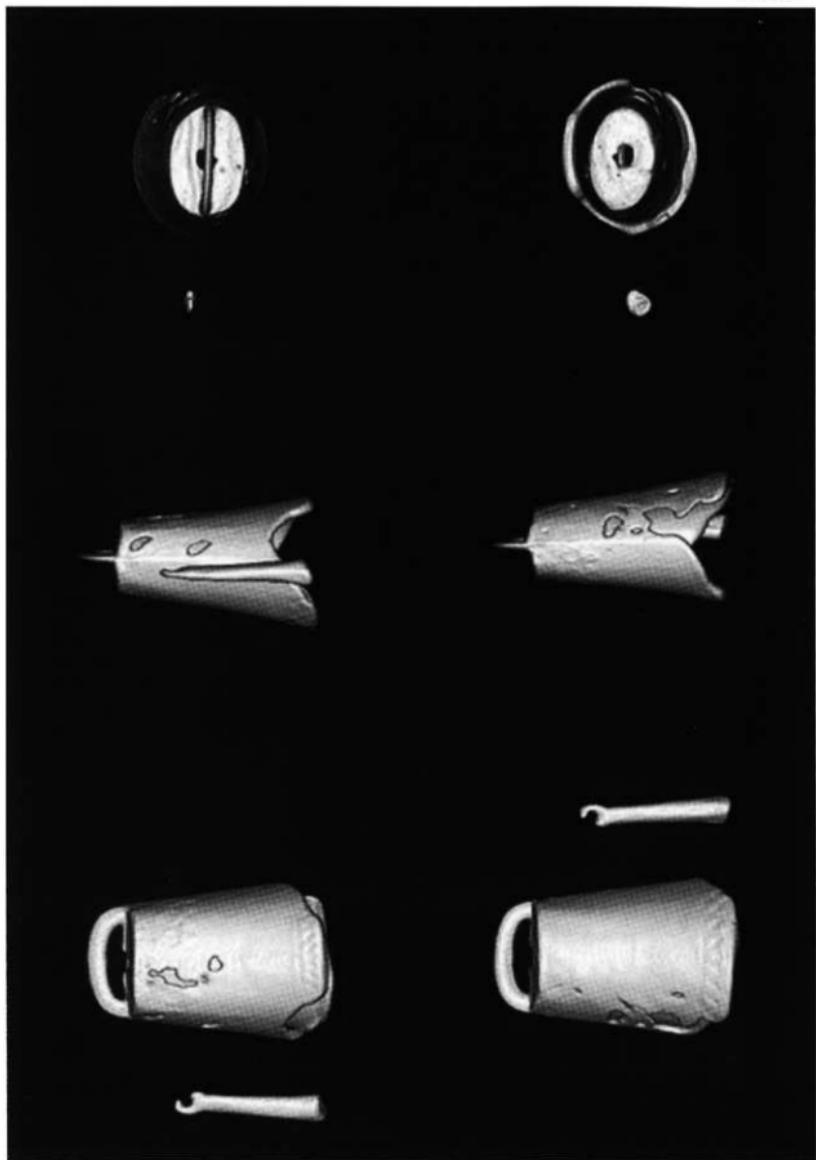
図版2



CTによる断面図(1)

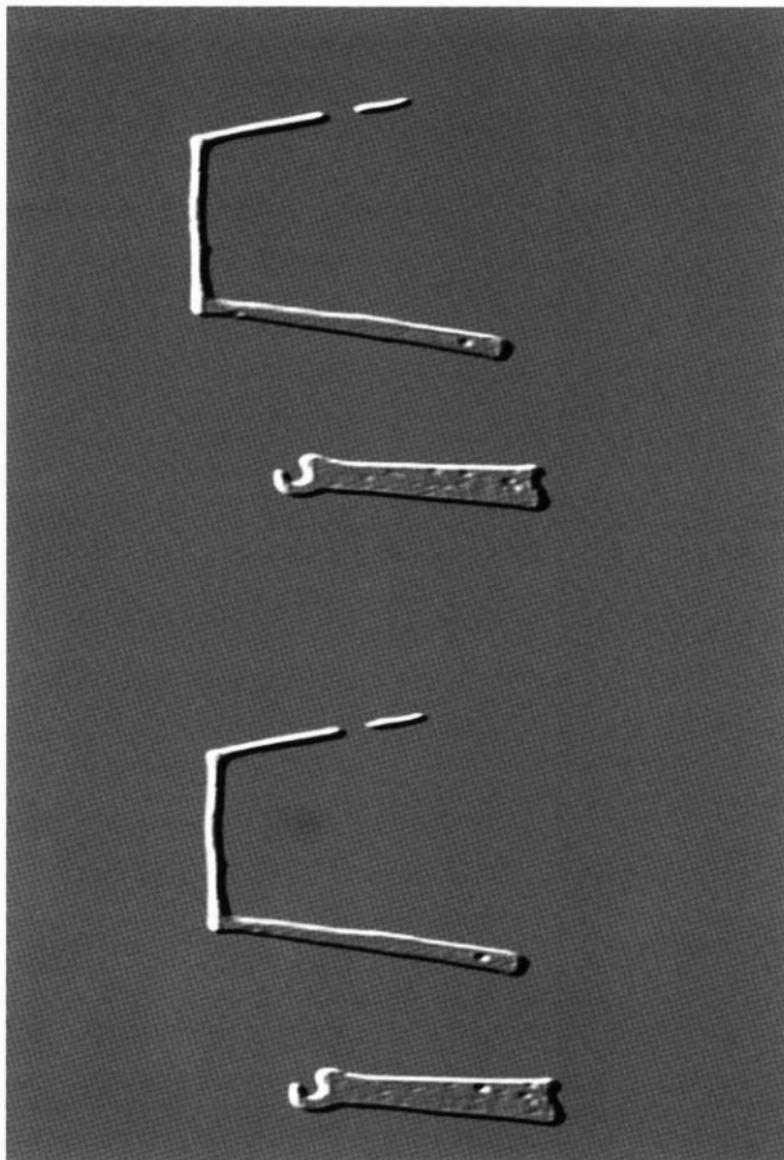


CTによる断面図(2)

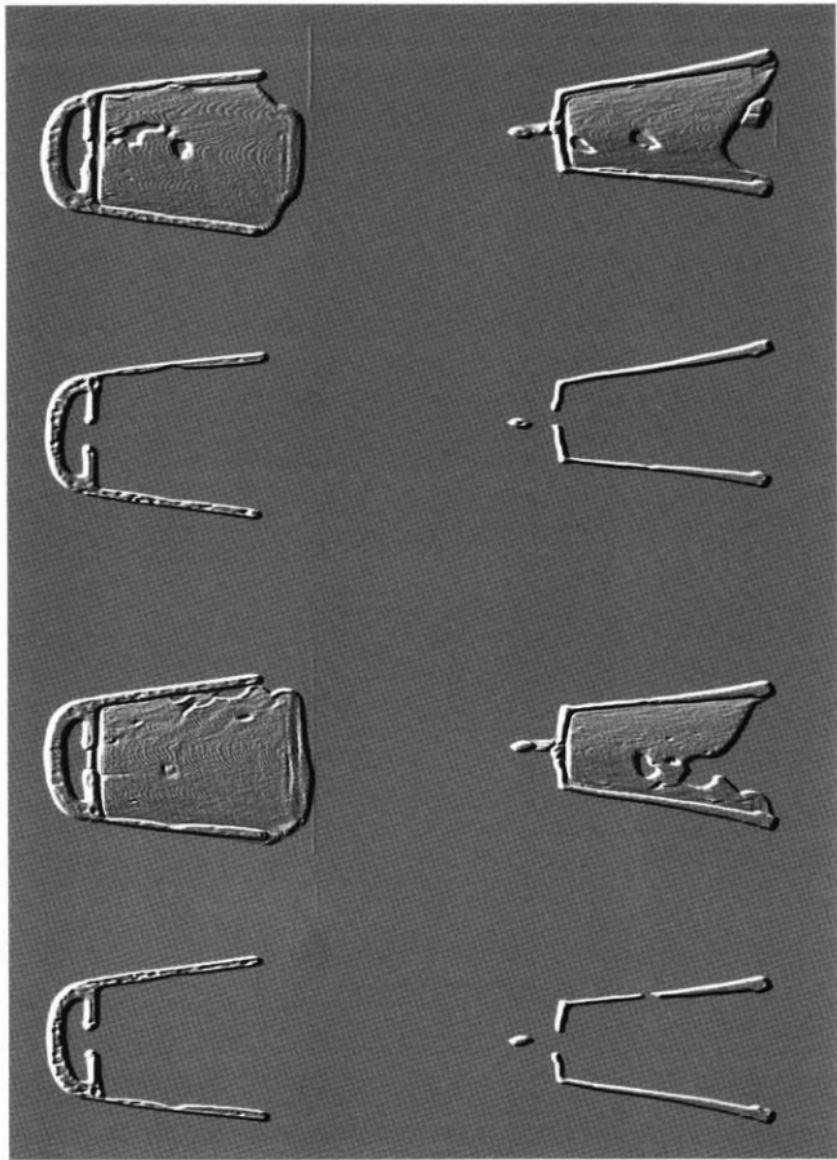


CTによる三次元画像

図版4

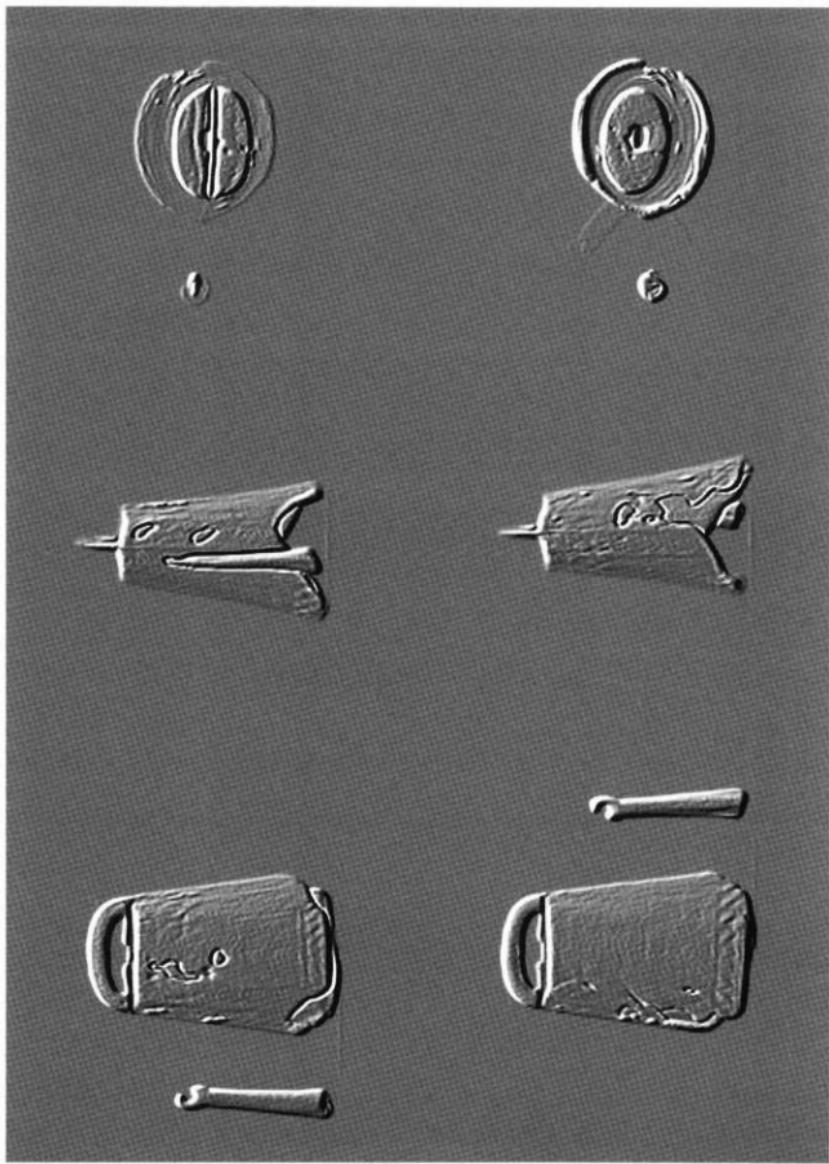


CTによる断面図（1）画像強調処理



CTによる断面図（2）画像強調処理

図版6

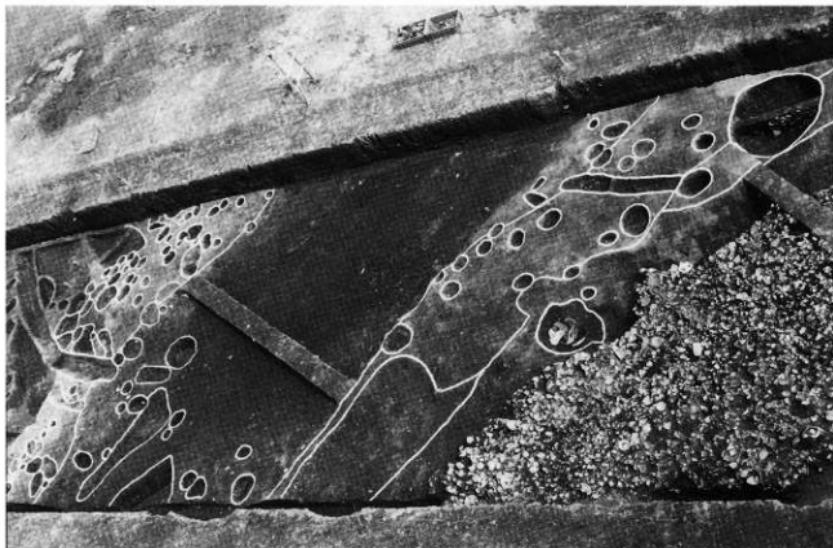


CTによる三次元図 画像強調処理

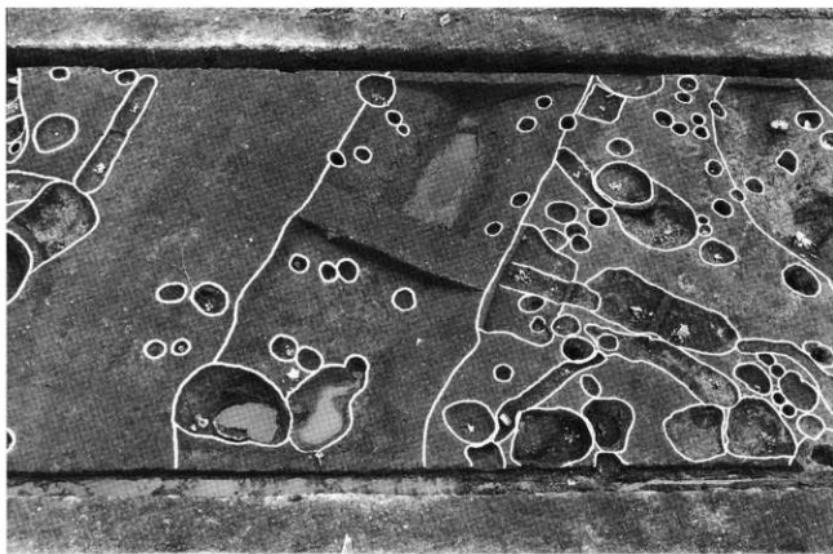


発掘調査航空写真（上が北）

図版8



第1調査区第2遺構面SD-1・2上層



第1調査区第2遺構面SD-3上層



第1調査区第32構造面SD-4・4'

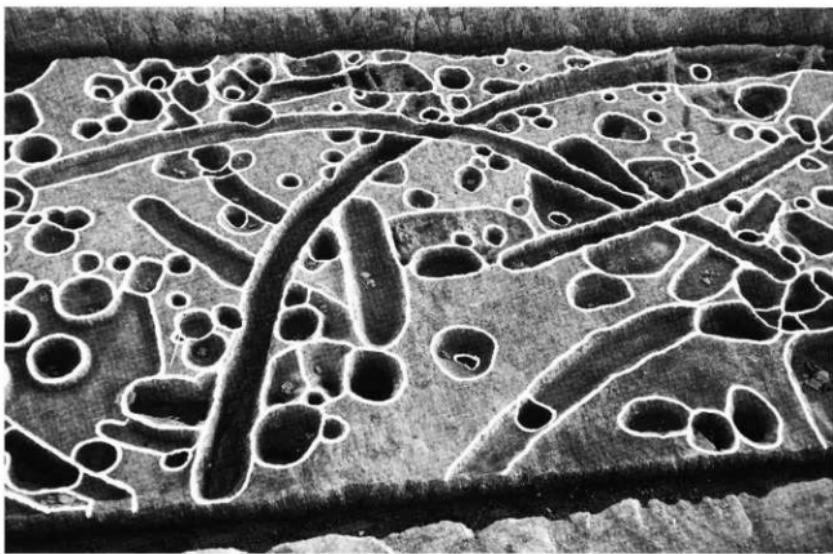


第1調査区第3構造面SD-5・5'

図版10



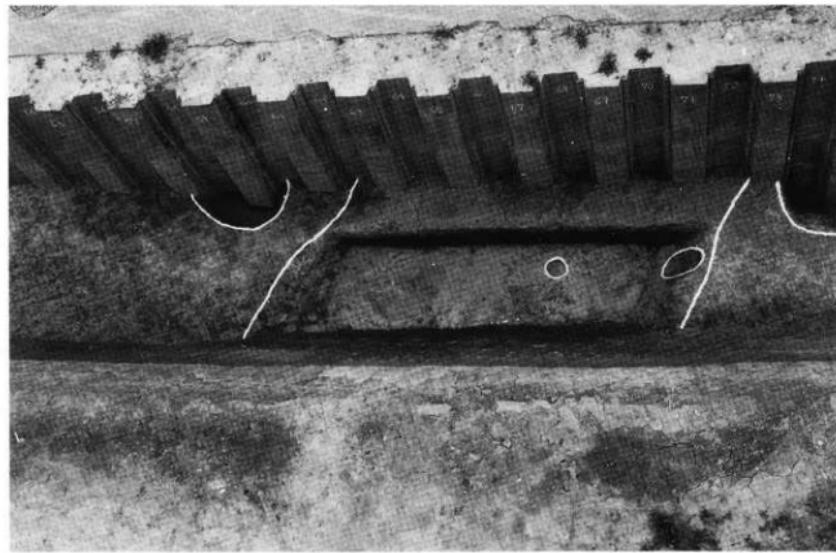
第2調査区第2遺構面（西側）



第2調査区第2遺構面（東側）

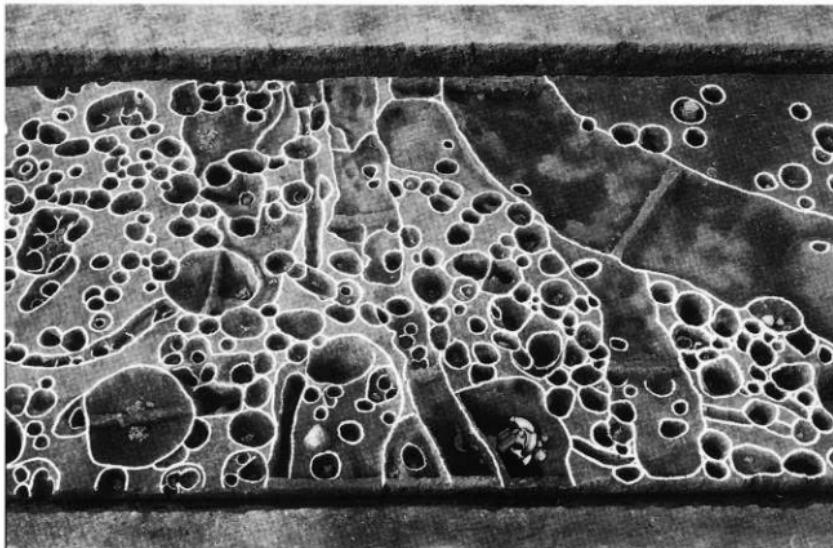


第3調査区第3遺構面SD-2

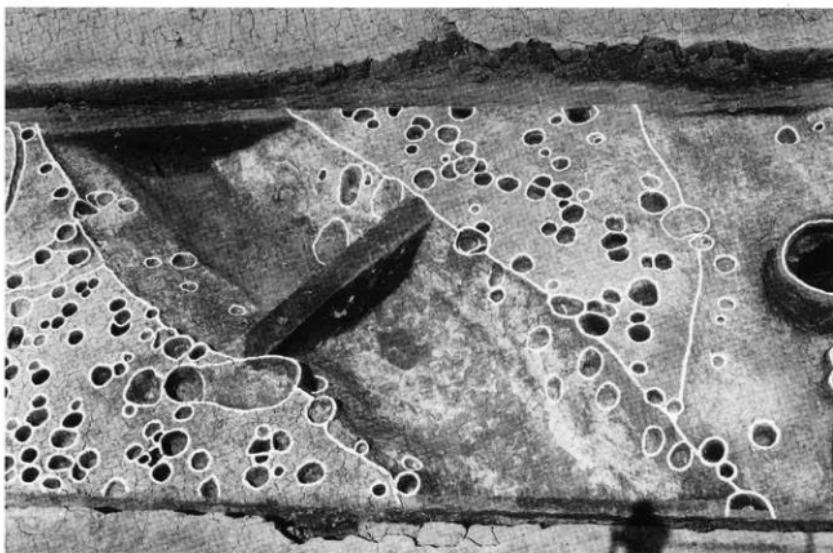


第6調査区第3遺構面SD-1

図版12



第4調査区第2遺構面SD-10

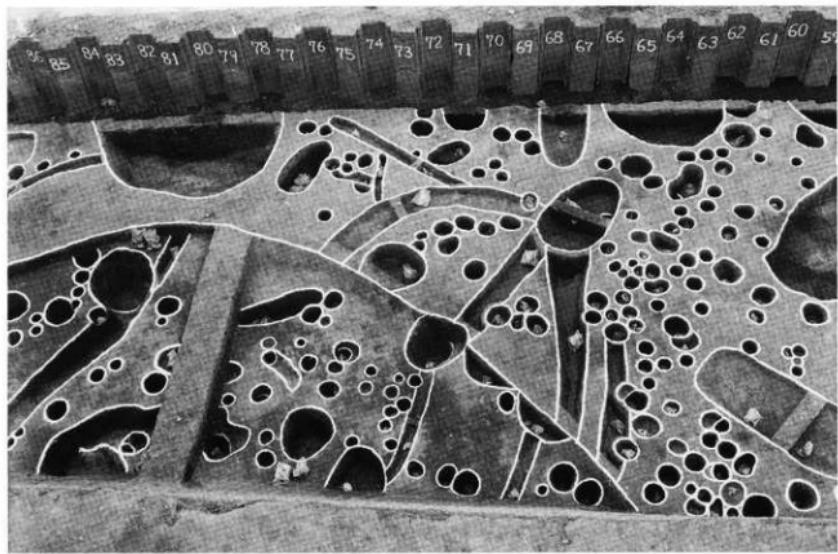


第4調査区第3遺構面SD-1

図版13



第4調査区木器埋め土壌



第5調査区第2遺構面

図版14



第5調査区第3遺構面



第5調査区第3遺構面SD-5